落　　凋

凋落・全

如是文庫

如是文庫

凋落

凋落・全

凋落

潤落

凋落

如是文庫

凋落

暁烏敏 著

本書を
妻を先だて、泣いてをる兄弟
夫を先だて、泣いてをる姉妹
に捧ぐ

はしがき

今年の五月加藤君が、「昨年奥さんの病氣の時から、本年死去せられた後にかけて、あなたの書かれたものを一冊にまとめたら、どうです。事實は小說よりも面白いといふから、興味もあるし、又他の同じやうな境遇にをる人々の救ひにもなりませう」とすゝめてくれられた時に、私は本書を編輯することを思ひつきました。

本書に編めた文字は私のやゝ緊張した氣分の時に書いた文字故に、本書は妻が私に遺してくれたものゝ一つとして保存したいやうな氣がするのであります。それですから本書は一面からいふと、妻の墓であります。又一面からいふと、本書は私の涙の記念であります。

世の中には自分の妻のことをほめると、のろけるというて嘲ける人もある

やうであるが、私は妻をほめることのできるのを喜ぶのであります。自分の妻を一種の所有物のやうに思うてをるやうな人には、私が本書に書いたやうな氣分が、わかつて、くれることができまいと思ひます。

私は聊か信ずる所があつて、自分ながら、うら恥かしい愚癡の涙の記を世に公にいたします。

本書に錄した妻の歌は、妻が折々私に贈つた歌の中から選び出したのである。

又本書には、高光君の筆になつた「安田のお母さんへ」の一文と、藤原君の筆になつた「淨華院樣へ」の一文とを輯錄させて頂いた。是れ亦亡妻を偲ぶよすがと思ふたからであります。

本書の校正について、藤原、木場二君の勞を感謝せねばなりませぬ。

卷頭に載せた妻の寫眞は、昨年八月二十日に私の鄕里の修道會に集まられた兄弟姉妹と共に撮影したのを中村金藏氏の勞によりて一人たけぬいだのであります。妻は昨年の修道會にはいたく疲れたものと見えて、すんでから、「來年もこんな會があれば、房は遠い所へ行つてゐます」というてゐました。本年はその語の如く房子は遠い國へ往つてゐないのであります。さて來年は……

大正二年六月廿八日

小石川の浩々洞にて

曉　烏　敏

目次

一　行……一
二　行……一一
三　加賀より……二一
四　時雨るゝ野道……二三
五　溜息の中より……二九
六　かくして私は凋落して行くか……四一
七　瀕死の病人の背を擦でつゝ……六五
八　妻の死……七五
九　みだれごころ……一二一
一〇　やみ……一四三

一一　房子のこと……一六一
一二　安田のお母さんへ……一七一
一三　淨華院様へ……一七七
一四　思ひ出……二一一
一五　愚癡……二四九

一。行

明治天皇の崩御遊ばしたにつき、私はせめては七々四十九日、諒闇の第一期だけでも謹慎に喪に籠りて御心を味ひて追恩の生活をさせて頂かうと思ひつきました。はて、どんな生活を爲すべきかと考へて見ました。平素からなまけもの丶私の事でありますから、何一つできそうにも見えぬ。然し何か一つ行をやつて見たいものと思ひまして、ともかく五十日間は毎朝五時に起きて誦經する事と、五十日間精進する事卽ち魚鳥の肉を食はぬ事とをやつて見やうと思ひつきました。

毎朝五時に起きやうと決心したには二つのわけがある。一には、明治天皇は毎朝五時に御起床遊ばさる丶ときいてゐながら、私がいつも朝寢をして居

た事が勿體なく思はれ、自ら五時に起きて見て、陛下の御恩の萬分の一を味はして頂かうと思ひましたのであります。これは私は性來の朝寢坊でありまして、二十年前にゐました中學の寄宿舍では今でも私の朝寢であつたことが傳はつてゐます。又私を知つてゐらるゝ方は私といふ名と共に朝寢坊といふことを聯想せらるゝ事であります。私は何が嫌ひぢやというても朝起きほど嫌ひな事がないと申しても、まづ〳〵云ひすぎではあるまいと思ひます。で、今度は自分の一番嫌ひな朝起きといふ一つの行をやつて見て、生活上のひつかゝりをこしらへ、其にひつかゝる度に、聖恩を味はして頂かうと思ひついたのであります。

次に精進をするといふことは、佛者の習慣上、喪中は精進する事にきまつてをる。今度は父の喪と同じ程度の喪に籠るのだなと思ふと、どうしても魚鳥の肉を食ふ氣がしない。平生と異らぬ生活をしてゐますと、いつのまにか喪に籠つてをる事を忘るゝやうになる。所が魚鳥の肉の食ひたい者が、之をたべぬのだから、少くとも毎日二回は陛下の喪中であるといふ事を氣づかずにはゐられないやうになるのであります。ともかく平生の生活とはかはつた生活をすることが、御恩を思ひ出すについて尤もよい方法であると思ひます。こんなやうなわけで、五十日間だけ精進をしやうと決心しました。

私はこの五十日間は、何を犧牲にしても、この二つの行だけをやつて見たいと決心しました。之を決心すると同時に自分の身體の健康であるやうにと念じました。そうして半途にして行が破れねばよいがと思ひました。そこで私は自分の我慢心と名聞心とを利用して、この行をやり通さうと思ひまして、かやうな行をやると、家族や世間の友達に發表して、之等の人々から監視せられ、行が破れたと云はれては殘念であるといふ我慢心と、とう〳〵感心に行をやつたと云はれたい名聞心とにをだてられて、どうでも、身體の健康

の許すかぎりやり通さねばならぬやうにしました。

やりかける時に家族の者も、友人もできぬであらうと、冷笑しました。私は之に一種の抵抗心がでて來て、どうでもやつて見たいといふ力み心も起きた。

精進は直ちに實行し、朝起は八月一日から實行した。三十日に旅にして崩御を承はり、早速歸國の途につき三十一日鄕里にかへり、そのあくる日から實行しました。

毎朝五時前に起き自ら梵鐘を撞き、明をあげて佛前に座し、明治天皇の尊儀に對し經を誦しました。始めの内は、時の來ぬ前に眼がさめた。然し起きるのがなか〳〵苦しかつた。この時に南無阿彌陀佛と稱へて念佛のかけ聲ではね起きた。この時はきつと、聖恩を思ひ出した。誦經の間も至極ありがたかつた。ところが、日が重なるにつれ、横着になつて、眼ざまし時計に起されて漸く眼さむるやうになつた。然し身體がだん〳〵慣れてくるから、さほど苦しみを感じないで、念佛のかけ聲もなく、聖恩を思ひ出すでもなく、たゞ機械のやうに床を出るやうになつた。御經を誦しましても、やはり機械的になつてしまうと、難有いとも思はず、從つて聖恩を思ふ事も薄くなり、早くよみをはらうとあせるやうな氣も起きて來るのであります。

精進も初め四五日は、腹の中が何だかたよりがないやうに思はれましたがだん〳〵日がたつと菜食が別に苦にならぬやうになつた。苦になる内は、苦になるについて聖恩が思ひ出されました、苦にならぬやうになりますと、時には喪中である事すら忘れてしまふ事が度々あるやうになりました。

私がこの行を初めますと、私の家族は隨分迷惑を感じた事でありませうが皆が總がかりで、私と共にこの行をたもちて、私の行をつゞけさしてくれたのであります。

先々今日まで三十餘日間、御護りの中に、どうやらかうやら行をつとめさせて頂きました。さうして私はいろ〳〵の教訓を頂いた事であります。

第一、自分がこんなほんのまねごとのやうな行をつとめますと、自分がいかにも、先帝の御恩を知つてをる者のやうに思はれ、從つて世の中の多くの人々はふまじめな御恩知らずばかりのやうに見ゆるのであります。こゝに憍慢心がおこり、こゝに自負心がおこり、こゝに輕蔑心がおこつて來るのであります。かくて私は親鸞聖人が、

惡性さらにやめがたし
心は蛇蝎のごとくなり
修善も雜毒なるゆゑに
虛假の行とぞなづけたる。（『和讃』）

と仰せられし、修善も雜毒であると申されたことが、しみ〴〵味はれるやうであります。怠つては固よりだめであり、つとめてもやはりだめな奴であるといふ事を知らして頂いたやうであります。

第二、自分がこれだけのことをして御恩報謝をやつてをるといふ氣持が離れられぬと見えまして、他人に對して話をしましても、いつのまにやら、「せねばなりませぬ」とか、「せずにをられぬではありませぬか」とか、「せらるゝ筈である」とかいふ口調になりまして、いかにも道德的、教訓的になつて、いつのまにやら徹底した法悅のよろこびがなくなるやうに思はれます。私は今日まで三十餘日間ちとばかり行がやれたについて、信仰が浮き〳〵して徹底しないやうに傾くやうな氣がします。かくて慧空師が、道德を以て甘き毒と申されたことがいかにも意味の深い事であると味はして頂けるやうであります。

第三、行に力を入れてをると、法悅とか、歡喜とかいふことはいつのまに

やら薄らいでしまふやうな氣がします。知らず〳〵他力攝取をよろこぶといふよりも、自分で菩提の道を進んで行きつゝあるのであると思はるゝのであります。身體も丈夫で行のつとまる人は、このつとむることに力を奪はれてしまうて、つとまらぬ者をお助けの大悲をよろこぶといふことは、實感ではなくて、推定のやうになる傾きがあります。

第四、眞宗の意義からいふと行がつとまつてをらぬのであるが、ほんのまねごとのやうなことでもできると、早よい氣になつて、御恩を忘れ、自分に力量を認めやうとするのであります。故に知らず〳〵自力に落つる傾きがあります。

第五、私は今度少しばかりの行のまねごとをして、凡夫のする善根は要するにだめなのであるといふことを知らして頂き、どこまでも、憍慢の奴であるといふことに氣づかして頂いたことを有難い事と思ひます。

以上五個條をあげましたが、要するに行に傾けばよろこびを遠ざかり、自力我慢に陷り易いといふことを、今度の御大喪によつて氣づかして頂いたといふに過ぎませぬ。

行を表としてお勸めになつた法然聖人の門下に多くの流派ができ、信を表としてお勸めになつた親鸞聖人の門下に流派ができなかつたのは、行の自力我慢に流れ易いといふことを詮はして下されたやうに思はるゝのであります。

かくて私は、

願力成就の報土には
自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら
如來の弘誓に乘ずなり。（親鸞聖人）

の『御和讃』を、しみ〴〵有難う頂かせて貰ふのであります。

あゝどうしてもだめな奴であります。かゝる者を救はずば我も正覺ならじの誓ひがあり、永劫の修行のましますことが喜ばるゝのであります。

（九月二日郷里にて記す）

二。行

諒闇第一期五十日間は、まあ〳〵豫定の如く行を終らして頂いた。そして殘つたものは何であるか。

九月の十七日には、結願の御經を讀んだ、勝利者のやうな氣持ちになつてゐた。

二十一日の夜行で家を出て、京都に行き、二十二日の朝は桃山の御陵を參拜し、同日午後は伏見別院に於ける修道會に出席し、二十三日には本山でつとまる先帝の奉弔法會に參詣させて頂く積りであつた。ところが、人間の積りはあてにはならぬ。

二十日の朝から妻は發熱して床を出ることができない。母は頻りに咳嗽を

せらるゝ、自分は水鼻が出て頭が重い。二十一日になるも、妻は床を出ることができぬ。母は頻りに出發を見合せと云はるゝ、つひに立ちよる筈であつた福井の佐藤氏へ電報で斷はつて、一日だけ樣子を見ることにした。母の咳嗽もやまぬ、妻の病氣はます〳〵わるく、惡寒がして湯婆を入れる、發熱して氷で冷やさねばならぬといふ始末、とてもたつ氣になれぬ。この時に、私は喪に籠る行を終つたから、看病の行を與へられたのだと思ひまして、各地の道友におことはりをして、病人の看護をすることにした。妻の病氣は、だんだんわるい。月の終りになつては、たゞインフルエンザの重いのぢやといつてゐた町の醫士が首を傾けるやうになつた。金澤病院長を招くやうになつた。院長の見える二三日前にツベルクリンの注射をやつて見たら反應がある。そこで病名は結核性のカタル性肺炎と名けられた。熱は毎夜十二時頃から來るのだから、毎夜睡眠不足が續いた。母は氣管支炎といふ病名を得て服藥しながら働いてをらるゝ。私も診察して貰ふと、肺結核が去年よりも進んでをるといふ。

どうしてかう一時に家中の者が病氣になつたかといふに、尤も遠い因はいろいろあらうが、近い原因は諒闇五十日間の行の疲れである。五十日間精進で營養不良、而も五時間か六時間の睡眠、特に追恩修道會の一週間は母でも妻でも私でも殆ど毎夜三時間位しかねむれないといふ始末であつた。元來が强壯でない所へ、この劇しき行動は、とう〳〵身體を痛むるに至つたらしい。さうして見ると、私一人の思ひつきで、母を弱らせ、妻を肺病にまでしたかと思ふと眞に申し譯がない氣がする。自分の身體を害したこともしまつたと思ふが二人、特に重病を得た妻にすまぬやうな氣がする。已後どうでもせめて床を出るやうになるまでは介抱しやうと思うて、どこもかも、まゐることをお斷りして、看護人として働くことに決心した。

毎日の仕事は、三回濕布をとりかへること、湯婆を入れ氷嚢をあてること、驗溫器を以て溫度を計ることなど、母の助けを得てやつてをる。つひに今日で三十七日目になるが、今に快方に向はうとは見えぬ。母はずん〳〵よくなつた。自分はツベルクリンの反應は確にあるが御飯がうまいので大丈夫のやうに思ふが、妻は毎日三十九度已上の熱が出る。今朝のごときは四十度近い熱が出ると云ふ始末である。一週間ほど前から妻の郷の母が見えて介抱を助けて下さるゝので大きに結構である。

とにかく、今月まで三十七日間看護の行をやつてゐて多大の教訓を得たことであります。

一。肺病についての驚きは先年已に遭遇してをるから、妻のも、自分のもさほどにびつくりもしなかつた。然し一兩日快方に向ひかけ、あゝこれでよいと思うてると、又わるくなつたりすると本人の失望よりも看護してをる自分が失望してならぬのであります。其内に持久の精神を得て暢氣を學んでをるやうな始末である。只何事もあてにはならぬ、豫想の通りにならぬといふことが第一に味はれた事である。

二。病人が苦むと、冷やすとか、さするとかしてをる。其内に自分がねむたくなると、病人をほつからかしていつのまにやらねむりこける。かくて自分はどこまでも自己本位の奴であるといふことを知らして頂いた。

三。看護をしてをる間に、病人には云ふことのできぬやうな、恐ろしい、自分ながら嫌な思ひも湧いて來るので、つく〳〵自分は不實な奴であることが明に見せつけられた。

四。病人があんまり苦むと、どうにかしてやりたいと思ふが、どうすることもできぬ。折々は病人に腹立たせたり、淋しがらせたりすることによつて、自分の無能力者であることを見せて頂いた。

五。病氣になると、神經が過敏になる。看護してをる自分も隨分神經が過敏なのであるから、時には世の中の一切を悲觀し、總ての人、家族の人々までが冷淡なやうに思はれ、穴へでもはいる心持ちになる。さうすると、又いろいろの親切が加はつて來て、いつまでも怨んでばかり居られなくなつて、世にみてる慈光に接せずにはをられなくなつて來る。平素はあんまり人の親切を深く感ぜぬ私も、看護をしてをるうちに、人の親切に涙を流すことが度度あり、從ひて、世に惡人正機の本願を味はして頂くことが度々あるのである。

六。病人の看護をし、又自分が病氣の折には、どうしても死ぬといふことを思はずにはをられぬ。死ぬといふことを思ふと、一面孤獨の感に襲はれてあちきなく、さみしいが、一面解脫を感じて、念佛が自然に出て下さる。さうして未來の淨土が何となう慕はるゝやうになる。

七。看護をするやうになつて特に切實に味ふことができたのが、

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにおはします」

（『歎異鈔』）

である。それに

「いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

（『歎異鈔』）

の言が難有う頂かれる。又折々は念佛と共に

「娑婆永劫の苦すてゝ
淨土無爲を期すること
本師釋迦のちからなり
長時に慈恩を報ずべし。」

の『和讃』や

「生死の苦海はとりなし
久しくしづめるわれらをば
彌陀弘誓の船のみぞ

のせてかならずわたしける。」

の『和讃』が口ずさまるゝのである。

八。諒闇五十日毎日鐘をつくのに天下の仕事を感じてやつてをつた。今亦看護をして繃帶をまいたり、足をさすつたりする時にも、數千人の聽衆に大法を宣傳する已上の大事をやらして頂くやうな氣がする。これが大法の敎へにあはざりとせば、隨分こんなつまらぬ事をしてゐては、などと思ふたかも知れぬが、慈悲はいふことでなく、味ふことである、宗敎は言說にあらずして、信行にあることを味はして頂き、小事に大事のあることを知らして頂く身にとりては、こんな、今まではつまらぬと思ふたことを、一種の喜びを以てやらして頂けるのである。「資生產業皆是佛道」との敎訓も實に難有いので、四十日間、一卷の聖敎をよまず、殆んど新聞をよむ餘裕さへない生活をしながら、御恩を味はして頂けるのが、偏にこの汚れた口にあふれ出て下さるお念佛の力である。（十月二十六日病人の枕頭にて）

三。加賀より

木場君、毎々のお文難有う、母の病氣はだん〳〵よろしく、家政をやつて下さる。妻の病氣はよかつたりわるかつたり、毎日卅九度已上の發熱である。今朝の如きは卅九度八分もあつた。然し折々無熱の時があるので、不幸中の幸である。ツベルクリンの反應があるから肺結核ときまつてをる。私にもツベルクリンの反應がある、音もわるいといふので服藥はしてをるが、飯がうまい、介抱してゐてもあんまり疲もせぬ、病人の病人介抱、どちらが先きに行くのだか、さつぱりわからぬ、たゞ來世の得脫のみぞ。

病人がもし床を離れるやうになれるまでは、どこにも出ないでできるだけの介抱をさせて貰はうと思つてをる。で當分は東京へも出られぬやうに思ふ

原稿もまとまつたものはとてもできぬ。萬事よろしくたのみます。

廿三日には京から態々佐々木兄が來てくれた。

各地の道友諸兄姉から御見舞狀を頂き、又は物品を給はり念佛の助緣として頂き、謝するに語がない位であります。一々お禮も申しませぬので、略儀ながら茲にお禮を申します。

諸兄姉よ。死にますぞ、萬乘の陛下さへ崩御せられました。私共もやがて死ぬのです。信仰も、念佛も、この死に當面しなくては總て座上の空論ですよ。この死に當面せざるを得ない境遇におかれた、私はそこに幸福を感じてをる次第であります。

み光の下に

十月廿六日　加賀にて

四。時雨るゝ野道

隣村のお寺の報恩講にまゐつて
説教をしてをるうちに
にわかに時雨がふつて來た
人々があわてづらをして
けろ〳〵してをるをみながら
ゆつくり話して
高座を降りるとすぐ
あるじの僧にいとまをつげた
お傘を持ちなさいといふので

かりてさした
白衣のすそをはしをつて
この村を出た

向ふが自分の村であるのだが
時雨にかすんでぼんやりしてをる
自分はこのぼんやり時雨れてをる村にかへつて行くのだ
いつもはれ〴〵と笑ひ顔で
玄關に迎ひにでてくれた妻は
あゝいつも晴れた聲をしてゐた妻は
この四十日來病もあらうに
肺結核といふよくない病のために

日夜四十度近い熱を受けて苦んでをるのだ
自分の歸つてゆく家はこの妻のなやんでをるところなのだ
ゆくては晴れぬ時雨の空に
日は高い筈なのだに世間がくらい
妻は漸く二十八才である

道ばたに菜の花のかへり咲きが野菊にまじつてうつくしい
あゝしほらしい
ふと三本ばかり折つて
鼻のところへやつてかいで見た
やはり春のやうな甘い匂がするこの花を
熱に苦しんでをる妻に見せやうと思ふ

この時だん〳〵寒さに向うて咲いてをるこの菜の花
種をもむすばずにしぼんでゆかねばならぬ運命をもつてをる
この菜の花
この菜の花が病める妻の運命のかげのやうに思はれた
いやな氣になつた
こんな花を見せては
却つてはかない思ひをおこさすであらうと
つい田の中へすてゝしまうた
花ははら〳〵とちつた
ちらぬ花は莖と共に田の中に落ちた
すてる位なら折らねばよかつた
やがてしぼむ花のしぼむひまもまたず折りとつて

しかもすぐに田の中に葬り去る自分がひどうざんこくのやうに思はれて
又病人の運命を思うた
頻りに病人の上が氣になり出した
急ぐ野道の石は高く
風を孕んだ時雨はこきつけ雨となつて
衣の袂がしたゝるやうになつた
急ぐゆくての村はうすぐらい
自分の心もくらい
借りて來た傘が破れてゐたが
雨がもつて
うなじに冷たい雫がかゝつた
おどろいて家に急いだ

南無阿彌陀佛があらはれて下された

（十月二十八日）

五。溜息の中より

○

九月の十四日に乃木大將の殉死の號外を見た時には、何となく身がぞつとした。さうして自分の不實がありゝと見えたやうな氣がした。

暫くすると桂さんへのよいつらあてだと思うた。宮中の高位の人々には隨分ひどい痛棒ぢやなと考へた。かう思ふ時には自分の考へは、自分の者としての乃木大將の死ではなくなつてをるのである。

ひどい奴ぢやわいと、自ら耻ぢた。

大分日がたつて、ふと、乃木將軍は、義人であると思ふ。『史記』の「伯夷傳」を讀んでみた。伯夷叔齊は首陽山に死

した。乃木將軍は、陛下に殉死された。
伯夷叔齊は武王には及ばない。
孔子は、武王と伯夷叔齊と兩方をほめられた。
乃木將軍は義人である、然し王者の格がない。
やはり第二流の人だ。
とやうに思ふた。
又少し日がたつてから考へた。
あの世で、乃木將軍が先帝陛下にまみえられたら、
陛下は、どう仰やつたらうか。
自分の賴みに思ふ友人が、自分の死んだ後直ちに自分の後を追うて死んだとすると、自分はこの友人に對してかういふであらう、
「君の熱情はうれしいが、早まつてくれた。」
自分は、死ぬとすると、自分の後に殘つて、自分の志をついでくれる、友人の方が自分と殉死をする友人よりは賴み甲斐があるやうに思ふ。
乃木將軍は情の人である。智を以て判斷する事のできぬ人である。
小學教育をしてをる某夫人、私に云く、
「乃木將軍がおかくれになりました。先生、私は宗教のない方は淋しいやうに思ひます」
と。この夫人は信仰厚き人である。

○

青年が老人のいふことに感服するやうになつた時に、國運は傾きかけてるのである。
青年が世の中の秩序とか、階級とかいふことに重きをおくやうになつた時に、彼の發達の芽が凋みかけたのである。

○

溜息の中より出て下さるお念佛が一番難有い。これこそお念佛とおの字をつけずに云はれぬやうな氣がする。

○

病人の苦しさうな寢息を聞いてをると、今もたえるか今もきれるかと思はれて聞いてをるこちらの胸がをどる。

病人の生命の危いことを感じてをる自分は、自分の生命に就ては存外無頓着であつて、出息入息をまたずといふことに氣のつかぬでをる奴であると思うた。

○

病人が

「いつ死ぬとお醫者樣が仰やりました」

と問ふたから、自分は、

「お醫者樣にきくまでもなく、常に私が佛說を語る通り、今とも知れぬ生命ぢやぞ、」

と答えた。

○

病人が、その病氣が快方に向ひかけたと喜んでをるやさきに、引きかへしてわるくなつた時落膽のあまり、

「私は、こんなにして、だん〳〵死に近づいてゆくのです」と、いふたから自分はすかさず、

「さうにちがひないぞ、熱がさがつたとよろこぶ一日も死に近づく一日である。熱があがつたと悲む一日も死に近づく一日である。お前も一日一日死に近づいてゆく、私も一日一日死に近づいて行くのだ。」

といひました。

○

壯健な人が千百言を列ねた見舞の文は病人の心を動かさずして、病人が書いた葉書の片語が妙に病人の眼に涙あらしむるのである。

○

人の家に永い勞ひをしてをる病人のあるのを見ると、介抱する人も、定めて飽いてをらるゝであらうと思うた。然るに今度自分の妻の病を看護しかけて今日で八十八日になるが、一向飽かぬ。飽かぬのみか、初めの十日よりは次の十日、その次の十日といふやうに、だん〳〵かはいさと大事さがまして來る。

自分が妻が病氣になつてから始めて、平素は浮調子にしか味はれなかつた妻に對する愛情を深く味ふことができた。

○

能く難有いことを夢にみる女同行が、

「私は晝も夜も佛樣が私につきそひづめに護つて下さるといふことを、毎晩夢をみることで知らせて貰ふ、外の御方は私のやうに夢を見なさらぬと聞くと、やはり私は人樣より佛樣に餘計にやつかいをかけてをる奴であるといふことを知らして頂きます、」

というて泣いてよろこんでをる。

○

ツルといふ十八歳になる娘を失ふた母親が領解して、ツルが死ぬ時に、お母さんツルはお先にまゐりますが、やがて極樂からお母さんを迎へにまゐります。お母さんの手をとる者があつたらツルぢやと思うて下さい、と申して死にました。今思うて見ると、今日私がツルが死んだについて驚いてお念佛さ

せて頂くやうになつた。このお念佛がそのまゝツルが手を引いてくれることぢやとよろこんでゐます。」

といふのをきいて自分は何となう胸が迫つた。一所に聞いてゐた同行達も皆泣いた。ツルといふ娘は腹膜結核で死んだのだ。彼女はわからぬ〳〵というてゐたが一邊よく話したらそれから安堵してよくよろこぶやうになつて、往生を遂げたのであつた。

○

木越重政君がもう死ぬといふので、東京から態々叔父さんが參られた。重態なのを見て叔父さんが、

「重政や、今度はどうもお前はならぬやうぢやから覺悟をきめるがよいぞ、」

と申さるゝと、重政君はほゝゑみながら、

「叔父さん、叔父さんは死ぬ覺悟など出來ますか、私は覺悟などできる位なら阿彌陀樣をたのみませぬ。」

といふたといふことを高光君から聞いた。

○

宗教家は政府の提灯持ちをする時に、その本職を抛つたのである。宗教家が政府の監督をするやうになつた時に、その本職を亡してをるのである。

○

炭が火にならうとする時が尤も火勢の強い時である。已に赤くなつてしまうと燃燒力を減するのである。

自分はこの現象を見て之を信仰の上に味うてみた。

信仰が燃えかゝりの時は、能く人を燃やすが、已に圓熟し赤うなつてしまうと人を化する働きも鈍くなる。

常に現實の自己の炭に慈悲の火の燃えうつるやうにあらしめよ。順ひて燃燒力が滅せざるであらう。

○

大正元年の下半季ほど、身心を煩勞したことは、自分にとつては二十年來ないことである。

本も讀めず。文もかけず、たゞ毎日給仕のやうな仕事をした、此の下半季をふりかへつて見ると、愉快な感がある。この快感も二十年來に味ふたことのない快感である。

それは外ではない、この下半季ほど信味を深めて頂いた覺えがないからである。

○

自分に親切があつて、妻の介抱をするのではなうて、妻が自分を慕ふ切なる情に引かれて、不實な心を持ちながら少しばかりの看護をさせて貰うてをるのである。

ところが、之を見た友人はよく看護をしてやると感心をしてくれる。妙なものぢや。

○

歴史の力は偉大である、然し偉人の力は之よりも偉大である。

○

人力車夫の弱くて早く走らず、乘つてゐても、いら〳〵するやうな奴に限つて酒代を請求する。

之に反してきつい氣持のよいほど走る奴は酒代を請求せぬ。

請求する奴にはやらぬが、請求せぬ奴にはやりたい。

○

總ての友人の葬式まゐりをするやうな氣になることもあり、總ての友人から弔うて貰ふやうな氣になることもある。

○

一波の音、木枯の音、雨だれの音、ランプの火の燃ゆる音、湯のにゆる音、炭のはぢく音、汽車の行く音、病人の息の音、筆の紙にすれる音。この一音一音に複雜な表情があり詩がある。

之等の總ての音の中心に靜座すると自分の心臓の動悸の音が聞ゆる。雞の聲も聞え出した。夜は更けたのである。（十二月十六日夜記）

六。かくして私は凋落して行く乎

「降りては消え、消えては降りたりし雪は、兩三日來漸く積ること一尺餘、かくて當分「食雪鬼」となるのである乎。名もなき寒村の土塊と、やがてなると思へば、男泣きに泣けずには居られない。「歸命無量壽如來」の叫もこんなことゝ味はれる。

我々は相對的なる小なる現在を離れて絶對的なる無限の大現在を味はば久遠より盡未來際にかけて、未生已前より死後までかけての大自我を如來の御光の裡に發見する外には、空しく名も知れぬ片土の土となるのである。死んでも死に切れない想ひは地獄に入るであらう。地獄の鬼も此の恐ろしき我を見ては逃げることゝ思はれる。（――曾我量深兄の書簡の一節）

「私の父も昨秋來胃病で、一時は私どもゝ覺悟致しましたが今日ではやゝ快方に趣き、無常の世に常住の心を起すやうになりました。何分老體と寒さとは中々に父を苦めるやうでまります。私もそのことや、寺務やらで殆んど忙殺せられてゐます。病人の看護といふものは煩惱の私にいろ〳〵不平の超梁を生じます。然し幸に御名によつて靜められます。（――柏原祐義兄の書簡の一節）

一

「自分はこれだけの男であつたかな。」

「こんなぐあいで、自分は果てるのかな。」

こんな思ひが湧いてくると、たゞ悲うなつて、曾我君の云ふ通り男泣きに泣かざるを得ないのである。

どんな悲さであるか、何故に悲しいのであるか、などと問ふだけが野暮である。何かなしに、

「こんなぐあひで、自分は果てるのかな。」

と思ふと、たゞ涙がほろりとこぼれさうになるのである。

こんな思ひを文學者に云はしたら、人生の凋落を感ずるの氣分とでも云ふのであらう。

「葬られてしまふ」、「このまゝで田舍の土となつてしまふ」といふことは、はしやぐ心を、底の底へ引きさげて行くやうな氣がするのである。

二

自分が、この氣分を最初に味ふたのは明治四十一年の五月であつた。どうかどうかと案じてゐた自分の病氣がいよ〳〵肺結核であると宣言せられた時に襲はれたのがこの氣分であつた。忘れもせぬ五月の三十一日に、駿河臺の佐佐木病院に行つて診察を受けると、政吉博士は丁寧に診斷して、左肺下部、右肺上部に濁音を聞く、肺病と宣言せらる。

その瞬間は何とも思はなかつたが、診察室を出て藥局の前に藥をまつてをると、「自分は之で果てるのかな」といふ氣分が湧いて來た。さうすると、いつの間にかあつい涙が頰を傳うてをるのであつた。自分は不治の病に罹つた

かくして私は凋落して行く乎

のだ、遠からず死ぬのだ、自分が死んだら一人の母上はどんなに悲まるゝことであらう、家はどうなる事か、妻はどうするか、やりかけた仕事も中止せねばならぬ。何一つ成し遂げた事もなくて死んで行くのかなと思ふと、自分自身がみじめになつてならぬのである。今から保養をするには、仕事は出來ず、金はなし、あゝどうしやう、など心は千々に碎けるのであつた。其時に、この悲痛の私を救うて下さつたのは、何となう口にもれて下さつたお念佛であつた。

南無阿彌陀佛

と聞えると私は蘇生した。今までの心の雲霧はどこにか去つてしまうて、心に解脱を感じた。何を汝は煩うて居るのか、我は汝の總てを引受けてやる、母も家も妻も仕事も皆引受けてやる、汝の一身も引受けてやるとの佛の聲が聞えたので、心が蘇生になつた。我若し無量壽佛の無碍光の大智慧を用うるが如くんば、無量の藥師の藥を以て生にあらしめたまふであらう、世に用なくば死を命じて下さるゝであらう、と思ふと、自分の身も輕くなつたやうに思うた。歸途お茶の水橋を渡る時は綠したゝる草木がいきゝと躍つて居るやうに感じたことである。（この事に關しては拙著『清澤先生の信仰』に詳しく書いておきました）

三

其後、自分は或は直接に御名により、或は間接に人の慈悲を通じての如來の加護によつて、今日まで生存せしめさせて頂いて居る次第である。したい保養もさせて頂き、飲みたい藥も飲めるやうに、惠まれて居るのである。ところが、喉元通れば、あつさを忘るゝの風情で、いつかのまに、自分は、とくに死んでゐる奴である。全く惠みに生かされて居る奴であるといふことを打忘れ、身體がやゝよくなると、自分で種々の計畫を立てたり、方針もたて

たりしてやつて居るのである。

四

然るに昨年の九月廿日に妻が病床に臥してから、今日まで回復いたさない。それを看護して居るので、つひ、五年前の悲哀と安慰とを新らしく味はして頂いた次第である。

私は大抵の事は一二年先まで豫定をたてゝやつて居るのである。九月には二十一日から家を出て、京都、大垣、岐阜の道友を訪ひ、東京に出て讀書する積りであつた。所が九月の二十日に妻は床につく、母も自分も風邪に罹るといふ次第で、とう〳〵家を出られなくなつた。始はあまりすぐれぬ同志の母と二人で、妻の介抱をして、十日たつても癒えぬ、名醫を招いても見た。二十日たつても癒えぬ。自分は平生やつてをる仕事とは、丸きりちがつた仕事をやらねばならぬことになつた。

看護婦を傭うてとも思うて見た。然し病人は私の看護でなくては、滿足しないのと、どうせ冷たい金で傭うた看護婦が、ろくなことしてくれもしないだらうと思うたので、まゝよ自分は病に倒れるまでと思うて、母と共に自分で看護をすること丶した。

五

その爲に、自分が豫定してゐた仕事の計畫はさつぱりはづれて來る。さうして、病氣が肺結核といふ難病のこと丶て、不治とも言はる丶位であるから一寸本腹しやうとも見えぬ。私は讀書もできず、執筆もできず、道友に法を傳ふることもできぬ。法を賣つて食を得て居るに類する生活をやつて居る自分としては、金にも差支へが生じて來たのである。病氣がだん〳〵長くなつ

て四十日五十日とたち百日とたつて、前途にいつ回復するとも思はれぬ病人の横に居るので種々の事が思はるゝのである。

死ぬとして考へても見たり、長くなつても、全快にならなくても、そろ〳〵とたてるやうには、今一度はなるだらうとも思ひ、こんなぐあひで三年も五年も居るのかとも思うて見るのである。其後かわいさにほろりとすることもあれば、病人に見られたらあなへでもはいりたいやうな淺ましい、恐ろしい想ひに耽ける事もあるのである。

六

病氣が三十日ほどたつた頃から、今まで門外へも出ないで看護に專注してゐた自分は、二三時間で往復のできる法用ならば、つとめるやうにした。是には高尚な義務の想ひではなくて、お布施が頂けねば藥が買へないといふやうな自分ながらさもしいと思ふ腐つた根性もまじつてゐた。晝の內の看護は母や手傳ひの方々にまかし、特に十月末から十一月末にかけては妻の實母が看護に來て下さつたので、自分の手は大きに助かつて夜分だけ自分でするやうにした。

看護人の仕事は、濕布をして、氷囊で冷したり、或は食餌をたいてやつたり、便器を運ぶなどのことである。お藥をやつたり、便器をかへたりする時に自分は、なさけないやうな氣分にも襲はるゝこともあれば、又一種の誇りを感ずることもある。天下を動かす筆をとるとうぬぼれてをるこの手に、不淨をかへてやるのかなと思ふとなさけないやうに思ひ、天下の志を持つてをる自分が一妻女の爲めに全身を縛られてしまはねばならぬのかな、などとも思うて、又そのうちに、いや自分は今この尤も近い、尤も憐むべき一女の爲に、止むを得ずしてにしても、一身を捧げて看護させて貰へるは、大に天

下の爲に働いてをることになるのである。小事は反りて大事である。文をつづり說敎をして、數千の人と交るより、この一病婦の爲に看護の勞をとるのは、より大なる仕事であるので、自分は敢て之をやつてをるといふやうな高慢な考へも起つて來た。

七

思ひは種々に馳せまはるのであるが、之をまとめていつて見ると、病人の身の上に就て考ふる時と、自分に關して考ふる時とに分たるゝのである。

先づ病人に就て考へて見ると。病氣は結核である、世界の名醫が不治と銘うつた結核である。今日までできるだけ、種々の對症的治療はしてみたが、總ては害となつた。だん〳〵衰弱して行くのが見える。とても全治の望みはないがせめてもう一度床をいで、そろり〳〵としてなりと十年も生きてほしい、どうしてもそうしてやらねはならぬと思うて見る。さう思うてをるうち病氣の經過があんまりよくないと、とうとだめなのだな、死ぬんだなと思ふと胸がをどる。この頃新聞を見て黑枠つきの廣告を見るとぞつとする、特に荆妻何々といふ廣告が厭である、又道に葬式に出逢ふたり又他家の葬式に參詣したりして平素よりも感が深いのである。種々に考へて見ても、先づ病人の病氣については闇黑ばかりで光明はないのである。日々沈んで行くのが見えてをるやうな氣がするのである。

八

病人に關係した自分に就て考へて見る。病氣が永いとすると、自分は總ての進歩が止つてしまふやうに思はる、。他の友人はどん〳〵夫々の世間的の事業をやつて行くのに自分はだん〳〵凋落して、田舍の土にうもれてしまはかくして私は凋落して行く乎

ねばならぬのか。だん〳〵世に捨てられて行くのだなと思うては前途は闇黒である。又病人か病氣が重くなつて死ぬとする、若し死ねば、自分の思ひでは後妻など向へる氣がしないのだが、はてさうなつて來ると、孤獨の自分がみじめに思はるゝ、夫に宿業の深い奴であるから、どんなくだらないことをしでかすかも知れぬと思ふと尙恐ろしくなる。若し又後妻を向へるとした所、ろくなことがあらうとも思へぬ。さうするとどう考へて見ても、自分、この明治十年七月十二日に世に生れた曉烏敏は、このまゝに土になるのだ、前途の闇黒に向うてをるのである。かうなると自分の運命が恐ろしくなる、宿業に身ぶるひせざるを得ない。

自分は、善導大師が、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に沒し常に流轉して出離の緣あることなし」と仰せられたる事や、先德が必墮無間と仰せられ、地獄一定の徒者と仰せられたることが、眞に自分の身に迫つてをる味ひとして味はるゝのである。

九

かうなると、何事も極端に走り易い自分は、此世界の破滅を呪ふやうな氣分にもなる、友を怨み、世を呪ふ氣分にもなる。三惡の火坑焰々として入らんと欲する、とあるのは私の今の身の上である。私のこの精神狀態は、或は肺結核を病んでをる妻よりも、危ぶい、恐ろしい所にをるのであるまいか。

一〇

灰色の人生位でない。闇黒の人生が私の生涯である。はねても、とんでもこの私は、生れかはるにあらずんば、この樂みのない望みのない生涯より外に何にもない。父には早く別るゝ、家は貧しい、自分は肺病になる、妻も肺

病になる、黒幕だ、闇黒だ、悲惨なるは私の一生である。どうしやう。どうもできぬ。あゝ。生れざりしならばとの歎聲も漏れそうになる。自分は、最早僅かばかりの過去の戀の思出と、過去の名利の思ひ出の跡を追うて生きねばならぬのか。追想に生きる人は、みじめであると、他人の身の上に思ふたのに今は、自分の身の上となつてをる。曉烏敏はとても浮ぶ瀬がないのである、このまゝ沈むのである。夫れともダンテの地獄に苦む罪人が男女相抱いてをるやうではなくて、妻は妻で、自分は自分で別々に苦んで行かねばならぬのである、水の中へか、火の中へか、恐ろしい自分の未來、闇い自分の現在、あゝ。

一一

春は既に過ぎ去つたのである、凋落の秋になつたのである。花は再び咲くことがあるとしても、そは歸り咲きである。歸り咲きは實のらずして、あはれに凋み行くのである。秋の木の葉が一葉づつ土に化しゆくやうに、私の生命は刻一刻に闇に葬り去れてをるのである。

一二

私自身の運命がかやうにはかないものであるばかりでなく、大方の人生は皆かうではあるまいか。

幼にして父に別れ、二十歳を過ぎてまもなく、三人の子供を抱いて夫に別れ、長男が大學を出るやうになつて肺病に罹つて死んだ。まもなく、この忘れ形身の子も死んだ。又嫁も死んだ。次男が大學を卒へて家督をとつた。その次男は今肺を病みてをる、三番目の女の子の婿亦肺を病みてをる。私はこの婦人の運命を思うて溜息に終らざることはない。

こんなのは極端の例ではあるが、どんな人も、洗ひ出して見れば、皆闇い未來をもつてをるのではなからうか。

近代文學が現實の悲哀を描き、人生の灰色を嗟歎するのは、猶如火宅との世を名けられた釋尊の教訓と共に、人生の眞を穿つたところではないか、尠くとも私自身の運命を名けられたやうに思ふ。

一三

自分が、このまゝで土に化してゆくのかなと、悲哀に沈む時に、この自分の悲哀の爲に泣いて下さるゝ一人の母のみじめな運命を思はずにはをられぬ。母は私已上のはかない一生を持つてをらるゝのである。生れてすぐ母に別れ繼母にいじめられ、十六歳にして私の家に嫁して來られ、貧窮の中に家を支へ、私の十一歳の時に夫に別れ、漸く私の成長するや、私の肺病を聞いて胸をどらし、嫁の肺病の介抱をせなければならぬ。私はこの母の溜息を聞く時に涙を飲むことがどれだけあるか知れぬ。

一四

いかに思うても運命の手は黑い。

この運命は、他の爲せし所にあらずして、自らの業の成せる所であると思ふと、業報の繫縛の恐ろしさに、戰慄せずにはをられぬ。

一五

かやうにどん底の道をあるいてをる私に、何よりのたよりとなりてゐて下さるのは念佛である。

南無阿彌陀佛

とは、一切が汝を離るゝも我は汝を見捨てぬぞ、汝の泣く時に我亦汝と共に泣いてをるぞ、總てを我にまかせ、我汝を引き受けて守るぞ、助けるぞ、の慈悲の招喚である。私は六年已前に、この聲によりて蘇生したやうに、闇の道を歩いてゐても、常にこの聲によりて洗はれ、息吹きかけられ、新らしくせられてをるのである。この聲の聞ゆる所に、光明があり、希望があるのである。

一六

如來はこの御名を賜ふのみならず、そのあたゝかき光明を十方に照し、三界の萬法に顯現して、私を守護して下さるゝのである。

先年肺病に罹りし時には未見の友から突として百金を惠まれたるを始めとして、諸方の道友の惠みによりて、私にとりては過分の保養もさせて頂いたことであつて、私の今日あるは全くこの惠みより頂いた生命が殘つてをるのである。

今度も亦昨年の九月已來、殆んど萬事を抛つて妻の病氣を介抱してをると如來は諸方の道友の上に現じて、時には心こめたる品物を寄せ、時には數十金を藥餌の料にせよと贈られ、或は數百里を遠しとせずして、態々見舞に來り或は看護に來るなど、勿體ないほどの恩寵を受けて、ろくに蓄へもなき貧僧が百二十餘日、過分な看護をさせて頂いたのである。殆んど毎日これはこれはと驚いて恩寵の厚きに泣いてをる次第である。

一七

自分の道は闇い、自分の運命は恐ろしいが、その闇にほんのりと明りを與へるのが、諸友からの惠みである。念佛によりてえしめせられたる諸方の道友

の恩寵は、この恐ろしい業を持つてをる妄見の奴を攝取して下さるゝのである。かやうにかあいがつて頂くと身は重患に罹つてゐながら、ふんわりとした羽根布團の上にねかされ、輕き羽毛につまゝれてをるやうに思はるゝのである。之を思ふと自分は、このまゝにすうと死んで行つても遺憾がないやうに思ふ。恐ろしい業報を持つた私がこのまゝに、柔かい恩寵の羽根布團につつみこまるゝが私に對する最も深い意味のある人生であるやうに思ふ。私の妻の一日づつの生命も恩寵の賜物である。私や母の生命亦恩寵によりてつながせて頂いてをるのである。死も亦恩寵の手をはなるゝことではないと信ぜずにはをられぬ。

一八

妻が病氣になつて已來は殊更に自分の罪の重きことを感ずること深く、之れに加はる恩寵の手あついのに感泣せずにはをられぬ。この澁とい私も、髓に水かけらるゝやうな心地になつて泣くことが屢々あるのである。夫を思ふと、今度の妻の病氣は私に私自身の黑い影を見せて、その黑い影を抱いて下さる光明の溫か味を味はさして下さるゝ方便と思はずにはをれぬ。さうすると妻の病氣はこのまゝ私の爲の病氣である。維摩居士が、一切衆生が病むのに我亦病むと申したやうに、妻の病氣は私の爲の病氣であるのである。私を導く爲に妻が苦しい病を現じてくれるかと思ふと、時には疲せた自分の妻も觀音菩薩のやうな夢で姿を拜むことができるのである。順てこの妻の食事に心を配り、便通を處理することも、僧としての自分に適當な仕事であるやうに思はるゝのである。

一九

かくして私は凋落して行く乎

『涅槃經』に「一切衆生の壽命の大河は、如來壽命の大海に流入す」と仰せられるやうに、私の骨は土に埋るゝであらうが、私の生命は如來のみ名の中に蘇生するのである。

かくて、私は行きつまつた人生の上に、この人生を抱擁する無限大悲の光明のましますことを喜ぶのである。暴風にあうた舟が怒濤にゆられ〳〵て燈明臺の光を望むやうに、私は既に毎日苦しい業報の波にゆられながら、念佛の光明を望まして頂けるのが力である。而もその舟には、漕手の助けを得、食物を與へらるゝやうに、その次ぎその次ぎと人を通して如來のみなさけの抱いて下さるゝのが難有い。私は四十一年の五月に味うた他力攝取の一念の味ひを、去年の九月已來妻の病氣を介抱することによつて、一層深く明に、痛切に味はして頂いてをることがありがたいのである。

二〇

私はこのまゝ田舍の土と埋めらるゝであらう。然し私は寵兒である、仕合者である。凋落の秋の日に、明年の春の花を待つ身は、雪がふつても、霧がふつても、どことなく春の陽氣が通ふ心地がする。往生淨土の欣求はこんな心持ちの代表したものでもあらう乎。

生の難道に足を痛めながら、そこに湧き出る清水によみがへり、死の黑影におのゝきながら、そこにきこゆる招喚に力を得てをるのが、信に眼のさめた者の中心悠々の風光である。

（一月十九日の夜、病人の枕頭にて苦しさうな息をきゝつゝ草し了る。本日八田君來りて病はだん〳〵進むと診斷して行つたのである。多田君今頃洞に入つてをらるゝかなど思ひつゝこの文をかいた）。

七。瀕死の病人の背を擦でつゝ

一

命旦夕に迫れる妻は苦しさうな息使ひで、唯昏々として寢て居る。私はそれを今擦つて居るのである。此の今の思を記しとめたいと思うて、之を筆記して貰ふ事とする。

今の自分の心持は最も緊張して居る樣である。誰か觸る者さへあれば涙が涌いて出る。逢うた者は別れねばならず、生れた者は死なねばならぬといふことは豫ねて聞き、又人樣にもお話して居ることである。

私の心の一部分には確かにすかりとした諦めの思がある。それから又生死

の問題は自分の計らふ事でなく、他力のお力であるから、やがて御親の迎へがあればお淨土參りをすること、自分も信じて居り、又人樣にもお話して居ることである。

二

結婚後十一年、聞法の志厚く、著書、法話等に就いても自分の片腕となつてくれた妻の事であれば、やがて芽出度く御淨土參りをすること、いふ事も、私の心の一部分には確かにある。

然し以上のこの三つの思は、私には唯今では極く微弱な思であつて、最も強い力をもつて自分に伺つて居る氣分は何となう唯だ泣きたい、又泣く連が欲い。胸にこみあげて來る涙は隨分辛い。併しこの辛い涙が私にとつての一番大切なものである。唯このこみあげて來る涙の中から御念佛が出て下さる。

三

鍋が煮えくり返つて來る時に、泡立つて居るのに水を入れると、泡がすぐ消える樣に、涙がこみ上げて來る時、御念佛を申すと涙が消える樣な氣がする。泡が消えるかと思へば又た煮え上る。涙が出ぬ樣になるかと思へば又たこみ上げて來る。その涙の中には、病人に對する悲みの情もあり、愛惜の念もあり、自分自ち哀む思もあり、自分の母の顏を見ては母を哀むの思もある。病人の實母の顏を見てはその實母を哀むの思もあり、一滴の涙も解剖すれば種々の思が含んで居る樣だが、かう云ふ事を解剖してかれこれ思つて居る餘地はないので、何となう唯泣きたいのだ。愚痴だと思ふ、然し自分はこの愚痴から一歩も外に出る事の出來ぬ奴。今まで私は心ある人の妻君の死んだ時は、諦め給へとも、御濟度だとも隨分はつきり云うて來たが、扨て自分の身に

なつて見ると、諦めもある、御濟度だと云ふ喜びもある、あるが矢張り諦められぬのだ、悲しいのだ。口や筆では待つて御いでなさる親様の膝元に早く行けばよいと云はれもし書かれもするが、實際今の自分の心持は、御淨土へはやりたくない。

苦の世界だ、迷の世界だと云つて居りながら、矢張り此の迷の世界に置きたい。

死んでしまうたら、さつぱりした解脫の趣きが味はれるかも知れぬと思ふが、その解脫の思は味ふ事を好まない。

四

私はどうしても愚痴なんだ。釋尊が城を出られ、西行が家を出た時のやうな勇氣がない。

妻が息災な時は、いくら泣いて居ても、小言をいつて居ても、自分の與へられた仕事をする時は、妻の涙も省みないでやつて來たのだが、今此の病苦にせめられて居る妻、本人はもうすつかり諦めて平氣で居る樣だが、自分はもう唯だ意氣地がない。だからといつて乃木大將が先帝陛下の跡を追はれた樣、自分も一緒に死ぬといふ誠がない。この誠のないのを種々の理窟で飾りたてやうとする奴なのだ。かう思うと、自分の涙も矢張り價値のない物であるに違ひない。然し泣きたいのだ。醫者のいふ事を聞き、本人の容態を見ても、とても治りさうに見えないのだが、まだどうしても死ぬ氣がしない。

死ぬぞといつて聞かせながら、自分ではどうも妻が死ぬ氣がしない、矢張りどうしても〳〵治る樣な氣がしてならぬ。

今かうして肩を擦でて居るのが、すべて夢の樣に思はれる。夢なら早くさめよと思ふ。夢の樣に思うて居るのが、種々の人の顏を見て現實であると氣

がつく時に、治つて居つた涙が又沸きかへる。

五

私は、今私と一緒に泣いてくれる人が一番好きである。諦めよといふ人も欲しうない、御催促だというてくれる人も欲しうない。だといつて私のつきあひの爲に泣いてくれる人も欲しうない。今私が中心に持つて居るいふ事の出來ぬ孤獨の思ひ、寂莫の思ひ、この思と同じ（等しいでは滿足できぬ）思で泣いてくれる人が欲しい。

理窟の説法や、感情の訓示、共に今の私には何等の慰藉をも與へない。寧ろ反抗を與へる計りである。唯默つて私の顔を見て泣んだ。此の他何も要らぬ。

この泣く人は誰だらうか、私が涙の中から出て下さる御念佛に救はれるのは他ではない、此の御念佛に依つて私は久遠の昔に、私の今愛情に泣いて居る妻の爲めに、私より以上の思ひで泣き、愚痴の涙で泣いて居る私の爲めに泣いて下さつた法藏菩薩のお涙が味はれる計りである。

それで私は此の場合に至つても、淨土にやるとか、行くとかいふ事では何等の慰めも感じもない。愛惜に泣いて居る此の涙、まぎらさうとしても、まぎれやうとしても、まぎらすことのできぬこの涙の私に久遠の昔から今日までふりそゝいで私の眼を濕して下さる此の佛の御親切がありがたい。妻も自分も此の御親切にはぐくまれて居る身である。此の御親切の導きで前途は引かれるのである。御親切の親が用意して下さる未來には私共の思はぬ幸福が充ちて居るに違ひない。もうこんな事を思ふのは既に心が弛んで居る證據である。

六

何かなし自分は煩悩の林の中に愛惜の姿を現じて如來の攝取を喜ばれた親鸞聖人がありがたい。それで『歎異鈔』第九節に「名殘をしく思へども、娑婆の縁つきて力なくしてをはるとき、かの土へはまゐるべきなり」との仰せ、『口傳鈔』の「愛別離苦にあつたものは、存分に泣けよ〳〵」とある御言葉が、自分に最もふさうて居る御言葉の樣に味はれる。

七

私の信仰、私の宗教は、悟る宗教でも、諦める宗教でもなうて、思ふ存分に泣かせて頂く宗教である。

余り書いて貰ふなどと思うて居ると、自然にはや虚飾の自分や眩惑の自分が出て來て、何だか自分ながら氣持が惡い。で自分は矢張りこんなことをいうたり思うたりして居るよりは、病人の痩せた軀を擦でては泣き、泣いては念佛して居るより以上の心ゆく事がないやうに思はれる。（二月十六日、午後三時）

八。妻の死

一

明治十九年四月二十三日に三河國安城町字古井願力寺に生れた山田房子は、その十七歳の暮、卽ち明治三十五年十二月八日に母と兄とに送られて私の家に來て曉烏房子となつた、夫れから十二年間、母をいたはり、私を愛し、能く働き、能く務めてくれた私の愛妻房子は、昨年の九月廿日に發病し已來一日の休みもなく病苦に惱んで、大正二年二月廿一日、彼女が八年間統理して來た慈光婦人會の例會日に、泣いてゐる私共を後に殘して、淨土に旅だちました。

病氣は、始めから毎日數度の高熱が來るだけで、病名は久しく不明であつた。病んで二ヶ月ほどたつて漸く結核熱であることに四五の大醫方の意見がきまつた。結核は淋巴腺と、腸間膜と肺とを犯し最後に腦を犯して、とう〳〵命を奪うたらしい。主治醫松江氏は勿論八田君は友人として遠い所から度々通うてくれられ、其他の諸氏も、いづれも皆心から療治に骨折つて下さつた。多くのお友達から本復を念じて頂いた。さうして私もどうかしてせめてもう一邊そろ〳〵出養生にでも行けるやうにしてやりたいと、薄情な私は私だけに種々心を勞し身も勞して介抱をして見ましたが、すべてそのかひなく、佛に召されて往生しました。佛樣もむごうございますと恨む心もおきます。ともかく房子はこの世にゐなくなりました。

房子は、愚癡、無能、虚假の私の本性を能く見せてくれ念佛を遺して泣いてをる私をおいて往きました。

昨年中、何分ひどい病の事故に何邊も思ひ切つて見ましたが、やはりいよいよとなると未練が出ます。而も本年に入つてからやゝよいやうにも見えたので、一時は病人も私共も喜んでゐたことゝて百五十五日の勞ひであつたが、やはり二月廿一日の死は突然のやうに思はれてなりませぬ。

二

病中全國の道友から珍らしい物や又はお金を頂き、病人は、このまゝ死んでも羽根ぶとんにふんわりとつゝまれてねるやうな氣がしますと、いつも喜んでゐました。多田君、牧村子を始め多くの遠方の友達まで態々見舞うて下さつた。

暮から春にかけては陸中の花卷の高等女學校に奉職してをる赤堀孝子さんが寒中休暇を利用して態々看護に來て、便器の世話までやいて下さつた。一

月の六日に歸られた頃は病人も私共もよほどよくなつたと喜んでゐましたのに。

一月七日に房子が熱のやゝさがつた時に自ら筆を執つて實家の兩親にあてた文をかいた。

大へん、御寒うなりまして、皆々樣御きげんいかゞと御案じ申て居りましたに、父上樣よりの御たよりによれば、母上樣には御持病起りし由、こちらにての御疲れと存じ御案じ申ます。少しはおよろしう御座いますか、どうぞ〳〵御大事に遊ばして下さい。

私事先便さし上げて後、また逆もどりいたし、よい便りができぬため御無禮いたしました。しかしいろ〳〵との皆々樣の御世話樣にて年改まりてより、熱もやゝうすらぎ申皆々よろこび居ります。

命のことは如來樣の御計らひなれば、御さしづのまゝと御念佛申してをります。

當地寒さきびしく、雪ふりつゞき、人車も運ばぬやうな有樣、かういふ處へ來て頂いては、却て御身體に障りますから御出かけ下さらぬやうに願ひます。

介抱の一段は主人が一心になつて、十二分にいたしてくれますから、それが何よりの力であります。

世の中に苦は絶えませぬが、御稱名の下にどうぞ御安心遊ばして下され。

これにて

一月七日正午　　房子

御兩親樣

御兄姉樣

この文を讀んで泣けて〳〵なりませぬ。一月元日の朝私が、病室の上

の室の清澤先生の御肖像の前で、「絶對他力の大道」と「我信念」とを朗讀して後、病人の枕頭に据ると、房子は泣いてをる。何を泣いたのだといふと、あんな本をおよみになるから泣けますというて、共に念佛した事であつた。

十日には又葉書で、房子からこんな知らせが行つてをる。

皆々樣御變りもありませんか、おかあさんの頭痛はどうやらと御案じいたします。私事春已來氷の世話にならず、大分心持よろしくあります。永の病故身體はとても叶ひませぬが、食はおいしくなりました。朝は淺草海苔に漬物に一椀、晝は何でも主人の心配してくれるものをたべ、夜は牛肉十五匁づつ續けて頂いて居ります。牛乳三合。ほしいものは何でも買うて下さる。どうぞ安心して下され。

一月十日

願力寺樣　房子

一月になつてから、熱は三十八度五分位しかのぼらぬやうになつたはなつたが、衰弱が日に加はり　十七日に八田君が來てくれての診斷にては、いよいよ肺の犯されて來たのが分明になつたと心配してくれたので、私共も大に心をいためた。然し本人は熱がやゝさがつたのと、主治醫がこの分ならば、少しあたゝかうなれば、そろ〳〵起きられませうと申してをるので、つひ死ぬものとも思うてゐなかつたらしい。

一月の廿日に大阪から蜂屋君が態々來て、菜食主義の介抱をしてくれた。さうして二十七日にかへつて行つた。

二十八日に、房子が兩親に宛てた文をかいた。この時は私の目にはだんだん惡くなり、溜息で介抱してゐたのですが、本人は苦しい中にあふむいたまに筆を執つて文をかきました。

たゞ今父上樣の御はがき着、うれしく拜見いたしました。皆々樣御かは

りもなき事うれしく存じます。私事御かげさまにて熱もまづ出ぬ位、普通の人よりは、少しはあるやうなれど、それもだん〳〵よくなること丶存じます。

二月に母上様御越し下さるとや、ありがたき御知せなれど平に御ことわり申ます。二月に入れば、當地はいよ〳〵寒氣つよく雪も澤山ふります。さういふことにおあひなさらぬ母上様の御からだにきつとおさはりがあるにきまつてをります。

病氣惡い方でもなし、介抱の一段は主人が一心に心をつけて下される故決して〳〵心配下さいますな。主人もとても母上様に來て貰へぬ屹度さはりがあるからと申します。御彼岸頃になれば少し雪もきえます。

たゞ〳〵母上様の御出かけをおひかへ下され、却て房が心配です。これにて。

御兩親様
兄姉上によろしく
房

「御彼岸になれば雪も消えます」といふところを讀んで、どうして私は泣かずにをられませう。お彼岸になつて雪は消えぬ先きに自分が消えて行つたのであつた。

三通共に、認めた時は、私が何をかいたのときいても、見ちやいかぬというて、自分で封をして表紙までかきました。今夜御兩親から送つて頂いて、讀んで見て大に泣かされました。介抱の一段にとりては主人が一心にやつてくれるというてやつてくれたかと思ふと、自分のくはせ者であることが恥かしうてなりませぬ。さうして一層彼女がかあゆうてなりませぬ。

二十八日の頃は、だん〳〵身體はよわつて來たのであつた。二月の一日か

ら頭が痛い〳〵といひ出した。主治醫は首を傾けて心配した。淋巴腺結核がいよ〳〵腦を犯して來たのではなからうか、さうすると、あまり久しうはないといふ。私は心も狂はんばかりに悲んだが仕方がない。で二日には兩親のところと、佐々木兄の處へ何時人事不省になり命がなくなるも知れぬから、急に來て下さいと云うてやつた。

頭の痛みは二三日たつとやゝ薄らいだが、頭ががん〳〵鳴るといふ、耳もだん〳〵とほくなり、言葉も少し不自由なやうになつて來た。食事は、何でも少しづつたべるが、だん〳〵うまくないやうになつて來た。

五

八日に佐々木兄が來た。九日には、母上が見えた。雪は大へんにふつた。十日の夕方佐々木兄がたつのだつたから、私は房子に

「兄さんが、この六時にたつて歸られるのだ、もうこの世では逢へまいから何かいふことがあつたらいつたらよからう、」

といふと、房子は二人の顔を見て

「何にもありませぬ、どなたにも何にもいふことはありませぬ。」

とはつきり申しました。

佐々木兄と相談して、法名を淨華院釋尼白香とつけることゝきめた。

佐々木兄がたつ時

「お念佛をな……お藥ものんで……」

といふと

「ありがたう、ありがたう」

というて涙ぐんでゐた。

佐々木兄が病室を出ると、私と同兄と二人で、手をとつて泣いた。その時

ふと私はしばゐのやうぢやと思うた。

十二日頃、私は房子に

「兄さんと相談して、お前の法名を淨華院釋尼白香とつけることゝしたぞ」。

といふと

「白香といふのはあなたが誰かにつけておやりぢやつた」

といふので、

「ぢや染香としませうね、「染香人のその身には香氣あるがごとくなり」とあるからね、」

といふと、房子はだまつてうなづいた。

頭がだん〳〵わるくなつて、腦膜炎になり、人事不省になつて死ぬのだぞと云ひきかす私の辛さ苦しさ、あゝ。

四

八日、九日、十日と雪は、いやが上に降つた。十一日には、村の佛敎青年會で、聖人の六百五十回忌を營むことゝなつてをつたので、高光君先づ來り、木場君、藤原君亦來た。然し法事は明日に延期することゝした。十二日の午後には諸君が去つた。越後の大井氏が見舞に來られた。

病人はだん〳〵耳が遠くなり、衰へが加はつて來た。食もだん〳〵進まぬやうになつて來た。

十五日に京都から態々西君がやつて來た。襖をあけると房子は

「西さんか」

というた。藤原君は案ぜられてならなかつたから、ゆつくり暇をもらうて來たというて十四日に來てくれた。

同夜、廣島の瀬良さんの好意で、佐々木清子が看護の爲に來てくれられた。十二日に學校に行つた三雄も案ぜられて授業が受けてられなかつたというて歸つて來た。

病人はあんまり話さなかつた、折々火箸が六本になつて見えるの、あなたの顔が二つに見えるのといふやうになつた。頭がどうかなりませぬかと、主治醫が見えると、いうてゐました。

「大きな聲でお念佛すると頭にひゞく」

というて折々靜かに念佛してゐた。精神至極安靜である。

十四日の夜であつたかとも思ふ。だん〳〵耳も遠くなる總ての容體がよくないので私は思ひきつて、

「房子、今ぢやとてもだめぢやぞ、どうぢや今生にもう一度お父さんに逢ひたうはないか」、

房子は平生からお父さん思ひであつた。お母さんが介抱に來てゐて下さると、後にお父さんがさぞ御不自由だらうと思ふと、御母さんに來て頂きたうないと申してをつた位に、お父さん思ひであつたから、私はかう問うたのであつた。すると房子は

「房が死ぬまでゐて下さるとよいけど、さうでないと、やはり別れがつらいさかい、」

というて逢ひたいとも逢ひたうないとも云はぬ。すると三河の母さんが

「お父さんはな、法用も忙はしいし、夫に、なんのわしももう暫くの命ぢや、やがてのうちにお淨土で逢へるから、今度は行かぬと云うてぢやつたぞへ」。

と申されますと、ぱつと眼が赤うなつた丈けで、房子は何とも申しませなんだ。母も私も泣きました、さうして御念佛しました。

五

十五日には、新調の夜具と寢衣とができて來た。

去年の秋、三雄が養子に來た時、土產に持つて來た反物がまだ反物の儘であつた。あれを着ないで死んでくれると私等が殘念だから、あれをねまきにぬはすから着てくれるかと云と、着るというたから、急いでぬはせたのが出來て來た。

夜になつて、つらからうがどうかねまきをかへてくれといふと、ウンといふから、家の母と實家の母と私とで着かへさせた。その時には既に衰弱がだんだん加はつて、ねがへりさへ自分にできぬやうになつてゐる。

死んで行くのを見ぬいで、ねまきをきかへさす私共の心の苦しさ辛さ、涙が出てならぬ。

「房や、おまへはねがへりさへできぬざましてゐて、それでお淨土へ行く氣かへ」

といふと、につこり笑うて

「やつて下さるもの、」

と申しました。皆が涙と共に念佛しました。

六

十六日の晝あたりから便通がせはしうなつて來て、十七日になるとますますはげしう便意を催すやうになつた。多くは出ないのである。

「どうでこんなに小便に行きたいのぢやらう、」

「またお手水」

というて、自ら笑うてゐた。私は死が迫まつて來たなと思うて、たゝ泣けて泣

けてならない。

側にゐて泣いてゐたら、

「泣かぬこつちや、泣く人はあつちへ行つて下さい、房はたんと泣いたが、今ぢや泣けぬやうになつた」、

というて私の愚痴を叱つてくれました。

七

私は風邪の氣があつて十七日の夕方から按摩をとらした爲、房子の夕飯の料理カシワの粥は、家の母がやつて下さつた。少し長くもんで貰つてゐたので、まだすまぬのかというて、いたうまつてゐたそうです。尤も側には實母、家母、三雄、清子、西の諸氏がをるのぢやが、やはり私がゐないのが物たりないのである。

十一時半頃になり、例によつて、燒芋を少しと、ヒギヤマ入の牛乳一合とお茶とを頂き、もうねる、というたから皆さんにねて頂いて例によつて私、それに今夜は特に實母も夜伽をして下さることにした。

十二時頃、藥を呑み、清さんが京から買うて來た五色豆をうまさうにしてたべる。私はあんまりたべると腹にわるいぞといふと、すぐにやめました。

百五十日あまり、一邊も藥を飲むことを怠つたこともなかつた、忘れた事もなかつた。

十二時過、皆がねて實母と私と靜に枕頭にゐた。一時間あまりたつと、どうも容體が變になつたで、

「房よ、房よ、」

呼んでも聞えぬやうである。はていよ〳〵迫つて來たなと思ふと、一層かあい〳〵。

やゝありて、ふいと少しばかり顔をあげた。

「房、やがてお淨土へまゐるのぢやぞ、」

と私がいふと、たゞにこ〳〵と笑ふたなりに、元のやうに心臓を下にしてねてしまつた。脈は百二十うつてをる、呼吸もせはしい。皆をおこした。もう今夜かと思うて、皆がかたづをのんでまもつてゐた。まるで皆が死をまつやうぢや。呼んでも聞えず、口もきけず、水ものめぬ、どうすることもできぬ。たゞ皆がよつて死をまつばかり、悲しい、切ない。人力のつまらぬことを思ふた。

段々と夜あけになつた。病人はつらさうなが、まだなか〳〵まゐりさうでもない。皆がお腹がすいて來た。

家の母が、昨日見舞にと、東京の加藤末吉さんが下さつた、カステラを切つて茶を持つて來られた。私も頂いた、皆も頂いた、三河の母も頂かれた。今まで泣いてゐた者が皆カステラをたべてお茶をのんだ。

この時、私は、ふと、殘酷ぢやなと思うた。今死んで行く、苦んでをる者を見物してカステラをたべるでもあるまい。同情も愛も、腹がへつてはなくなるのぢやなと、自分の不實なのに驚いた。實の母上もやはりたべてゐられる。

「お母さん、あんたもカステラをあがりましたな。死にかゝつてをる者を見物してお菓子にお茶が頂かれるとは、あきれはてますな、」

といふと、

「そうですな、」

と、母も驚かれた。

朝がた私は病人の床の中で暫くうと〳〵やつた。そのまに再び、ふと頭をあげた。この時、三雄が枕頭にゐたので、

「三雄か」

というて、又元のやうに伏せつた。一寸頭をもたげると少し見えもし、云はれるらしいが、夫きりで又人事不省になつた。

十八日の日光があかるくなると、村人が心配して集つて來た。今日まで親切に尋ねてくる〻人々を面會謝絶して來たのであつたが、今は名殘であらうと思うて、皆に房子を見て頂いた。

主治醫が見えた。どうもできませぬ、たゞこのまゝにおくより外はない。今夜が危ないというて行かれた。高光君と經國君と來られた。高光君は看護に力をそへてくれた。

十八日は終日終夜、人事不省、皆がよつて、そりや足が冷えぬか、脈がどうぢやと、云はゞ早く死ぬのをまつてをるやうぢやつた。脈も早うなり、呼吸もせはしうなつたが、まだ命はある。

この夜、私は虫歯が痛み出した。死にかゝつてをる病人を人にまかして自分は氷で冷やして貰ふた。この時私の苦になるところは、死にかゝつてをる病人ではなうて、自分の一本の虫歯であつた。自分は百五十日間、親切に介抱したと思うたに、虫歯一本だけの介抱もできなんだのぢやなと思うて、自らが淺ましくなつた。

八

十九日の夕方、八田君が來てくれて、電光で病人の眼を照すと、忽ち知覺がついたらしく、少しばかり首をもたげて、苦しそうに全力を注いで、

「南無阿彌陀佛」

というた。

「房よ、氣がついたか、見えるかい、わしが見えるかい、」

というと、

「だれ、」

という。

「わしぢや、兄さんぢやが、」

というと、だまつてうなづく。

「八田さんが見えたのぢや、わかるかい、」

というと、又うなづく。この時皆が大によろこび、

「わかりますか、」

と、かほを出すと、皆にうなづくのである。三雄が、

「お母さん、お母さん、」

と泣き聲で呼ぶと、眼の中がぱつと赤うなつた。

「どこ」、「だれ」、「しんどい」、の單語と、稀にお念佛が出るだけで、知覺ができたゞけに一層苦しそうになつて來た。八田君が去つた。呼吸は六十あまり

もあるやうになつた。まだものがのめない。皆が泣いてをるが、どうすることもできない。

九

かくて悲歎の中に朝となつた。房子は苦しい中から、自ら咽喉を指さして

「のど、のど、」

という時は、私はどうしやうかと思うた。狂ひ出しさうぢやつた。

「房子、苦しからうが、こらへてくれ、わしはそののどをどうしてやることもできぬのだ、淨土へまゐれば樂になるぞ。

房子、つらいか、おゝかあいや。」

どうかならぬかと、私は涙を彼女の口にぬつた。苦しみはながくやまぬ。水はまだ通らぬ。斷腸の思ひとはこんなのぢやらうと思うた。

一生まじめに働いてくれたのに、どうしてこんなに苦しまねばならぬか、佛樣は極樂に引きとらぬ前に、こんなに苦んでをるのに、なんで救うて下さらぬのぢやらう、こんなことをいろ〳〵思うて佛樣をうらむ思ひもおきました。

午頃、西君が、吸入をして咽喉をぬらしてやつたら少し樂になるまいか、と思ひつき、早速吸入をやつて見た。之が大に成功した。

「みづ、」

を呼ぶやうになつた。筆に水を含ませて口に入れると、うまそうに、ちゆちゆと飲むやうになつた。これでは藥が通ると、先づ氣をつける爲に「六神丸」を半粒ばかり水にといて筆にふくませてのました。ついでヂガレンを〇、一五ばかりやつた。皆が看護の功があつたとよろこんで、醫士以上だとほこつた。病人は水をやると、

「うまい、」

というたり、

「ありがたう、」

というたりするやうになつて。吸入をしてやると、折々は

「ありがたう、」

というやうになつた。然し呼吸はだん〳〵多くなつて來た。午後主治醫に相談して、最後までの執着心のまゝに、カンフルとヂガレンを注射することゝした。

午後四時頃、私が病人の裾のとこに少しまどろんで居る間に、清子が、カンフルとヂガレンの注射を三回づゝやつてくれた。清さんがいふ、

「注射をしやうとすると、

「なに、」

と申さるゝから、注射をすると苦みがうすらぐで、今注射をさせて頂きま

す、少し痛くてもゆるして下さいませ、と申すと、うなづかれました。注射をする時、少し面をしかめられましたが、注射がをはりますと、

「ありがたう、」

と仰やいました。」

二十日の夜になつた、呼吸はます〳〵多くなつて七十あまりとなつた、苦みが加はるやうである。水を呑まし、洟をふきやることは休みなくやり、三十分間毎に吸入をかけた。然し容體はます〳〵わるい。

どうかして、皆がたゝれた後に、家の母と三雄と私とが枕頭にゐた。すると、

「たれぢやい、」

といふから、

「お婆さんと三雄とわしとぢや、皆がをるぞ、心丈夫に思うておいで、」

というと、目がぱつと赤くなり、悲しそうに、叫はぬ手で目をこすらうとしたしました。

「三雄、」

の一語は、一番、房子の恩愛を動かした。養子というても親となり、子となる縁のあるのは、實の子と同じい事だと皆が語りあひました。

夜の十時頃であつたが、私は今夜こそ往生するぢやらうと思はれたから、

「房や、おまへはいよ〳〵今夜はまゐるのだよ、極樂に行つて常にわしについて守つてくれよ、」

というと、ほんの一語、

「明日は、」

と申しました。はてそれでは十二時過ぎてからかなと思うた。夜は更けて二時頃になつた。

臺所には村人が澤山集り片づをのんできばつてをる。病床をかこんで、家の母、三河の母、藤原、高光、西、三君、清さん、三雄、皆がゐた。

ふと私の體が寒くなつた。耳には遠い西の方に音樂の聲が聞える。君等は聞えぬかといふと、何にもといふ者と、何か聞えますといふ者とがある。ともかく私は唯尊うなつて、今までになう病床にある房子はたゞの女でない、私を淨土に導く爲の觀音樣の權化であるのだと思はれて、たゞ房子が尊う見えてならぬ。で衣を着し袈裟をかけ珠數を持つて、改めて合掌恭敬して念佛しました。生來こんな敬虔な感じに打たれた事は覺えぬのであります。

「明日は、」というたが、十二時過ぎれば、明日だから、夜明けまでは、引きとるであらうと思うた。回復の見込はないのだし、いかにも苦しそうだから、いつそ早くお淨土へ引きとつて頂いた方がよいやうに思はれた。側にを る者は皆泣いて別れを惜みながら、死をまつといふ有樣でありました。

一〇

かくて寸時のすきまもないやうに皆で介抱してをるうちに、二十一日となつた。呼吸は八十になつた、脈は細うて、百三十もうつやうになつた。もうまゐるのだぞと云へばうなづく、たま〳〵に念佛し、まれにしんどいと云ひ、筆で呑ましてやる水をちゆ〳〵と吸ふ力さへだん〳〵弱くなつて來た。かあいそうながどうしてやることもできぬ。

九時頃から咽喉がごろ〳〵いうやうになつた。主治醫は昨日、命終の時には、痰がつまるというてゐた故、あゝ迫まつて來たなと思うた。吸入は相變らず三十分毎にやつてをる、時にはありがたうという。

十時頃に痰がつまつて、手にけいれんが來た、はあ、今まゐるのだなと思うて、皆が泣きながら片唾をのんでをる。ごろ〳〵つと痰がつまつて呼吸がた

えかゝると、もがぐ、あゝ今かと思うて見てをると、暫くして又靜に息が通うて來る。

「房よ、おまへは一生よくわしに盡してくれた、何を云ひつけても、やらないでわしに怒らしたこともなかつた。全身の力をこめてわしを愛してくれた、御苦勞ぢやつた。つらからうが、もう暫くぢや、もうお淨土へ行けるぞ、先きに行つてくれ、お淨土に行つても、わしに心をそへてゐてくれ、やがてわしも行くよ。房子ありがたう」。

あんまりのことに、私は口から口へ何遍も水を呑ましたが、それが落ちつくこともあつたが、落ちつかぬこともあつた。この時はまだ知覺があつた。

一遍は痰が切れたが、再びつまつた。今度は先きとはきつうやつて來た、苦しみもましたやうだ、今度こそと思うたに、又息が靜に出て來た。この苦みを見ては、私は佛樣はなんでこの苦惱を救うて下さらぬのか、佛樣の力がないのかなと、佛を恨めしうも思ひ、疑うても見た、世はまつくらがりになつた、おそろしい。するとやはり最後にお念佛に救はるゝのでありました。

この三日間の病苦には、二人の母は申すに及ばず、藤原、高光、西の三君、清さん、私、皆が泣きに泣きました。母は、

「もう死ぬ者の枕元で、そんなに泣かぬことぢや」と云ひながら、あちらむいて泣いてをる。

私は「泣きたいだけ泣きます、名殘を惜みます、死ぬ者も存分名殘を惜んでよろしい。臨終正念を祈るには及びませぬ。」

というて、共に念佛しました。

四回目の痰のつまつた時は、ます〳〵けいれんがきつうなつた。わしは手をにぎつてゐたのに、そをふり放なさうとする。やるまいとすると

「あつい、」

と力強う呼んでふり放した、きつい力であつた。苦しさうに眼を大きう開いて、手をもつて咽喉を指さして、

「なんか、」

というた。すぐさま筆で水を呑ましてやると、ぐつと呑みこんで、

「うまい、」

と一語、これが房子が最終の言葉であつた。

そのつまつて來る痰を切らうとしての努力を見て、生の力の偉大を感じた。丁度、絞罪に處せらるゝのを見てをるやうな氣がした。いよ〳〵今こそと思うてをると、一時は絶えた息が、又靜かに通うて來た。然し知覺はすつかりなくなつて耳も聞えず、眼も見えず、水を吸ふ力さへなくなつた。習慣のやうに口をあける、しかし水をやつてもすふ力もなくなつた。

あんまりの苦みを見たので、母は次の間に行つて倒れました。三河のお母さんは強いと思うてゐたら已にボケてをらるゝ、私も、もうどうかして涙が出なくなつた。今まで介抱してゐた皆が心はどうかなつて一段落がついたやうな氣になつた。私は病室を出て、臺所の村人と容體を語つて胸を開いた。其時丁度某氏より御見舞にとて百圓送り越された。涙が流れた。病室に來る清さんが介抱してくれてをる、他の諸君はケロリとしてをる。

先日からかほどの苦しいあひだにあつた病人自身の精神の靜平なことは驚くばかりであるので、皆が信の力を仰いだ。房子の臨終は肉體の苦痛と信の心の靜平とをくつきりした線で色どつて見せてくれました。私はどこまでも男性的の女だなと思ひ、武士の切腹の落ついた態度を思ひ、清澤先生の臨末を思ふた。

この四回目の痰が來たのは十二時頃であつた。それから後一二回、同じの弱いのが來た。人の命はもろいやうで強いものであると思うた。

注射をしたゝめに、こんな苦みを長くさせるのかなと思うて、すまぬ氣がしました。モルヒネの注射でもしてやつたらばと思うたが、いくら苦しんでゐても、早く殺すに忍びない。たゞ茫乎として見守つてをるのみである。

三時頃に主治醫が來て、室を闇くして總ての刺激をなくしたら安靜になるだらうというて行かれた。その通りにして、皆沈默に入つた。

五時頃から呼吸は早いは早いが、やゝ樂そうである。この調子ならば、今夜まだ大丈夫だらうから代り〴〵にねむりませうと、私は少しまどろみかゝると、清さんが先生々々と起しに來た。來て見ると、

「シヤイネストック氏の呼吸が來かゝりました。」

と西君がいふ、休んでゐた皆が來た。病室には、母、三河の母、三雄、藤原、高光、西、清さんと予とをつた。呼吸は元に復した。室はしんとしてをる。もう九時である。さきからランプを細くして障子のあちらにおいた。病人は苦のない樣子で、たゞすう〳〵と呼吸をしてをる、眼は少し動くが何も見えぬらしい。枕頭で皆がコクリ〳〵とねむり出した。私は暫くねますというて、病人の床の後の方にそつとはいつた。胸の動悸も通ひ、呼吸も通ふやうでねむられぬ。じつと越し方を思ひ行末を考へてゐる、もう涙も出ぬ。十時がうつた。西君が、

「呼吸が少しゆるうなりました。」

というて計つて見て二十八といふ、次に藤原君が十八という、するとまもなく、停車場で汽車がとまるやうにしづ〳〵とだん〳〵呼吸がゆるうなつて五六分、やがて極かるく樂そうに

「うーん、うん、」

と房子の通常のひくい聲がきこえると、再び息は出て來なかつた。脈もとまつた。眼は半開のまゝ動きもしない、口も動かないで息がたえたのであつ

た。眠るやうな死とはこんなのをいふのであらうか。身體はまだあたゝかい。高光君が手をついて、

「難有う、ようかあいがつて下さいました。」

と手をにぎつて泣いた。私は背からだいて最後の頰ずりをして、

「房子、もうわしをおいて行つたか、よう盡してくれた難有、御苦勞樣ぢやつた。」

というて泣いた。藤原、西君皆手をついて御禮をいうた。

五分間ほどまつてランプをあかるうして臺所にゐた村人にかくと通じた。皆が泣きくづをれていとま乞ひに來た。十時半になつた。梵鐘が一つ、夜の沈默を悲しう破ぶつた、村人が皆きゝつけて別れを惜んだ。稱名の聲、すゝりなく聲、家中がどや〳〵してをるうちに森とした氣がみちた、別れは惜んでをるが、今頃は結構な處にまゐつてをるといふことが集れる皆の心にある故か、死の部屋が何となうにぎやかである。皆でお名殘の爲に御經を讀んだ。おごそかな氣がした。

暫くして皆さんに室を出て頂き、三雄と清さんと私と三人で、死體をアルコールで拭いた。

十七日の夜から、廿一日の夜まで、まる四晝夜あまり、心臟を下にし、西を枕し、北に向いてねたまゝで、ねがへりさせるとすぐ息が絶えますと醫士がいはるゝので、ねがへりもさせずにおいたゝめ、左の頰の枕にあたつてをる所が赤く血が凝つてをる。さぞ痛かつたらうと思ふと胸がふさがる。三日目から水を呑ましたゝめ尿が流れて布團がぬれてをる、のました水の多分が口からもれたのが枕の下からしみこんで胸の下あたりはぬれてをる。之を見ても泣かれた。汚れた着物をすつかりぬがして、清淨なのを着せた。汚れたしき布團もうつくしいのとかへた。そうして今度は右を下にしてねさした。ま

だあたゝかみがあつた。清さんが死體を厭やな心もせず、しんからかあいといふ風に涙で始末をしてくれたのはうれしかつた。三雄が泣きながら、アルコールで、短い契りであつた母さんを拭いてをるのを見て、うれしうらめしい思ひがした。

室を上の間に移し、頭北面西にしてねさした。枕頭の床の間には阿彌陀如來の御繪像をかけ、卓を飾り、樒をたて蠟燭をともし、御香をたく、死體の枕頭にも香を燒いた。

死體のねてをるところは丁度十二年前の結婚式の時、私に對して彼女が坐つた場所である。夜具の上にかけた白無垢はその夜着たのであつた、手にかけた珊瑚の珠數も亦その夜彼女の指にかゝつてゐたのである。私は無量の感に打たれた。白無垢の上に、本山の御遠忌の紀念に求めた櫨色五條と水晶の珠數をおいた。三雄は喪服を着て枕頭に坐つてをる。その横に三河の母さんが目をしばたゝいてをらるゝ、村のたれかれが夜伽をしてをる。家の母は過日來の風邪と看護の疲れでぶちたふれてをらるゝ。高光、西、藤原三君は、案内狀をかいてをる。同行の方で葬儀事務所ができた。清さんは汚れたものを獨でほどいてをる。私は心がしやんとした、あちこち飛びまはつて葬式の準備に心を碎いた。村の同行はしんみになつて萬事やつてくれる。

廿二日の午後中野兄が來て、葬式のことを種々指導してくれられた。法中の藤敎恩君を奉行にたのむことゝした。夕方まで近いところの親戚知友は皆來られた。夜伽の席は法話がつきず、難有い事であつた。『歎異鈔』を回讀した。

廿三日も終日枕頭で讀經、法話が續いた。村人が四五十人も集まつておつとめなどもした。皆で『禮讃』をよみ、『口傳鈔』を回讀した。京極君が東京から來た。

廿四日には佐々木君が來た。兄の顔を見ると直ぐ泣かれた。一時頃に皆で御名殘の讀經して棺に納めた。顔のところにガラスをはつて何時でも見えるやうにしておいた。

廿二日廿三日の二日は、私が側に行つて紙をまくつて房子の顔を見ると、眼を少しあけるやうに思はれた。生きてをるやうである。然し入棺の時となると大分相好が變つて來て、ほんとの死相があらはれた。入棺は母二人と三雄と清さんと私とでした、皆で白衣を着せなどした、北川のぢいさんは抱いて棺にねさしてくれた、今夜十時頃棺を本堂の尊前に移した。夜伽の男女は七間の本堂にみちた。高光、藤原、西三君はじめ、佐々木兄も法話をした。越前から態々來て下さつた阿古江君も難有い法話をして下さつた。夜の明けるまで法話がつゞいた。私は俗務に心をとられたり疲れてねたり、又難有い席に出たり、闇がりで獨りで泣いたりしてつひに葬式の日となつた。

廿五日の朝、柩前に私が最後の別れの讀經をしてをると多田君と松本君とが見えた、うれしかつた。今日は北國の冬には珍らしい好天氣である。

葬式は豫定より一分も後れず午後の一時に始まつた。導師は古例によりて中野兄がしてくれられた。私の親友であつて又房子の親友であつた同兄に導師をして貰ふのはうれしくもあり又た涙の種でもある。喪主は三雄、佐々木と私とは蔭からまゐつた。多田君はじめお友達の方々は棺側について送つて下さつた。村の青年會員は涙で柩を擔いでくれた。親類も法中も同行も澤山にまゐつて下さつたので堂の内外が人に埋つた。私と佐々木とは本堂で柩を見送つた。結婚の時にも佐々木兄と實母と二人で送つて來たのに、今日は又二人共に來て葬式に列なつてくれるかと思うて泣いた。

夕方、佐々木兄其他四五の人々と火葬場に行つた、もう已に大分火がまはつてをる、半以上もえたとかいふ。ブスリブスリと身體の燒ける音がする。御

經をあげて歸つた。

その夜は多田、佐々木、藤原、高光、木場、京極、松本の諸君と共に、社會を論じ、教界を語ひ、信を談じ、人を評し、中々に振つた會合となつた。皆がしんから泣いた同志のことゝて葬式の夜、臨終の室にありながら遠慮なく大笑し、高論した。とけた間は泣くもよい、笑ふもよいものである。

廿六日の朝、拾骨の灰葬をした。多田兄に導師を賴んだ。午後中陰法事をつとめた、中野兄が導師をしてくれられた。かくて一兩日の中に、皆が夫々去つてしまふた。まだ身體がすぐれなかつた母と、ぼんやりしてをる私を、清さん一人殘つてよくいたはり、よく世話してくれた、感謝せずにはをられませぬ。

この篇の終りにのぞみて私は房子の病中より死後にかけて、私共三人の上に注いで下さつた諸兄姉の高恩謝するに言葉がない位であります。病中も死後も弱き私は念佛の引き立てと諸兄姉の愛護とによつて今日あらしめて頂いてをります、これが卽ち光明攝取の照護と御念佛に感謝の思ひを漏らしてをる次第であります。

房子の病が革まつて、もう長いこともあるまいと思ひ、辭世の歌でもよまぬかというたら頭が痛うてよめぬと申しました。死後書簡を檢べてその中にかいてある歌を見ると、まるで辭世そつくりのがある。芭蕉翁が一句一句辭世ぢやと云はれたことなど思ひ出してうれしく思うた。左にその中の五首を錄してこの稿を終ります。

＊　＊　＊　＊

とはの手にとはのみ國に生るゝ身絶えなばたえよ罪の玉の緒

○

手をとりつ信の羽衣身にまとひいでたびたゝむ慈父ゐます國

○

散る花に浮世のさだめかこちてし罪の子霊によみかへるかな

○

君にあひてとこよのいのち我得たりと野菊しぼみぬ星輝く夜

○

くるし世といふもしばしよ悶えなき國にいでたつ旅の一夜の

九。みだれごゝろ

佐々木勝子の君の御往生あまりのことにまことゝも思はれませぬ。過日來お心惱ませたまひし兄君のおなげき、又御一同様の御こゝろ御察し申しあげては、先だつものは涙でございます。

夫の君にも定めし、御おどろきの事と存じます。何もかもお計らひとは申せ、あまりの御てひどき御さいそくと、たゞ恨めしう存じます。然申せば常に御聞かせにあづかる身のと御叱りもありませうが、私にはとてもとてもあきらめられませぬ。今日は終日思ひ出でては泣きて果てました。御叱り下さいませ。御恨みのありたけ申して泣きました。私はやゝ心がおちつきました。何もうち忘れて御念佛申してをります。南無阿彌陀佛。

――房子の書簡の一節――

註。勝子とは房子の姪、月樵君の長女である。

＊＊＊

みだれごゝろ

梅が咲くよになつたなら
鶯が鳴くよになつたなら
お彼岸すぎになつたなら
病もそろ〳〵うすらがう
其時や須磨か明石あたりへ
共に出養生しやうぞと
いうてゐたのになさけなや。

梅は咲いたが鶯も
日毎に庭に來て鳴くが
彼岸はとうにすんだれど
共にかたつた房子はをらぬ。

あゝ今はわしひとり
どこに行つたとて
氣が晴れよぞ
心をそゝるなまぬるい春風は
わしの胸をばこそぐつて
あつい涙をわかすわい。

＊＊＊

房子は今はみ佛の
國に生れてをるのぢやと
信じてをれどそのあとを

追うて行く氣はごくうすうて
やはりこの世にひきだして
共に泥田に迷はして
泣きも笑ひもさせたいのぞみ
わしの本性は魔か鬼か。

＊＊

房子が死んでわしが身に
殘つたものは
畜生に劣つたきたない自我と
口にや尊いお念佛
ダイヤモンドをねば土に

これてをるような思ひして
はいだるい日をおくつてゐる。

＊＊

淨華院釋染香尼の
法名の前でぬかづいて
お經はよんでをりながら
清淨無垢の新菩薩を
禮する氣持になれずして
抱いて抱かれた罪の友
女の房子が戀しうて
泣きもしますよ袈裟かけて

ほんに佛に恥かしい。

＊＊＊

ひどい病苦を見せられて
何だか心がしんとした。
房子が死んだ當座には
自ら淨化した氣持ちになつて
清僧となりすまさんと誓ふたが、
葬式すんで五日目に
早おゝはづかしい、
女がほしい氣がおきた。
自らあきれていやになつて

凋落の自我に泣きました。

＊＊＊

泣きもしまする涙も出るが
愛のまことのないわしぢや。
いまはにせまる房子の枕元で
カステラくうて茶をのんで
平氣で病苦を見てをつた。
わしらの憂も同情も
お腹がふくれてをるうちだけぢや
泣いてもほんとに泣けぬ奴
ほんに薄情なわしぢやわい。

＊＊＊

夫婦仲よく暮らして來た十有二年
燃ゆる接吻力こめた抱擁
思うて見るとみなうそぢや
わしはだましてをつたのぢや。
房子が病床についてから五ヶ月あまり
ねずに心配した夜もあつた
泣いて背をさする日もあつた
思うてみるとみなうそぢや
わしはだましてをつたのぢや。

このうそつきの心の底を
だましてをつたこの胸の中を
今は見ぬいてゐるのか房子、
おゝ恥かしや。
房子おまへは
このうそつきのお上手ものゝ
わしをにくうは思はぬか
それでもやつぱり慕ふかい、
やつぱりお前は氷のやうな
冷たいわしをおゝかわいと
泣いて抱いてくれるだろ。

＊＊＊

兄弟姉妹友達の方々に
遺物を分けやうと
簞笥のひき出しをあけて
房子の着物をいだしては
母と二人で泣きました。

あの時これを一邊着た
之を着て一所にどこに行つたのに
というて又泣いた
よくしめた帶を見て泣いた

おかあさん、もう〳〵房子の着物は見ますまい。

＊＊＊

夢にでも逢ひたい
幻にも聲がきゝたい、
と思うて房子の死んだ部屋に
獨りねて今日で三十日あまり
たつた一邊夢に見て
たつた一邊聲きいた
兄さんとなつかしそうに
ねてをるわしをよびさます
房子の聲は生きてゐる。

＊＊

自我のまなこのくらんだ胸に
愛の甘露が湧くものぢや。
わしは冷たい薄情男
自我のまなこがするどうすぎて
愛に渇いて涙は出すが
自我のほろびに泣きもしますが
自我をすてたる愛の涙のない奴ぢや。
わしを愛する犠牲の血をば
背戸の小川で洗ふわし
ほんにあきれた奴ぢやわい。

＊＊

房子と結婚してから十二年たつが
一しよに暮らしたのはたつた千日あまり
わしはいつでも旅にゐた。
いつでも旅にたつ前夜
房子は涙にむせながら
なんであなたはわしおいて
お行きなさるといひました。
法のためぢやこらへてくれと

いうて一しよに泣きました。

然しわしには高尚な
爲法の念といふよりも
冷たい自我に名聞利養の
心が動いてをつたのだ。

房子は涙にむせながら
旅のカバンを整へて
おかあさんはあなたに代りて介抱もします
家の萬事も引きうけまする
心配せずに働いて早く歸つて下さいよ。

房もおかへりを樂みに
いさんで働らいてまちますと、
悲しむ母をなだめては
立派にたゝしてくれました。

こんな事など思ひ出すと
泣きたうなつてならぬわい。

殘す別れのつらさは知つて
殘る別れのつらさを知らぬ
わしにその味知らさうと

房子は死んで行つたのか。

死なれて後にやうやくわしが
旅にたつ時泣いた房子の心が知れた、
かんにんしてくれむごかつた、
思ふと胸が痛むわい。

＊＊＊

房子が病んでねてをるあひだ
わしが一寸外出すると
涙ながしてまつてゐた
わしはをり〳〵うるさいと
思ふたこともあつたれど
ゐなくなつたる今日となりや
やはり涙の種ぢやわい。

＊＊＊

あんまり泣くな泣いたとて
死んだ女房はかへらない
あんまり泣くと身にさはる
あきらめたまへと、
ストアの學者の末派はさとして下さる。
わしも一時はこの説にかぶれたこともあつたれど、
今になつて考へてみると

あんまりつめたい身勝手な
教へのやうに思はれて
わしはどうでも氣にくはぬ。

わしの自性はこのいやな
身勝手きはまる奴ぢやゆゑ
泣いて〳〵泣きくづをれて
死んでゆくよな眞實の
愛のまねでもやりたいと
願うてをれどそれもできぬ、
やつぱりわしはストアの末派
死んでしまふた者のことは

何でもうまくあきらめて
安慰とやら勇氣とやら
そして自分が長命しやうと
呑氣なくらしを追うてをる、
厭やになるではないかいな。

房子の愛に引きだされ
眞の犧牲の佛の愛の
にほひを歸依の思ひにかいで
念佛するのか今のわしが
やゝ氣ののつたわざぢやぞへ。

死んだ房子は死ぬるまで
わしを慕うてをりました
その愛心が通うてか、
死んだあとでも房子を思ふと
冷たい心のわしぢやけれど
あつい涙がこぼれます。

＊＊

わたしが死んで後好末を
房にして貰ふのなら
あたりまへでよかつたのに
さかさまごとにつひなつて

こまつたわいのと仰やりながら
房子の遺物を世話してをらるゝ
母の姿を横で見てゐたわしは
すまないことぢやが
ほんとにそうぢや
母が死なれてそのあとの
忌中の佛事を何くれと
房子と二人でつとめるやうぢやとよかつたにと
一寸思うてぞつとした
お母さん
わしは今あなたを殺してをりました
御免なすつて下さいませ。

というて私は泣きました
母も一所に泣きました。

一〇。やみ

房子が死んであとからは
わしはおどけをよくしやべる
おどけをいうて人を笑はせ
とけたふりして面白そうに
自分も笑うてをるけれど
笑の中からどことなう
溜息がもれてまゐります。
世をお茶にしてはねまはる

道化役者の仲間に入らうか
ラッパをふいて辻にたつて
小供とをどる飴賣と
なつて餘生をおくらうか
ほんに念佛がなかつたら
わしは狂うて死にまする。

＊＊＊

スパルタ風に武士的で
すつきりしやんと男らしう
世を通らうと思うてはをれど
事實はそうはまゐらいで

ぐにやりぐんにやり
なまこのやうにしてゐます。
世を樂んで踊られもせず
世をはかなんで死ねもせず
自我を捨てるよな戀もでき
女を見ぬよな聖者となれず
錢がほしいとそろばんもつて
相場に手をうつ仲間にやり
利を解脱して山水を
樂む人のまねもできず、
ほんとにわしはにえきらぬ

わしの一番きらいな奴は
このにえきらぬわがこゝろ。

＊＊＊

なんぼお金がほしけりやとて
疲れたからだをそうあちこちと
この雪のふる寒い日に
まゐつておあるきなさるなと
書いた手紙を見た時にや
それほどわしを見くびつてか
ひどいと腹がたちました。

わしはお金にや頭はさげぬ
わしはお金にや法は賣らぬ
こんな願ひはもつてはをれど
こんな顔して通つてはをれど
一皮むいてしらべて見れば
やつぱりお金がほしい奴ぢや。
お金がなけりやくさ〳〵するし
金くるゝ人を嫌にやなれぬ。
ほとけも金で賣つてをる
お經も金で賣つてをる。
なさけないとは思へども
事實があかしをしてをるので

世間にや利欲にうすい人と
いうて通してくれたとて
わしの事實はそうでなうて
十錢の品でもまけといひ
一錢の賽錢に眼がうごく
これでお金がほしないと
いふやうな顔して通つてをる
わしはよつぽどくはせもの
このたばかりのしんそこを
つついた手紙はいたかつた。
自分に愛相のつきるよな
こんな心をしりぬいで

こんな汚れた身體を知つて
慕ふて案じてくれるのかと
ふいと氣づいて見ましたら
うれし涙にむせびました。

＊＊＊

ほめてもらへばうれしいけれど
氣味がわるい故わしやいやぢや
そしるをきくと腹がたつ
くさ〳〵するからなほいやぢや
それぢやすなほに評判なしに
默殺されるのが好きなのか

それは尚更たえられぬ。
どうすりやおまへはよいのぢやえ
どちらもわしはいやぢやわい。
そうだゝいふと困るがな。
わしは困つてをりまする。
どうでもわしはだゝつ子ぢや。
親を泣かせのだゝつ子ぢや。

＊＊＊

死にともない死にともないわしぢやけれど
このごろふい〳〵死んだがましぢやといふやうな
思ひが湧いてまゐります。

自殺するやうな勇氣はないで
病氣でじり〳〵死にたいと
病をもとむる氣もおこる。
するといつでも衰へた
母のお顔が見えてくると
はつと思うて氣がかはり
まだ死ねぬ死んぢやならぬときばります。
どちらがほんとのわしぢややら。

＊＊＊

お召の綿入、縮緬の羽織
新らしいのを着かざつて

生れた寺の御遠忌に
いそ〳〵わしとまゐつたのに
一年たつかたゝぬまに
房子は淨土に行きました
涙のわしをふりすてゝ。

行李にや遺物
カバンにやお骨
淋しい思ひで夜おそく
安城の停車場にをりたとき
やわいブラシで肋骨を
さすらるゝやうな心地した。

一年たつて來て見れば
町には電氣がともされて
あかるうなつてをるけれど
わしの心はまつくらい。
あちらこちらの料理屋に
三味の音たかいさんざめき
若い女の歌の聲
きいてほろりと泣かされた。
酒呑む若者うたふ女
ともに淋しい心をだいて
刹那の歡喜貪りをれど

やがて死に行くはかない運命
やはりお骨になるのぢやな。

町を離れて古井の村へ
ゴム輪の車の音もなく
たゞぱた〳〵と走りゆく
星もくもつたくらい道
冷たい風に襟元寒う
たゞ念佛があふれ出た。

道のかたへの火葬場に
人焼く臭ひが鼻をつく

老若男女いづれでも
二三日前まで血が通ひ
かあいと云はれいとほしと
いひついはれつしたものが
今は焼場にたゞひとり
ぶす〳〵燃えてをるのぢやと
思うてぞつとさむなつた。

ぬくい夕日を身にうけて
去年通つた房子の影が
うつゝのやうに見えまする。
二人の親や兄妹と

思ふ存分泣きともあれば
あんまり泣くとつらい故
どうでも泣かずにおかうかと
あちらこちらと思ふうちに
車は寺の門に入り
くらい玄關につきました。
皆の人がにぎやかに
わしをむかへてくれたれど
たれと逢うてもたゞ無言
淋しい淋しいどんぞこに
ひとりをるやうな心地して

ろくに話しもできずして
どうして房子は死んだらうと
又々愚痴が湧いて來た。

＊＊＊

古い祖先の墓をこぼちて
掘り出した骨甕の中に
黒い小さい蛇がゐた
皿のやうに渦巻いて
スリヤ蛇がと
蕪村の繪のやうなおやぢが
この蛇をほりあげた。

この骨の人が
蛇になつてをるのぢやないかと
鍬もつた若者がいうた。
彼岸すぎでもまだ寒いので
蛇は捨てられたまゝに動かぬ。
わしは何かしら
襲はれたやうにぞつとした。
祖先の一人が蛇となつたか
たゞ何となう物すごい
蛇はそのまゝ藪に捨てさせ
骨甕は新らしい墓に納めた。
けれどもわしの心には

あの蛇のかげが
ふい〳〵見えてどもならぬ。

＊＊＊

観音の圖に題す――圖は房子の兄友山の筆になり、月樵兄が今度御遠忌に來た記念に何か書けよといひしゆゑに

依正二報のお莊嚴
どれを見たとて涙の種ぢや
七條の僧も死ぬるのぢや
花持つ稚兒も死ぬるのぢや
あゝ死ぬるのぢや。
あれ見やしやんせ

觀音様も泣いてましますぞへ
わしはうれしいかたじけない
觀音様のこの涙。

一一。房子のこと

「あんたの奥様はよほどえらい方だつた。あんたのやうな道樂な、そこにある茶椀をとるにさへ、人を使ふやうな人に便器の世話までさせた奥様はよほどえらい方でしたね」。

と或夫人が申されたやうに、思へば思ふほど、私の房子はえらい女であつた。私のやうな男には過ぎた妻であつた。

○

妻としても、嫁としても、坊守としても、(人間だから缺點がちつともないとは云ふことができまいが)、模範とするに足る女であつたことは確かである。

○

彼女が私のとこに來た時には十七才であつた。夫已前に已に私の著した書物を始め、清澤先生や佐々木兄や多田兄の著書は勿論私の著書は特別の注意を以て讀んでゐた。夫ぢやから來た時に已に私とは念佛の友であつた。私は最初に『三部經』の音讀と訓讀とを敎へた。現代の小說を讀まし、古今の歌集をもよむやうにすゝめた。『萬葉短歌集』は病床につくまでの彼女の愛讀書であつた。小說は三重吉のを好んで讀んでゐた。彼女の性格には、どこやら三重吉の描く女に似たところがあつた。彼女は勝氣であつて、俠氣があつた。而も溫かい弱い能く笑ひ、能く泣く女であつた。

○

彼女は、私の云ひつけたことをしないで、私に腹をたてさすやうな事は一度もなかつた。能く勤め、能く働いてくれた。尤も、頭腦は至極明晰であつたから、云はぬことまでよく氣をきかしてやつてくれた。

○

私の缺點を一番よく知つて、私に尤も痛い事をいうてくれるのは房子であつた。彼女は私といふものを尤も能く了解してゐてくれたので、私の家庭は人から羨まるゝほど樂しいものであつた。

○

私の文字は讀みにくいので、大底の人が困るのだが妻は誰よりもよく讀んでくれた。故に私の全集の編輯主任は、彼女であるというてゐた。彼女はその仕事をせずに死んだ。

○

彼女は幼少の時から兩親に着物をねだつたことがなかつたと彼女の母が涙をうかめて申される。私へ來てからも、本氣で着物をねだつたことがなかつ

た。私は書物道樂で借金してまで書物を買ふものぢやで、母と共に家内の者に着物を買はないで、自分の好きな本ばかり買ふと私を冷かしながら厭な顔もせずに本の代を拂うてくれた。

○

母も彼女とは、能くうちとけてゐた。他から初めて來た人は私を養子かと云うた。彼女が母に對して甘いたいまゝに甘い、云ひたいことを云うてをるから、内娘かと思ふのぢやそうな。母の方でも房や房やと大小となく房がたよりであつた。外出するにも房とでなければ行かぬと申され、共に外出さる時には、金入までも彼女に托して出られるのであつた。私は母から彼女に對する一言の不平を聞かなかつた、いつも同盟して私にあたるのであつた。之は母もえらいし彼女もえらいからであると、私は二人に感謝してをる。

○

彼女が私のとこに來て半年位髪結の手を勞はしたが、其後は自ら髪を結うて、其代りというて赤十字社と愛國婦人會に加入して、特志看護婦人會に入り、愛國婦人會では支部の幹事として働いてゐた。紅と白粉とは禁物であつた。指輪は勿論なかつた、簪は銀で星の形をしたのを母がこしらへてやつたのを一本始終さへてゐた、髪は洗ひ髪でゐた、質素と勤勉とは彼女の特質であつた。

○

彼女は自らは至極質素にしてゐたが、人に惠むことは吝ではなかつた。貧乏の中から私が學生などに補助をするのを自らも喜んで世話をした。

彼女は學生を好んで愛した。毎土曜には第四高等學校と醫學專門學校の學生が金澤から態々出かけて來た。私の居ない時でも彼女は能く彼等の世話を

した。私が今日近付きになつてをる人々の多分は、半分は彼女に引かれて佛教に入つた人達である。

○

彼女は小學校の先生方と協力して日曜學校を開いて、少年少女の世話もしてくれた。

自ら奔走して會員を募集して慈光婦人會をこしらへた。會員は三百人位ある。毎月廿一日が會日であつた。その廿一日に彼女が死んだのも因縁のないことでないやうな氣がする。

○

本堂に説教が始まれば、臺所はうつちやつておいて參詣をした。若し來客があれば、大底は來客を誘うて本堂に聽聞に出た。聽聞中は能く聽き能く笑ひ、全身をうちこんで聞いてゐた。但し無信仰ぢやと思うた人の説教は聽聞することを喜ばなんだ。

村の御講には大底參詣した。

之を許して下さつた母の寛大を思はねばならぬ。

彼女が死ぬる十日以前に、

「私は仕合でした、子供がなかつたから、平生思ふ存分聽聞させて頂いて結構でした」

というて喜んでゐた。

○

彼女のゐた小學校は男女共學であつた。そこで常に第一位を占めてゐた彼女は、世の中の男をあまり恐ろしいものと思はなかつた。婦人の壓迫に對する反對論は力を入れて論ずるところであつた。彼女が私に嫁して共に宗教界に働かなんだら社會主義の仲間入をしたかも知れぬと思ふ。

○

本堂の掃除、室内の掃除、庭園の掃除は彼女の好んでする所であつた。

着物は、母のと私のと自身のと、總て彼女自身でこしらへ、折々は他からたのまれても縫うてやることもあつた。仕立は早くもあり、相應に上手だつたさうな。

來た頃は料理はできなんだか、四五年の内に私の口にあふた料理もよくするやうになつた。

○

機織が得意だと、彼女の母が云はれたが、私に嫁してから一回も織らなかつた。

音樂の趣味はなかつた。演劇なども多く好まなかつた。道樂は聞法と讀書であつた。

生前は知らぬ／＼というてゐたが、死んでから彼女の手箱の中から茶の湯と生花との免狀が出て來た。

○

來た頃は、佛典の寫字をした。母がだん〳〵弱られて彼女が家政をするやうになつてからは、こんなひまはなくなつた。それでも原稿の筆記をしたり多くの書簡の代筆をしてくれた。

○

道理の合はぬことには、母にでも、私にでも、同行にでも、よく論じてなかなか讓らなかつた。然し皆と打ちとけてゐた。

○

病氣になつてからは、まるで子供のやうになつてゐた。で私は娘のやうにかわいがつた。

○

房子は私にとりては、尤もうつくしい、やさしい、けだかい、ゆきとゞいた、よい妻であつた。母もさういうふうに信じておいでになつてゐた。然るにこの妻、この嫁を先だてゝ、人の羨んだ家庭が破壞された後に、殘つた母も私も隨分みじめな感がするのである。

一二。安田のお母さんへ

お母さん、あなたにこんなことを申上げて御泣かせ申すも罪ですけれど、云ひたくてならぬ愚痴ですから云はせて下さい。そして私も泣かせて下さい。

先生が御留守でもお二人がいらつしやるからと思うて、苦しい胸を抱いて安田へ奔せついた私と、「敏が留守でも房が居るから」と申されたお母さんとは、これからまた一つ涙の種がふえたのですね。永い間お一人で御泣きなすつたのに、漸くこれからと思召すひまもなく、また奥様の御往生で老先短いあなたの御顔に再び孤獨の影を拜むかと思ふと胸が一ぱいになるのです。

何時でも私が參つては夜更けるのもかまはず、御臺所の爐の火の灰になるまで、苦し紛れの愚痴を幷べては御二人に泣て頂いたのも私の憂さ晴しであ

つたが、時には思ひ切つて笑ひこけたこともありて、懷いて行つた胸の蟠りもとけて、翌る日は輕るゞしした思ひで歸るのが常であつたのに、今は早や疳高いあの笑聲を失つた臺所の爐邊には、淋しいあなたの御顏を拜して泣きに參るのが勢一ぱいの憂さ晴しかとも思はるゝのであります。

此間は廣島で河野さんに御逢ひしたとき、同兄が二年前に安田へ來られた時の感想を語られて「先生の御留守へあがつた私は、餘り君や奧さんの陽氣なのに一驚を喫したが、しんみりした夜伽に屈折れて泣かれた奧さんにも驚かずに居られなかつた。」とて、思出のとり〳〵に眼を潤しましたことですが、さう云ふ河野さんにも私達が顏見合せて驚いたこともお母さんはお忘れないでしやうね。這入るなり、御挨拶も濟まぬのに「私は暖い御飯でさへあれば御馳走はいりませぬ」と來たので、「マア」といふ奧さんの疳高い感動詞が飛び出て、忽ち笑ひ崩れるやうな陽氣になつてしまつたのです。奧さんは決して陽氣な方でなくて、陽氣にすればなる方でしたね、お母さん。

先生の御留守などには大方ふさぎ勝ちにお見受しましたが、心氣一轉大陽氣に變らるゝも早かつたけれど、如何しても涙の多い方として、私は忘れることが出來ぬのであります。それと云ふのも參る毎に愚痴ぽいこと斗り御聞かせしたから最後は何時も涙で終ることのみだつたのでもあります。私には澤山な姉が居りますけれど、心底から私に泣て下さつたのは奧さま斗りでありました。何時やらも親類の誰やらが私のことを惡く云うたとて我事のやうに同情して下さつたり、誰彼がこんなに云ふからあなたも御注意なさいよなど、細かい處まで親切にして下さつたのであります。

お母さん。思ひ出の數々は限りなく私の胸を衝くけれど今の私にはとても書けませぬ。今少し日を經て見れば兎も角ですが、今は唯一つ一つが涙の種でこれを書くさへ四日も五日も書き鈍つたのであります。

澤山な姉を持つ私ですけれども、腹底から私に同情し、親切にして下さつたのは奥さんばかりでした。其たつた一人に永久の御別れをしたのかと思ふと、云ひ知れぬ淋しさが胸を込上げて來るのです。而して火葬場の、あの穴の中で御別れに拜んだお可懷しいお顏が眼の前にちらつくのです。私の村へは去年の私の寺の御遠忌が最後でしたが、私の宅へはあれが初めての終りでした。今日も妻と二人で如何した不思議な御緣でしたらう、など語り合うて涙含んだことですが、彼れも是れも唯私一人の爲めに此世へ出て下さつた方とのみしか思はれぬのであります。

こんな事を考へ出すにつけても唯明かに見えて來るのは自分の水臭い心中ばかりです。何であの御病中にもつともつと御見舞をせなんだやら、など思ひ出すのだけれど、其癖、御病中御見舞に出掛けやうとして御菓子箱が買へぬので戻つたこともあるのです。菓子箱一個に代へて捨るやうな水臭い親切だもの、毎々出來なんだのも最だと、今更のやうに氣がつくのです。

お母さん。澤山な姉よりも受けられぬ樣々な御親切な奥さんに、一生一度の御看病もさせて頂いたからと、少しは思ひやりも出來るのですが、其御看病のことも回顧すれば人前斗りの水臭いものでありました。瀕死の御病人を前に置き乍ら眠る位はまだしもですが、泣て居るかと思へば笑ひ出すやら、お腹がすいたと云うてカステラを食べるやら、自分乍ら何としたさもしい心やらと殘念に思ふのであります。こんな淺間しい根情で居ながら、折々昏睡からお醒めになると、私がこゝに居ますよ、と云ひたい心で御顏の前へ自分の顏を指し出したのであります。お母さん御許し下さい、私は如何してもこんな心より他ない奴であります。

されど私は感謝致します。あの三四日の病床看護によりて此世に於ける一大活說法に觸れしめて頂きました。あの奥さまの御臨終は終生私には活

きて下さるのであります。四五年前に先生が私への御教訓に「如來は至冷の有なることを忘れるな」とありましたのを、今度こそは心琴に觸れしめて頂きました。私はこの大御往生に依て冷かに自己内心を見せて頂き、而して此迷闇中に悲泣戀慕する私に手強き願力の生きて在すことを見せて頂きました。

お母さん、御許し下さい。愚痴はまだ〳〵つきませぬ。何れ其中に參上して思ふ存分云はせて頂きます。

――（高光大船）――

一三。淨華院様へ

房子様、私はいつもあなたから見送りしていたゞきます様に、過ぐる廿日の夜、あなたの御靈前に參らせていたゞいてから、とりいそいで、三雄さんや文學さんのお叔母さんや、武ちやんや、私の妻などから松任の停車場まで見送つていたゞいて又た上京しました。

途足は思ふたよりはから〳〵として、あなたのお里のお母様や兄上や佐々木先生や多田先生や牧村のお八重様や京極さんを見送つた去る月の二十六日の夜とは、氣候が一變しまして大變あたゝかでありました。宵の春ではありますが、丁度よい加減のおぼろ月夜で、物の影がうつすらと見えるのです。公會堂の隣の、溝をめぐらしてゐる、あの小さい丘の樹などもまばらの影を水

になげて、いかにも春の氣分を味はせるのです。溝にはよく鯉のはねる音などしたこともありましたが、あの晩は何の音も聞きませんでした。

三雄さんが、松任で一番よい處はあの溝をめぐらしてゐるあたりだ、といつてあの晩も笑つてゐましたが、あの晩は殊にしんみりとして、あの沈默して居る景色を味ひました、なつかしく思ひました。そしてあなたの常の姿がぼんやりと私の胸に浮ぶのです。海も例の樣に鳴りわたらないで靜かでありました。私には何も明りませぬけれど、多分あなたもあの晩お見えになつた事と思ひます。私は、「大悲ものうきことなくて、常に我が身を照らすなり」といふ、御開山樣のお言葉を、常々ありがたくいたゞいてゐますが、あなたも矢張りその樣に、見送る人達の中へ雜つて、私を見送つてくだされたことと思ひます。

どうもすみませんでした、いつもかも御心配ばかりおかけ申して、いつもかも御苦勞ばかりかけまして。

私は松任の停車場で、あなたから今日まで幾度「御きげんよう」といふ御親切なお言葉をいたゞいたでありませう。そしてそれが大抵夜の汽車なんでしたから隨分お寒い目に合せ申しました。でも今日まで幾度あの御親切なお言葉をいたゞいたのか、モーすつかり忘れてしまひました。そしてあのお言葉を眞似やうと思うても、今では出來なくなりました。あなたのお言葉はモーこの世に生きてゐないのですもの……

多分あなたの御臨終の前夜であつたと思ひます。敏樣が「モー房の聲も今から聞けなくなるのか…かう苦しんで居るのを、七人も八人も見て居るけれでも、どうすることも出來ぬのだ」と、泣きくづれられたのでしたが、おそばにゐました私も、之を聞いたとき、腸を斷たれる樣な氣がしました。そしてお里のお母さんも、家のお母さんも高光さんも、三雄さんも、ゐ合せたも

のは皆思ひ〳〵に泣いてばかりゐました。あの時はあなたの常のお聲が早や無くなつてゐました。あなたがお笑ひなさるとき最もよくひゞきます、あのお聲がすつかりなくなつてゐました。唯だ吸入してあげたとき、雪水を筆にふくませ、代る〴〵皆があげた時、あの苦しい息使ひの中に、笑ふが如くにお念佛をなされ「ありがたう」と幾度となく微かながらも御禮のお言葉をもらされたのが最後の樣でありました。私は今になつて思ふのですが、如來樣が、「假令身を諸の苦毒の中に止くとも、我行は精進にして、忍びて遂に悔いじ」と、お誓ひくだされた樣に、あなたのあの時のお念佛、あの時の御禮のお言葉は、まさに如來樣のお誓ひのお言葉と、いふより外にいひ樣がないのです。御臨終のときは尊い如來樣のお聲を聞かせていたゞきました。如來樣のお骨折りが目に見える樣に明かにいたゞかれました。併し、あなたの生前のお聲はもう聞く事が出來ませぬ。眞似ることも出來ませぬ。唯だ思ひ返へしては泣いたり笑ふたりして見る丈けであります。

私は生れてから三回、人の臨終に逢はしていたゞきました。一度は私のすぐ上の兄の臨終でありました。この兄は私の生れ故郷の叔父の家へ婿にいつてゐたので、今から六年ばかり前、丁度桃の節句に實家へよばれて來て、その晩病んで、翌日の午後四時頃亡くなつたのです。兄の家は農でありますから、體格などは、兄の方が私の二倍もありまして、私などいつも馬鹿にしてゐた位ゐでした。それが一晩の中に亡くなつたのですから、私は非常に驚きました。私は危篤と聞いて、すぐ車でかけつけたのですが、そのときはモー視力などはなくなつてゐた樣でした。手を握りますと「あつい〳〵」、といひます。「明るか」と私が申しますと、「ウー」と、唯だ苦しい樣な息使ひをいたします。それからひとしきり非常にもがきまして、實はどうなる事かと唯だ驚いて見てゐました。顏からあぶら汗が、生木を燒く時の樣にジリ〳〵と

出ます、呼吸が益々早くなります。醫者が來て注射しましたけれども、モーその時は萬事休した時で、それから間もなく息を引きとつたのです。私はお香を燒いてお經を讀みました。お經がどうしても讀めませぬ。涙はさほど出ませんでしたが、胸が込みあげて來て、讀めなかつたのです。私は桃の節句に自分の兄とこの世のお別れをしました。悲しくありました。無常といふ事が萬卷の書を讀むよりも痛切に味はれました。兄の家は法華宗でありました。兄のお骨を拾ひに行きまして、夢の浮き世といふ味がしきりにいたしました。二三日前までは、鋤鍬をとつて働いた壯者が、早や骨ばかりとなつて、無限の寂しみをこの世に殘すのみかと、歩き乍ら骨をいだいて堪へ切れない心地で歸つてきました。房子樣、凡夫の姿はどういつて見ましても哀れなものでありますね。

二度目の臨終は、あなたも御承知の通り、三河の蒲郡の海岸に、あはれにも行旅病者として落命せられた、谷貞子さんであります。嘗つてお話申しあげました樣に、あの時の臨終は人生の一大悲慘事でありました。私は終生あの出來事を忘れる事が出來ませぬ。今日でも思へば皆涙のたねです。あの時二度目に成瀨さんと駈けつけました時、丁度日がくれてゐまして、細い洋燈が一つ病人の枕頭に置いてあるばかり、病人は夢中になつて咽喉の邊をかきむしつてゐます。髪の毛は亂れて見る影もありませぬ。胸は波うつ樣に激しく高まつて來ます。刻一刻が生の失ひと死の神の勝利となのです。何とした凄い寂しい有樣なのでせう。私はこの哀れな有樣を見て、早くこの渦中を脱したいと一時は思ひました。病人は苦しいには相違ないが、見て居る私の方が却つて苦しい樣に感じたのです。あのとき成瀨さんと、貞子さんの遺骸を火葬して來たのでしたが、あの時は全く氣でもぬけたのでないかしらとも思ひました。併し谷さんの臨終には人間の悲哀の底と無碍光明のお慈悲とを深く味

はせていたゞいたのです。悲しい寂しいといふ中に一道の法悦の胸が動きました。私はかうした大經驗を得まして以來、人間は何事でも非度い出來事を見せつけられるのが一番藥だと思うて居るのであります。

第三回目はあなたの御臨終でありました。

私が二月の十七日の晩、あなたの寺から家へ歸り、あなたの御危篤のお使を貰ひまして、あがりましたのは十八日の午後十一時頃でありました。私は道すがらモーあなたの生きておいでになるお顔を見る事が出來まいと斷念してあがつたのでした。草鞋をといて物もいはずに、お居間へ行けば、敏樣は次の間に寢て居られます。門徒同行はそこに集つて坐つて居る。高光兄や經國さんはあなたの方を向いて泣いて居るのか、お念佛して居るのか明らぬ樣にとり亂した物の中にぼんやりして居られる。お座敷の床の間には壇が設けられて、如來樣がかゝつておいでになる。そして皆が氣ぬけした樣に一言も物いふものすらありませぬ。どうなつたのかと私は唯だそれに氣をうばはれて、あなたの事は殆んど忘れてゐました。あの晩は始めて徹夜をさせていただきました。あなたはその日の朝から全く人事不省であつたといひます。

私はあなたの臨終に逢うてから、自分のいうて居る事、書いて居ること、總てそらごとたわごとだなと深く感じました。人生も生死巖頭に立つて來ると、モー何もいふ事が間にあひませぬ、眞實の人生は筆や言葉ではありませぬもの、子規居士が「痰一斗へちまの水もまにあはず」と、辭世して往かれましたが、人生の一大事には何を持つて來ても間に合はぬのでした。隨分おやかましう御ざいましたでせうが、十八日から二十一日までの四日間は、唯だ泣き、唯だ笑うて過ぎました。そしてあなたの苦みの多くを知りませんでした。

十六日の茶話會は、誠にこの世の最後でありました。あなたが茶話會の

會費を出すといはれたさうなが、私はその時、原稿を書いてゐまして、そのお言葉は殘念乍らつひ聞きもらしました。

御臨終の日は、さすがにお苦しさが增して來たと見えて、午後の三時頃までは殆んど強き痙攣が連續いたしました。脈搏などは殆んどあるかないか明らぬ位でしたが、頻りに手が動きました。そして私共が支へてあげてゐた手を、しつかりと握つて強く引かれた事が幾度も御ざいました。わめく樣なお苦しい樣な聲が頻りに出ました。あれは何時頃でありましたでせう。お里のお母さんは腰がぬけた樣におなりなされ。家のお母さんは起つて二足三足お歩きなされたと思ふと、その場で卒倒なされたのです。實際あの時のお苦しい御樣子は、殆んど目もあてられぬ有樣で、熱い涙が誰れの目からも、はら〳〵と落ちた樣であります。どの位お苦しかつたでせう。

私は人樣にも時々お話する事ですが、それは如來樣の五劫思惟の御本願といふ事です。『御和讃』にも、

如來の作願をたづぬれば
廻向を首としたまひて
大悲心をば成就ぜり

とあります樣に、如來樣が煩惱成就の私の爲に、あらゆる御經驗をあそばされ、私が火に入る時は、御親ら火にも入つてくだされ、私が水に入るときは御親ら水にも入つてくだされ、かうして私が有てるあらゆる苦惱を御身に引きかけて御思案くだされ、御修行くだされた尊い御經驗が、五劫思惟の御本願でありますが、今あなたのお苦しみがどんなに激烈であつたかといふ事も、如來樣の御本願から味はせていたゞきまする時、あなたのお苦しみを御承知の方は唯だ如來の御本願より外にないのでありますから、私共が泣きましても哭えましても、あなたのお苦しみは眞に味はれる筈がないのであります。私共の泣きますのは、丁度、夏の熱い日に、車に乘つてゐて、車屋の

苦惱の有情をすてずして
大悲心をば成就ぜり

背や額からはら〳〵と流れる汗を見て「車屋さん隨分御苦勞だね」と、そらうそぶいて居ると同然なのであります。私はあなたが「又そら涙をこぼして居るわい」と、あの時、私の腹ぞこを御覽になりはせなかつたかと、今思ひ出しましても冷や〳〵するのであります。どうぞ許して下さい、私はあなたの御看護中、幾度も涙を出しました。そして男氣もないはなを垂してわめきました。併しそれは皆虚假不實の穢身から出たものでしかなかつたのです。

誠に思へば、今から四年前の八月九日、あなたの寺でその月の十五日から講習會があるとき〻まして、著たなりの一介の乞食坊主が、漂然として行つて、草鞋をぬがしていたゞいたのです。私の旅の草鞋はあなたのお臺所でぬがしていたゞいたのです。敏様はその時お留守でした。あなたとお母さん丈けでした。私も見ず知らず、あなた方も見ず知らず、知らぬ方が、知らぬ乞食坊主をあげてお育てくださつたのでありました。私はあの時、これまでない淋さと悲しさと耻かしさとを感じました。私は氣でも違つてこんな處へ來たのではなからうかと思ひますと同時に、私の故郷の一隅には「ざまを見よ。今の有様は何だ、旅から旅へと物を乞うてあるく乞食ではないか、それでもまだ目が醒めぬのか、なんて強情な奴であらう。今に見よ、天罰があたつて野か山にのたれ死するのだ。あの位引きとめるのも聞かないで、お前は畜生だ。猫か犬だ、今から四ツばひになつて歩け……。」かうした怖ろしい聲が頻りに聞かれました。私はこの聲を聞いたとき、草鞋を穿き直して走せて歸國しやうかとも思ひました。幾度も思ひました。而して一人であなたやお母さんにかくれては幾度も泣きました。私は實際畜生なのです。猫か犬なのであります。けれども私は第一にあなたから助けられました。敏様のお留守の處へあがつて、あなたから足を洗うて貰ひましたのです。眞に一人身になつて旅に寢た事は、あのときが始めてゞありましたが、若しあのとき、

私に足を洗うてくださる方がなかつたら、私は遠の昔に、野か山でのたれ死してゐたのでありませう。私は實際三界の孤兒であつたのです、あはれなる寂しき旅の乞食であつたのです。

今でも洗濯をして著て居ります一枚の綿入白衣、わすれもしませぬが、あれは中野様の奥様から反物でいたゞき、あなたのお手で縫うていたゞいたのです。あの白衣を著せていたゞいて、『お正信偈』を讀むやうになりました。あの白衣を著せていたゞいて如來様の前に參らせて貰ふ様になりました。あの白衣を著て四十四年の春、お得度をさしていたゞきました。あの白衣を著て如來様のお慈悲を話さしていたゞきました。私はかうしたお手數と、ものうい目にあなたをあはせました。それにもかゝはらず、あの深いお苦しみを汲みとる事が出來ず、出す涙は濁りにしみて澄み切らないのであります。どうぞ許してください、生前はよくお見すてなくおそだてくださいました。

御臨終の夜は至つて靜かでありました。お醫者様の注意もありましたので、あの晩はランプを次の間に隔てゝ皆が靜かにあなたの枕元に集まつてゐました。ランプの加減で、光がお居間の靜かさと調和して大變氣分が勝れた様に感じました。「丁度黎明期の様だ」と誰だか申しましたが、全くそんな様の氣分でした。ほのぼのと灯がさいて何んとなく希望の春を夢みる様の氣がいたしました。あなたの息使ひがだん〳〵靜になりました。私は、「少し變つて來た様だ」と申しますと、看護婦のキヨ子さんが、さうですねと様子を見ました。それから私はお居間をさけて休んでゐますと、キヨ子さんが、あわたゞしく私を起します。はつと思うて御様子を窺ひますと、モー、シャイネストック氏型の深いとぎれた息使ひであります。今だ〳〵といふ中に早や最後の一息になりました。それが十時三十五分でありました。無常鐘が一つ鳴りました。枕經があがりました。私は西さんと電報うつ用意をしました。

あゝ、房子様、最後の一息がこの世の名殘りなのでありますね。

二十二日の晩は高光さんと西さんと三雄さんと私と『歎異鈔』の輪讀を御靈前にさせていたゞきました。そして第九節の「久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ」、といふ御文を拜讀させていたゞいたとき、思はず知らず高光さんと私と共鳴して泣きました。そせて御看護にあがつてから今日まで直接經驗いたしました事ども思ひいでて、我が煩惱の姿をさながらに見せられた樣な氣がいたしました。ありがたいお通夜をさせていたゞきました。

二十三日の晩は敏樣も、お里の兄上も加はられまして『口傳鈔』を輪讀させていたゞきました。そして「一。凡夫として毎事勇猛のふるまひみな虛僞たる事」と、いふ一節は、始め高光さんが話され、敏樣があとから泣き顏を仰へて親切にお話くださいました。矢張りありがたいお通夜に逢はせていただきました。

二十四日の朝は、佐々木先生が見えまして、少し咲きかけた梅や櫻の花をもつてあなたの前に默然として坐られました。敏樣がつか〳〵とそこへ來て「佐々木君、死んでしまうた」というて泣きふせられました。敏樣は泣くかと思へばすぐ又から〳〵と笑はれます。愛妻に別れられた夫の情調は私には味はれませぬ。

京極さんは二十三日に見えた樣です。木場さんも牧村のお八重樣も四日の晩でしたと思ひます。お八重樣が、あなたの棺前につか〳〵と進んで「なぜ死んだのです奥樣、いま二三日までなかつたのですか」と、わんわんいつて泣かれました。私も堪らなくなりました。

四日の晩は本堂でお通夜をさしていたゞきました。同行衆で一杯でした。

『末燈鈔』と『歎異鈔』とを輪讀させていたゞきました。佐々木先生と高光さんと私と木場さんと、越前から來られた阿古江さんとでお話をいたしました。佐々木先生が餘り泣かれるので、かわいてゐた私の目がまたしめつて來ました。私は秋の彼岸頃に、あなたときの子狩をした事などを思ひ出してお話しました。

生前はあなたから色々ありがたいお話を承はりました。今では皆忘れてしまひした。覺えてゐるのは同行の米永キヌ女の家へ連れていつていたゞいて、キヌ女が五體投地して大懺悔と大感謝をされましたとき、そのときあなたがはら〳〵と泣かれましたのと、秋の彼岸のきの子狩の姿とが一番はつきりと殘つてゐます。

あのときは、たしかお晝過ぎであつたと思ひます。天氣はよし、あたゝかではあり、家に居るのが惜い樣な日でありました。私はあの頃、お經の稽古をして毎日あなたに笑はれてばかり居りました。朝の勤行のとき、『御文』を拜讀いたしますと、あなたは、私が妙な讀み方をいたしますので、私の後でころがつて笑つて、堪らなくなるとお座敷お茶の間の方へ駈け込まれましたことも御ざいました。私は、あれが非常に癪に障つて、いつぞやのお說敎に申しますと、あなたは、「あゝ、牛腸さんに恨まれるから、今度からは笑はぬ樣にしませう」と、それとなく私にいはれました。けれども私のまづい讀み方にはどうしても堪らなかつたと見えて、朝の勤行の時は、きまつた樣に笑ひでした。私は大に悲觀しました。そして歸國しやうかなどゝ又もや思ひ起して一人で殘念がつて居りました。お母さんが氣の毒がつて「房や、なんぢやい、笑つてばかり、何がそんなにをかしいといふもんぢや」と、時々のお小言でしたが、今からあの頃の事を思ひますと、私でさへをかしくなりますもの、をかしくて堪らなかつたのも御無理とは思はれませぬ。お母さんで

さへ、あなたの笑ひこけられるのを見て、くす〳〵とお笑ひになりましたもの、生前のあなたはいつも笑ひ手、今の私はいつも笑はれ手でありましたね。あの頃高光さんが時々來られましたね。そして私のお經を稽古して居るのを側で聞いてゐて、あなたとぐるになつて笑ひはやして居りました。私は「人を馬鹿にして居る、懸命になつて居るのを笑うて何になる、いやな人達だな」と、腹では大に恨んで居りました。

併し、あのきのこ狩の頃から私は漸々あなたと親まれるやうになり、心おきがない樣に思ひまして非常に樂でありました。あの時は、隨分方々の田の中を歩きましたね。けれども始めの中は例のはりのきごけが容易に見つからないのです。それからあなたは方向をかへて、すぐ寺の裏方を流れて居る川筋へ來て、同行の藤田のかあかに笑はれ、「こけとりでござんすか、私もお手傳いたします」と、先きになつて川へはいります。あなたもお尻を端折つてざぶ〳〵とおはいりになります。私もあとからはいります。かうして三人が、きたない川へはいつて兩側の木の根を探します。こんな處に何があるものかと私は始め馬鹿にしてゐましたが、しばらくすると、あなたが、とんまな聲を出して「ありますよ、ありましたよ。御覽ンなさい、こんなにあるじやありませんか」と、得意になつて先を爭つて居られます。それから私もあなたに敗けぬ氣で探がしました。きのこは小さい笊に一杯ほどとれたと思ひますが、あのときは大變愉快でありましたね。私はあれまであなたはあんな事をさるお方とは思ひませんでした。あゝしてあなたが低い處へ身を下して見せてくだされたので、私は漸々打ちとける樣になつたのです。事はちがひますけれども、御開山樣が私の樣なものゝ手を引いてくださるのも、矢張り低い處へ親らお下りなされ、「自分は凡夫ぢや〳〵」と、常におほせくださつたからであると思ひます。私は下劣な奴で高い處にとまつて居られる人から

は、どうしても手をとつて貰ふことが出來ぬのであります。あなたが常々法悦の涙にむせばれますときよりも、あのときのきのこ狩が、私にとつて大變親しい御説法でありました。お笑ひになつてはいけませぬ。ほんとに私はさういふ奴なのであります。

私はあなたが、お臨終になつたお居間にいつもおとこをのべていたゞきました。あのお居間に引きつゞいた三疊が、私の書齋にあてられて居りましたのですが、いつか私が居睡りして居るのを、あなたとお母さんに發見されまして、あとで大にひやかされたことがありましたね。あのときは、あなたとお母さんとが庭を歩いておいでのときで、あなたが例の大きな聲で「あらあきれた、餘りひつそりして居るから今日こそは勉強していらつしやると思つたら、又居ねむりか、そんなに眠つてばかりゐてどうするのです、眠る位ゐなら、ちと出てお遊びなさい」と、なにやら木の枝などをためて笑ひ乍ら、からかつて居られました。私はあのとき窓のガラス戸を憎みました。このガラス戸さへなかつたら大丈夫發見されなかつたのにと。御厄介になつて居りまして、始終あなたのお笑ひ草の因になりましたことですね。

けれども、いつ頃でありましたか、私はあなたに復讐してあげたことがあります。あなたはあのとき、敏樣に大變小言をいつてをられました、「自分ばかり好きな本を買うて、私には著る物一枚買つてくださらぬ。……私だつて紋つきの著る物ぐらゐ入りますよ」と、大に怒られました。すると敏樣が、調子をはづして「あは〳〵」と馬鹿笑ひされました。するとあなたは敏樣に、「あなたは何がをかしいのです、何を笑つて居るのです」と、益々眞面目に迫られました。敏樣はとりあへず、「この笑か、これは紋つき笑ひといふものだ」と、又から〳〵お笑ひになりました。私はあのときぐらゐ、痛快を覺え

た事がありませぬ。思はずとび上つて手を拍つて笑ひました。あのときは餘り笑うて目から涙が出ましたよ。人の困るのを笑ふのはどんなに愉快なんでありませう……。御厄介になりました半歳の中、三分の一はねむり、三分一は笑ひ、三分の一は泣きました割合ですね。

二十五日のお葬式には涙のお顔が方々に見えました。敏様が、あなたの御遺骸が御堂を出ますとき、目を掩うて泣かれました。私はけろりとしてゐました。門を出ましてから、黄鳥の聲が手にとる様に聞えました。私は自然の音樂を聞く様な氣がしまして嬉しくありました。村はしに出ますと、遙かに日本海が見えます。私は水に洗はれた様な氣になりました。而してこの人生の生死の海に、如來様の大光明が點ぜられた様に感じまして、お念佛が頻りに現はれてくださいました。

夜になつてから、水入らずの連中が、あなたの御臨終の居間で運座をくんで思ふがまゝに笑ひました。あんな無遠慮な笑ひ方がどうして出來たのでありませう。不思議でありました。あの晩、多田先生の物語に

「あるお爺が、酒を呑み乍ら、にがい顔をして額にしわをよせて、一口呑んでは杯を眺めて、如何にも心配さうな顔をして居るものですから、子供がその様子を見て、「お父さん、あなたはなぜそんな顔してお酒を呑むのです。お酒がにがいのですか、甘いお酒なんでせう、なぜそんな顔なさるのです」と、問ひつめると、「かうして呑んで居るのはよいけれど、一口呑めば一口丈け甘い酒がなくなるのだ、それを思うと悲しくて堪へられぬわい」と、お爺がいふたさうです」。

この皮肉な話が、どうしたことか、又笑の因になつて、どつと笑ひ出すのです。私共はどこまでも皮肉なのでありますね。あなたの御遺骸が荼毘の煙となつて居る最中にかうして笑ひぬいて居るのです。

灰葬の朝は俄かに霰がふり出しまして前の日とは打つて變りました。大きな霰で、それが衣や顔に打ちつかるのです。女の人達などは非度い目にあひました。白張提灯が吹きとばされさうでした。お骨を拾うてゐますときも、風と霰とが止みませぬ。歸りにはやゝはれてまゐりましたが、小さい川には霰が一杯になつて流れます。人生はこの小川に押し流されて居る霰だなと思ひました。堅い霰も、大きい霰も、小さい霰も、まだよくかたまらぬ霰も皆ひとしくこの川に押し流されるのだ。かう感じつゝあなたの齒骨を抱いて來ました。この私が、このまゝに押しながされて居るのだ。「生死の苦海ほとりなし」とはこのことだと、頻りに人生の無常が胸に攻めよせて來ます。私はかう思ひつゝ、霰川に逆行して戻つて來ました。戻つてからお燒香させていたゞいたあとで、『白骨の御文』をいたゞきましたが、一句一句胸にうたれるのです。あなたが常々「死ぬのはいやだ、どう考へて見ても死ぬのがいやだ」と口ぐせの樣にいはれましたが、いかにいやでも死の關所が我が前にも後にもあるのですから、蓮如樣の仰せの通りでありますね。あなたはよくこの寂しい怖ろしい悲しい關所を通つて見せて下さいました。死は生命の大革命であります。この大革命は人の力ではどうしても越える事が出來ませぬ。若し人の力で越えやうと致しますれば、それは地獄一定の外はありませぬ。

阿彌陀觀音大勢至　大願の船に乘じてぞ
生死の海にうかみつゝ　有情をよばうてのせたまふ（『和讃』）

とありますが、あなたはよくこの大願の船に乘つて見せてくださいました。房子樣、愛別離苦ほど人生に慘憺たるものはありませぬ。昔を語たる樣ですけれど、私が廿年來住みなれた、越後の寺を出ますときに、人から見たらつまらない小さい物でせうが、それが氣にかゝつて非常に離れにくい事でありました。机を見れば机が氣にかゝります。筆を見れば筆が氣にかゝりま

す。硯を見れば硯が氣にかゝります。書棚を見れば書棚が氣にかゝります。何んでも自分に手なれたものは一つでも離したくない。若し一つでも離せばそれが非常にさみしく涙の因となるのです。私は何よりも机や書物に別れるのが一番いやでありました。處があなたの場合は此人生全體をはなれたのです。人生を犧牲になされたです。これがつらくあるまいか、これが悲しくあるまいか、これが寂しくあるまいか。あなたはよくこのつらい悲しい寂しい關所を通つてくださつた。あなたは娑婆に於ては私を育て、死の關所を通つては、私を導いてくださいます。清澤先生が「其大恩高德、豈に區々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや」と、如來救濟のお慈悲を稱へて居られますが、私はこの感謝のお言葉と一つに、あなたに大感謝をせねばなりませぬ。

房子樣、遇ふといふ經驗は人生にとりて由々しき大事でありますね。蓮如樣が「たのむ一念の所肝要なり」と、常の御化導でありましたが、其たのむ一念とは遇ふ事ではありますまいか。春に遇ふた草木は必ず咲きます。秋に遇ふた草木は必ず黃ばんだり紅葉したりします。而して枯れ凋むのです。鶯も春に遇はなければ鳴く鳥ではありませぬ。雲雀も春に遇はなければ鳴く鳥ではありませぬ。一切の物は何物かに遇はなければ存在の意義がありませぬ。遇うて然る後に、否や遇ふといふ經驗が存在を生み出すのです。御開山樣もお遇になりました。蓮如樣もお遇ひになりました。而して私共にも遇へよ〳〵と御催促してくださいました。私は今日迄何に遇うて生きて來たでありませう。夫は親の親切です、師の親切です、友の親切であります。而して其凡ての上に如來樣の御慈悲に遇はせて頂きました。若し私が如來樣の御慈悲に遇はせていたゞく事が出來なかつたら、あなたの生前死後の御親切にも遇ふ事が出來なかつたのでありました。

房子樣、遇ふといふ事は、一念の所でありますね。此一念がなかつたら私

は今どうなつて居るでありませう。今から四年前に見もしない北安田を訪ねて來たのでありましたが、若しお訪ねをしても、あのときあなたが「さあお上り」と親切なお言葉をかけてくださらなかつたらどうであつたでありませう。一念は肝要でありますね。私は今日迄如來樣が私を呼びづめにしてゐてくださつたのだとは、少しも知りませんでした。それが人生の一人旅の寂しさに打たれて、たのまずには居れなくなりました。が如來樣に遇はせていただく宿緣でありました。この宿緣にもやうされて、あなたにお遇ひさしていたゞく事が出來たのであります。御開山樣が。

本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき
功德の寶海みちゝて　煩惱の濁水へだてなし

と仰せになりましたが、今日は此『御和讃』が私の眼を開いてくださつた樣な氣がして胸一杯に感ずる事であります。

廿六日の晩は寂しい晩でありました。家のお母さんは餘りおすぐれでありませぬので、皆がそれとなく心配いたしました。お里のお母さんも兄上もお歸りになります。あとの明達寺は、旅につかれた人達が合宿しました樣に、おもい暗い氣分に襲はれてお念佛にも力なく一夜を過ぎました。廿七日の朝高光さんが、あなたの御靈前で泣いて行かれたと、敏樣が私にいうて居られました、何を感じて泣かれたのでせう。

高光さんが行かれたので猶ほゝ寂しくなりました。

廿八日は朝早く私もお暇をいたゞきました。私は泣きませんでした。けれども胸一杯に雲がかゝつて居る樣な氣がして、行くのが後を引かれる樣でありました。

それからモー一月立ちます。早いものであります。孤獨の人生は早く立つて行きます。

この廿一日の朝、東海道に來ますと、あなたの生れ故郷が見えます。田園には梅や菜の花が、春雨にしつぽりとぬれて咲いてゐます。富士山は見えませんでした。裾野が少し見えました。波を弄ぶかもめがとんで居りました。

かもめのとんで居る海を見て、氣がつきましたが。あれは四年前の夏でありましたね。あなたと廣瀬さんと私と、まだほかに二三人居られたと思ひますが、すこし蒸しあつい日の午後に、おすしなどこしらへて貰うて小舞子の濱に遊んだことであります。

私はあのとき、日にやけた砂の上に腹ばひになつてごろ〳〵寢て見たり、貝がらを拾うて見たり、砂に穴を穿つて波の來るのをおもしろがつて見たり、色々のことをして遊びました。あなたの、あのときの笑ひ聲が今でも私の耳の底に殘つて居る樣な氣がいたします。

みんなが海に這つて居ります中に、雨がおちて來まして、あわて丶茶屋へかけ込んだ樣でしたが、あのときの事を思ひ出しますと、今でも笑ひ出したくなります。

あの日は、降るまいと思うて出かけたのですから、誰も雨具は用意して居りませぬ。五人か六人の所へ、女用の傘が二本しかありませぬ。雨がだんだん激しくなつて來ました。眞黑い雲が、海一面に蓋の樣になつて追ひかむさつて來ました。茶屋は、假り小屋でありますから雨の日は天下茶屋同然で、潮をふくんだ雨が、ぽた〳〵と狼藉をきはめます。それ傘をと、皆ながあわて丶居りますけれども、あんな小さい傘では何の用をもなしませぬ。雨は夕立の樣にふつて來ました。始めの中は、雨のもらない樣な處へ身をよせてゐましたが、どうしても勘忍しきれなくなりまして、あの小さい傘の中に二人づつはいることにして、停車場までかけつけました。汽車の時間が迫つて居りますのと、砂の道が三丁餘りもありますので、あんな氣をもんだことはあ

りませんでした。二人づつよぼ〳〵歩いて來るのが氣が氣でないのです。それでも汽車には丁度間に合うて無事に歸ることが出來ました。

あれからモー四年たちます。四年目の今日は一月前にあなたがお淨土へお還りになつてから五日めであります。なぜかくはかない娑婆なのでせう。南無阿彌陀佛。（三月廿五日午前稿）

（藤原鐵乘）

一四。思ひ出

母と共に鄕に留守せし房子が旅にある
我に寄せし文のはしにかける歌

夫の君と空晴れわたる野に出でゝ野菊つみけり
御名うたひつゝ

君來ませ清き河邊にほゝゑめるかぶと花つみ御
名をうたはむ

すむ月にむかひて君を思ひつゝ波の音きく夕さびしき

寒菊の清くゆかしき花を見てわが罪はづる木枯の夕

主人なくながむる人もなき身ぞとかこちがほなる白菊の花

たのしみをえんとおもひて苦しみの淵にとしづむわれひとあはれ

夫の君とうたひかたらふうまし夢さめてさびしき松風の音

なつかしき君が門出をおくるとか赤き椿の一つ笑ひぬ

慈悲ぶかき母のみもとに君戀ひて待つ子のあり
としろしめせ君

苦し胸しのびて君を送りしも今はたのしくまつ
身ようれし

なつかしき君見送りてみほとけのみ名をよびけ
り乳房ぞたかき

御力はわれにくだりぬ今日よりは弱きこの身も
いさまるゝかな

御佛のみ手にすがりてゆくわれは松にからめる
姫蔦に似て

蝶追うて家路わするゝ子供等に罪のかげ追ふわ
れを見るかな

光なくばかげもあらじとあさましく光をよけて
くるしみしわれ

君戀うる胸のむら雲晴れにけりたゞぬかづきぬ
くしき力に

弱きわれの弱きかなしみふみ迷ふ野邊に聲あり
御名にたよれと

萩の庭に君を偲びて泣きくれて去にし悶えの跡
はづかしき

黑雲の月をおほふとみしわれの月の光に雲をみ
るかな

わがつけしつみのほのほにとびいりて救ひをも
とむあさましの身よ

霰ふるながき一夜を人戀ひて御名にいそしむ幸
多きわれ

道もなうふりつむ雪も御光にとけてながれて大
海に入る

御力にたよらばやすきうつし世を御手をはなれ
て悶ゆわれひと

さだめなき肉のちぎりに泣く人よ靈にゆきませ
そこに幸あり

うるはしき君水仙になぞらへばわれはそへにし
桃色椿

かりがねに胸の血わきぬ雁なくとつげませし夜
の偲ばるゝかな

月きよくさやけき夜半にひとり居の思ひ多き夜
みゝづくの鳴く

あたゝかき母のみ胸にうなされの夢に泣く子に
われを見るかな

みてらしに雪きゆるごと御名により胸のもだえ
のうすらぎにけり

肉の君は海山遠くへだつとも靈にほゝゑむきみ
とわれかな

鶯のさへづるあらば君戀ひてうたふみ歌ときこ
しめせ君

霞ひくのどけき空に蝶となりて戀しき君にまみ
えたきおもひ

戀に泣くあつき涙に墨すりて君戀ふ歌をかきつけんかな

あなうれし罪のあれ野にまよふ身も慈悲の御親のみ手にすがれば

死を恐れたゞうつし世とはかなみしきのふのわれのはづかしきかな

世の波に溺るゝこの身救はんと船出したまふ慈悲の御親よ

名に悶え戀に悶えし賤が身の御親の膝にたのし夢見る

罪の世よ悶えの身よと苦みそたゞみ力にすがるわが友

五月雨の晴るゝまなきに咲きいづる菖蒲の花に
思出多き

笹百合のかほれる山路薪負ひて歸る少女の歌お
もしろき

野茨の中にほゝゑむ白百合に戀しき君がおもか
げをみる

みめぐみの泉くみませわが背子よわれはわかた
ん渇ける人に

共にあらば絶えよといひし玉の緒も別れては惜
したゞに逢ふまで

この花に思ひみだるとめでし花地に葬りぬ空く
もる朝

夢に見き花咲く園に御手とりてみさとしうけぬ
くしきひじりに

信の内にわれ送りにしよき君と悶え尊む悶え多
き子

この悶え慰むべしと花折れば蝶まひいでぬ君の
みたまか

風もなう月おぼろなる春の夜に佛をたゝふ信の
はらから

あけがたのむらさきかすむもやのうちに鳴く鳩
の音よ尊きみ使ひ

負ひゆく少女が肩の花束にとびかふ蝶とわが魂
を見る

めづるとて植ゑしすみれは枯れはて丶捨てし毒
草いやさかえゆく

賜はりし信の妙衣うれしけれどなほ捨てかぬる
なれし古衣

君なくばいかにくらさん思ひ多きこのみどり葉
の永き一日を

すみれうつる水田に戀のうたよみて遊ぶ蛙をね
たましうこそ

御光のこのやわうでにすがりつ丶くしき花見ぬ
戀しき人と

苦しとて苦むそこに地獄あり苦しみすて丶御名
にゆけ君（病める妹に）

すむ月に思ひみだるゝわが袖にかをるよゆかし
桐の花風

汚れより汚れにはしる人の世にたゞ清けきはみ
名による時

別れては逢ふ日を願ひ逢へはたゞ別るゝ惜む悶
えのこの身

人の世のさだめに泣きてさだめなき人にたよれ
る人々ぞあはれ

夏の夕空灰色にかきくれてかうもりとびぬ棟の
かなたを

夕もやにけだかき富士の影きえて星さえわたる
ほうの木の丘

闇の世の螢の光うつくしき御名よ尊しけがれの
この世

鮎つりの童子のかげの消えうせて木の下かげに
螢見るかな

鳴く蟲の聲はとだえぬわが庭の芭蕉にそよぐ秋
の夜風に

我思ひ大空かけり君が行く箱根の山の萩と咲き
でん

身をなさば悶えはあらじ七草のうす衣まとひな
く鈴蟲に

人の世の苦み捨てゝ悶えなき淨き御國に旅だ
ちし君

光明あり希望はみてり秋はたゞ悲しきものと泣
きしわが身の

雪ふかき野越え山越え春は來ぬもだえにのぞむ
淨樂の國

月はすみ梅はかをれどなか〳〵に晴るゝともな
きわがこゝろかな

咲くもありまた散るもあるわが庭の花に知らる
る世のさだめかな

白よ黄よ赤よ紫とり〴〵の花うつくしき春の野
邊かな

みほとけの國もかくやと木犀のゆかしき風に御
名をよぶかな

うつくしきなつかし君の思出と木犀かをる野に
さまよひぬ

夢に見き聖人生れまし君とわれをいだきて去り
ぬみ佛の國

霰ふる長き一夜を波の音に罪を數へて念佛する
かな

世の人は我にそむけり御手とればうれしやすべ
てわれまもります

苦し世といふもしばしよ悶えなき國にいでたつ
旅の一夜の

たのしみにもだえひそみぬくるしみによろこび
もあるくしきうきよや

雪ふかき我すむ里もあたゝかし榾火かこみつ御名たゝふ夜は

今はたゞ罪のうきよもはた遠き未來も君が御計らひのまゝ

ふけし夜の霰の音のたえまゝくきくもゆかしき尺八の音

みすがたを胸に祕めつゝさと消ゆるまぼろし追ひぬおろかと知りつ

來し方もゆくゑも知らず迷ふ身の道しるべなり御廻向の御名

大なる御手にいだかれくるし世を樂しくとほる幸を得しかな

大なるみことかしこみあれましゝ君は行きけん
紅葉ちるけふ（幼き姪の死をきゝて）

君なくばなどながらへん罪惡の鬼のとりことな
りしこの身の

御力に罪の影追ふ身となりぬつみに追はるゝあ
さましき身の

君に逢ひて常住の命われ得たりと野菊しぼみぬ
星さゆる夜

稲穂拾ふ少女の歌に胡蝶舞ふ片山里の秋ぞゆか
しき

たまはりし信と愛との歌よみていねし長夜の夢
あたゝき

後の世と人は云へども御手なくば罪の現世悶え
て死なん

白きをばのぞむ心を折々は赤きつなにもふるゝ
われかな

みはからひのまゝとはいへどはからひし心のと
もにみはらひのまゝ

人戀ひて泣きしは昨日御名のうちにその人を
見る幸を得しかな

御手なくばなど助からん罪の淵に罪と知りつゝ
沈み行く身の

少女子の手毬のうたに罪もなき十年昔のわれを
こひにき

鶯のやさしき聲に梅は笑み梅のかをりにうたふ
うぐひす

苦みは樂みとなり御光に闇は晴れたり君に逢
ひし日

なつかしと思ふ思ひにみだれてはよしあし知ら
ず君を戀ふかな

後の日のことはえいはず今日一日樂くあれと
ねがふ我かな

愛の手をとりて花野のさすらひに似るよ御名よ
ぶ刹那の思ひ

生はたゞ死にゆく旅とはかなみし思ひはとはの
光に晴れぬ

大なるみ手にたまひしよき君の愛の花輪のうつくしきかな

秋の風君と並びて小波のよせくるを見し時のごと吹く

胸の奥に祕めたる君の御姿のあまりに清し汚れのわれに

露おきて萩の色はゆそれのごと悶えてはます信のよろこび

暗の世にとり殘されし心地してたゞ涙しぬ入日ながめて

肌寒しみ手と芙蓉を握りしめ花を頬に觸る朝ふく風

相見ては憂きは去れども涙ぐむ胸のひゞきをききますやきみ

執多き我よはづかし枯れ果てし菊の花をもなほ捨てかねつ

一五。愚癡

一

何でも明治三十一年の三月頃のことであつた。

この頃私共が學んでゐた、眞宗大學は京都高倉通魚棚上る所にあつた。門が黑色にぬつてあつたので黑門大學というてゐた。町を挾んで學校が建つて居た。その東側に講堂と寄宿舍とがあり。その西側に教室があつた。私共はこの寄宿舍にゐたのであつた。

佐々木月椎君の室は、二階の北側で西の方から一番目の八疊であつた。その室から隣の寺の墓場が見える、それから東山や比叡山が手にとるやうに見える、あかるいよい部屋であつた。

日は確と覺えてはゐないが、好い天氣の日であつたことは覺えてをる。自修に飽いた午後の四時頃、

「勉强かね。」

というて私が佐々木君の室にはいつた時には、同室の誰もゐないで、佐々木君唯一人机によつて、手紙をかきかけてゐる。

「手紙をかくのか」

といひ〳〵私は、彼に對つて机によつだ。

「國の妹から、面倒臭いことをいうてよこしたものだからね。」

と彼はいうた。彼と私とは中學の三年級からのなじみであつて、多田君と三人は、常に同心一體になつて種々のことをして來たので、互に家庭の事情などを打ちあけてをつたのである。佐々木君の實家は三河國碧海郡古井村願力寺である。兩親は壯健でゐられる。兄さんは妻を迎へてゐるのだが、父親の

儉約な性質と、兄さんの放蕩な心とが合はないので、月椎君は、その間にはいつていつも苦んでゐた。兄さんがこんなものだで、兩親も弟妹も月椎君に何でも相談することになつてゐた。父の信用もあるので、妹から月椎君に自分の身上のことを相談して來たのである。

「何をいうて來たんだ。」

ときくと、彼は机の引き出しから一通の手紙を出して、

「之を見てくれたまへ、僕の二番目の妹ね、房子といふ、君が一昨年來た時にゐたあの小さい方のね、あれも今年十三歲になつた。小學校はもうすむから高等女學校にはいりたいが、お父さんが許してくれぬから、僕にどうかしてくれというてよこしたんだよ。君は覺えてゐるでせう、花火を見に行つたときに後からついて來たんだがね。」

「いや、僕は氣がつかなかつた。君には妹が三人あるといふたね。學校に出

たいといふたら出したらよいぢやないか。」

「それが、さう君のいふやうに簡單に行かないんだよ。父は隨分頑固なたちで、女にはそんなに學問さすことがいらない。貧忙な中から、學校へ出して、いよ〳〵學校を卒業すると、相應な所にやらねばならぬ。さうすると仕度も澤山かゝる。そんなことはとてもできぬから、小學校がすんだら裁縫でも習はせて、よい加減に片づける方がよいといふんだがね、妹はなかなか勝氣な奴で、ものもよくできるものだから、もつと學問したいから、僕から父に賴んでくれといふんだ。父のいふことも、同情ができる、妹にも同情ができるので僕は困つてをるのだよ。」

といふのを聞きながら、私はその手紙を讀んでゐた。文字も十三の少女のかいたものと思へぬほど確り書いてある。文章も達者にかいてある。ふとこの女を將來自分の妻にしたらといふ氣がおきた。そこで、

「君、僕にその妹をくれぬか、僕の所に來るには、着物などの仕度は何もいらぬから、その代り本人の望み通り學問をさせてをいてくれ。どうせ嫁にやるのには、金がかゝるのだから、それだけの金を入れて學問をさせてやつたらどうか。」

「父はなか〳〵頑固だからね。」

かくて話は他の問題に移つて行つた。

二

明治三十三年の夏には多田君、佐々木君等と共に、黑門の大學を卒業した。私は二十四歳であつた。その秋から三人各異つた目的を以て、東京の本郷森川町に寓してをられた清澤先生の膝下に集つた。まもなくその寓を浩々洞と名づけることになつた。あくる年の一月から、京都にゐた時に計畫して來

た雜誌『精神界』を發行するやうになつた。この年の冬の頃、佐々木君が房子が十四歳の時に撮つた寫眞を送つて來た。田舍風の娘姿でうつつてをる。私は彼女の顏を見たのが、之が始である。この時、母にこの寫眞を見せてこの子が大きくなつたら私の妻にしようと思ひますというて許しを得ました。この年の十一月佐々木君の長兄采圓君が肺結核で死なれた。

三

三十五年、私は二十六歳になつた。房子は十七歳になつた。國の方では、母が頻りに結婚を急がれる。

三月の初め、未だ風の寒い、ある夕、佐々木君と不忍池畔を散歩した。

「國の母から頻りに結婚を急いで來るが、先年の約束通り妹をよこしてくれないか。」

「正月國に歸つた時に一寸、父にその事を云ひだしたがね、父がどうも進まぬやうで困る。昨年兄が死に、まもなく兄の子も死んだので、家のあとをたてる者をきめねばならぬ。僕の次の弟は繪を研究したいから寺に居るのは嫌ぢやといふし。この次の妹はもう片づいて居るしするから、房子に養子させねばなるまいかと親達がいうてをるから、氣の毒だが君のところへあげられぬやうぢや。」

「そりや困るな、僕は二三年このかたちやんと心にきめてゐたのだ。夫に昨年から母にもいうて母も樂みにしてゐるのだから、今更そんなことをいはるゝと困まるな。」

「實に、君には氣の毒ぢや、家の事情がかはつて來たのだからね。それに父は國が遠いから、氣が進まぬやうだ。」

「遠いつても、十時間で行かれるぢやないか。寺は弟が厭といふなら、三番

目の妹に養子をしてもよいぢやないか。」
「父はなか〳〵云ひだしたことは、後に引かぬ人だから今度は僕も困るんだよ、どうか君すまぬがね、あきらめてくれたまへ。」
「夫ぢや仕方がないのかな。」
もう日は暮れて、軒の火はキラ〳〵と光つてをる。世の中の萬事は思ふまにはならぬものだなど語りつゝ洞に歸つた。

四

この年の二月一日、洞は東片町に移つた。五日に清澤先生の長男信一さんが洞で亡くなられた。
私があてにした妻を斷られて、失戀の悲みをしてをることが見えたためであつたか、一所に洞にをつた、近藤君と洞に折々通うて來る安藤君とが、F嬢をもらつたらどうかといふ。F嬢はその姉S嬢と二人で女子大學にはいつてゐて折々洞に聽聞に來る姉妹である。思うた女が貰はられぬことになつて弱つてゐた私は、F嬢を貰うて滿足ができるやうに思うた。母も許してくれた。近藤、安藤二君が先方の親に相談してくれた。本人は承知ぢやが、父と兄とが許さぬといふ。種々と云て見たが駄目ぢやつたと二君が云てくれた。
私は大へん弱わつた。然し私には、房子に對して親が許さぬでもどうでもといふ執心を起さなかつたやうに、F嬢をも思ひ切つた。もうこれで、自分がほしいと思ふた女は二人まで、駄目になつた。この問題に觸れるのが面倒臭くて厭やになつた。どうでもよいと思ふやうになつた。でこの夏期休暇の了りに國をたつ折には、誰でも母上の目に叶ふた人ならばと、まかしてしまふた。

五

九月の始め、東上の途次、私は三州上佐々木村の上宮寺なる佐々木君の寺にたちよつた。恐ろしい勢で蚊のうなつてゐたことが記臆に殘つてをる。

夕飯がすんだ後で、佐々木君は、先づその重い口を開いて、

「君の結婚問題はどうなつたね、F嬢との話はどうなつた。」

といふ。

「だめだつた。F嬢の話はね、父や兄が許さぬと近藤君からいうて來た。寺にやるのは厭ぢやといふんぢやそうな。で、僕はもう結婚問題に頭を費すのが厭やになつたから全權を母にまかせて來た。」

とは私の最初の返事であつた。

「實はね、先日古井の實母が來てね、曉烏さんのお嫁さんはきまつたかと聞くから、まだらしいといふと、この前からの話を再び初めて、房を貰うてもらうわけに行くまいかというてゐたつだんがね。」

「そうなりや、僕は至極滿足する。然し養子をとるといふのはどうなつた。」

「さあ、それがね、兩親からいろ〳〵いふが本人が承知しない。そんなら近いところに嫁入せやうというても承知をしない。そうして、身體がわるいというて元氣のない日を送り、折々泣いてゐる。そんなら曉烏さんのところに行くかときくと、厭やぢやといはぬ。それで兩親もてこずつて、君に貰うてもらはうといふ氣になつたらしいよ。」

「早く斷念した僕は薄情だつたね、女はえらいもんぢやな。」

「然し君、母がいふのには、ともかく今まで一邊も本人を見て下さらぬのだから、見合ひをしてほしいとのことぢやが、どうか一邊見てくれ、さうした上でしつかり話をきめやう。」

「僕は見合ひなんか厭ぢや。見た上で厭ぢやといふたら、そんなに僕を思ふてくれる女を殺すやうなものぢや。元來が、君の妹ぢやからほしいと思ふたんだから僕は見ないでもよい。母も喜ぶことであらうから話しは進行させてくれたまへ。」

「そんなら、尙一邊、實家の方にとくと相談した上で確かりきめやう。何分月末に僕も東上するから東京で話をきめやう。」

「それぢやさうしてくれたまへ。」

私は勝利者のやうな心持ちで、東京に來て、十日ばかりたつて、佐々木君が來た。話はきまつた。

十月五日に清澤先生の奥さんが亡くなられた。

結納は十一月の十八日にすまし、十二月の八日には、實母と佐々木君とに送られて、房子はわが家に來たのである。私はこの夜始めて顏を見たのである。

宴會は夜のあくるまですまなんだ。あくる朝早く實母と佐々木君とが國に歸つて行つた。

この式に列した安樂寺の法城師は大正元年十二月二十日に、卽願寺龍祥師は、同廿四日に往生せられた。其頃房子も病床にゐたのでお兩人共に一足先に行くと傳へてくれというて死なれました。

最初に私が房子にいうた語はこんなであつた。

「おまへは今度私のとこへ來てくれて私もうれしい。然しおまへは決して私をたよりに思うてはならぬぞ。私の身體も心も決してあてになるものではないぞ。でおまへは、最後のすがりどころを佛樣に求めねばならぬ。お互に佛樣をたのみて暮しませう。」

房子は「はい〳〵」と聞いてゐる。まだ十七歳の彼女はよくこの意を了する

ことができなかつたかも知れぬ。が彼女は十三歳の夏、その兄が母に、ひそひそと私のことを話してをるのを聞いて、心ひそかに私を自分の夫と思ひこみ。『無盡燈』や『精神界』や『家庭』やに私の書くものを注意して讀んでゐたといふ。それで來た時から、すぐ私の念佛の友となつてくれた。

結婚式がすんで十日たゝぬまに、私は東京に上つた。後日になつて彼女がいふには、あの時は實に淋しかつたそうな。母とは言葉が通じないし、食物が變つてをるし、氣候が變つてをるといふので、隨分辛ひ思ひもしたといふ。さうであつたにちがひない。其頃の私は、男子は、妻や母の涙に動かされてはならぬといふことを思うてゐたから、それをきいて、かわゆうないではなかつたが、平氣を粧うて東京に出ました。

六

三十六年の六月六日に先生が往生せられた其頃から、彼女の身體があまりすぐれなくて、金澤病院に通うてゐた。ぶつつめてねてをるほどでもなかつた。婦人病となつた。肋膜もわるかつた。あくる年になつてもはつきりしないので、三十八年の春から夏にかけて、郷里に近い、岡崎病院に入院して治療を受くること丶なつた。看護は實母と妹とにまかせて、私は東京に來てゐた。婦人病の療治をした。胸部もよくなくて、醫士もわからぬ發熱をした。或はこの時既に、結核に犯されてゐたのであつたかも知れぬ。

其頃、私は「感謝」といふ文を草して、兩親等の恩人に對する感謝の氣持ちを書いた。其内に病院にゐた房子に對する『感謝』を次のやうに書いた。

* * * * * *

總てをわがために用意したまへる如來は、わがために妻を與へたまへり。

昔は親鸞聖人其室を觀音の垂迹と信じ、自己の結婚を如來の結ばせ給ふ聖なる因緣によれりと信じたまひき。親鸞聖人を慕ひまつれる、末世の遺弟、今日絶待他力の信を得たることによりて、わが妻を如來がわれに對する愛と力との化現と信じ、わが結婚亦如來の計らはせ給へる聖なる因緣と信じ、會うて信の友となり、別れて道のために盡すの歡喜、何を以てか之に比せん。われはわが妻、房子を今生にわが愛する妻として得たる事を如來に感謝せざるを得ず。

わが妻房子よ、明治三十五年十二月八日はわが生涯に於ける一紀元を作せる日なりき。その日三河國碧海郡古井村山田才相師が第二女房たりし汝は、汝の兄にして、わが道の友たる佐々木月樵君の媒介によりて、我を夫と呼び我に妻と呼ばるゝ身となりぬ。時に汝歳十七、我歳二十六。爾來年を累ぬること四、月を經ること二十九。此の間、我多くは東都にあり。汝常に加賀なるわが鄕里にありて、老いたるわが母に奉事して怠りなし。かくて汝と同棲の日は五百日に足らざる也。我愛情冷に、常に汝を家に殘して、旅にあるに拘らず、汝は反りて愛情濃かに、我を待ち、我に代りて、母に事へ、佛祖の給仕につとめて嬉々たるは、我が大に汝に感謝する所也。

結婚の後、初めて清澤先生に謁せし時、先生曰く、「繫縛を作りたるよ」と。一切苦薩既に愛著によりて、生死の苦海を脫するを得ざりしと懺悔し給へり。我末代の凡夫、いかで其數にもれんや。旅にありて、常に心にかゝりしは故鄕におはす母の事なりし我は、結婚してより已來、汝が我に代りて、充分に母に事ふるを信ずるものから、母の事は多く苦とならざるに至りぬ。されど、罪の子、悶えの子たる我は、一の苦を脫して、他の苦に入りぬ。別離の苦悶、生木を割くの悲痛は新に得たる重荷なりき。實に先生が、實感を語り給ひしが如く、我は妻を得て、新なる苦痛を得たるなり、繫縛を增したるなり。さ

れどうれしや、我にはこの重荷を負ふべき力を如來より賜ひたり。我はこの苦痛の導きによりて常に御名の下に行くを得る也。

昔はダンテ、愛人ビアトリチエに導かれて極樂に入れりときく。我今は汝を愛と、汝を思ふの苦痛によりて、常に淨邦の光明に出入するを得るなり。感謝何ぞ堪へんや。繫縛と見し恩愛の汝は、如來が我を淨邦に導き給ふ、救ひの綱にてありしなり。かくて、如來が結び給ひし赤繩の契りを、御名の內に味ふことを得ること歡喜極りなきなり。

如來は、我信仰に色を施さんために、妻を與へ給へり。汝は我信仰に色彩を施す繪師なり。我天上の信仰に、浮世の色彩を施すは偏に汝の力なり。親に對し、朋友に對する愛情はあまりに淸らかなり。されど、わが汝に對する愛著の念には、汚濁の妄情の加はれるなり。而してこの汚濁の愛情によりて、一層深く如來の慈悲を味ひ、古聖が御名を摩尼寶珠に譬へたまひし敎訓を實感の上に味ふを得るに至りしぞうれしき。家を出で、妻子を捨てて、淨邦にあこがるゝ信念のみ高く、秋月の如く澄めるを尊しとのみ思へる我が、家にありて、母に待し、妻と共に、携へて淨邦の光明を喜ぶ、春花の如くのどけき信念を味ふに至りしは、偏に如來が我が妻として汝を賜ひしによるなくんばあらざるなり。世の論客が佛敎は家庭的の宗敎にあらずといひ、或は佛敎を家庭的宗敎なりといへる疑問の一大判決は、如來が我に汝を賜ひしによりて我に降れり。佛敎の信念は實に、汝と結婚の日より家庭的の光輝を放つに至りしなり。

客觀的に、或は批評的に見れば、その容貌、その性格に於て、汝は完全圓滿の婦人なりといふべからざらん。我、汝に勝れる容貌端嚴の婦人に對する時、その美に打たるゝことはあらんも。されど、我はこの婦人の容貌の上に、汝の容貌の上に滿ち充ちて見ゆる如來慈愛の相を拜する能はざるなり。我、

汝に越えたる品性高潔の婦人に對する時、その德に感ずることはあらん。されど、我はこの婦人の性格の上に、汝の性格に溢れて見ゆる如來慈愛の德を見るを得ざるなり。故に我は汝を以て、如來が我に異性の愛を味はゝしめ、且又我をして異性の愛を捧げしむべき、唯一の偶像としたまへるものなりと信ぜざらんとするも得ざるなり。玆を以て、汝は我が滿身の愛を受くべき機能を如來より授かりて世に來りし者なり。汝は我が總ての愛情を領すべき權威を有す。之と同時に我亦汝の滿身の愛を領するの權威を如來より得たり。かくて、汝と我とは、愛の絲に繫がれて、向上の一路をたどる身なり。いかでこの間に、男尊女卑、男女同權、女尊男卑の議論を容れんや。汝、我風采の擧らざるを厭はず、我學の淺きを嫌はず、我品性の卑しきを咎めず、我を唯一絶待の愛の偶像として、我に滿身の愛情を捧げくるゝこと感謝に堪へざるなり。

ダンテが愛人ビアトリチエを讃めんとて借り來りし、ホメロスが「彼女は浮世の母の娘とは見えず、たゞ神の娘とのみ」の語は、我今汝に贈らんとする語なり。我かくいふは汝の容貌の衆にすぐれたるによるにもあらず、汝の學德の人に超えたりいふにもあらず、汝を以て如來が我に賜ひたる唯一絶待の愛人と信ずればなり。汝を以て、我が異性の愛情を捧ぐべき如來が使としたまひし唯一の偶像と信ずればなり。汝の我に對する亦然らざらんや。汝が頃日贈りし白き櫻の花はダンテかホメロスの彼の語を引きし『新生』のその頁に挿みしは心に誓ふところのあればこそなり。

人の容貌は無常のものなり、差別のものなり。今日の美人明日一眼を缺くを計るべからず、今日の美人は、明日になりて、より以上の美人の横に悄然として立たざるべからざるを保せず。故に容貌によれる愛は無常なり、移り易きなり。

人の學德亦無常のものなり、比較的のものなり。學德によれる愛は、世の愛人の學德已上の人に接しては心動かざらんとするも得ず。故に學德によれる愛は無常なり、變じ易きなり。

我等が心を結べる愛情は容貌によらず、學德によらず、たゞ絶待の如來の御心を信ずる信仰に因る。故に我等が愛情は常住の道を行くなり。別れて變せず、死して代らざるなり。世にありては四の袖、淨土に往きては一蓮托生とは、信仰の上にたてる我等夫婦の謂か。我は結婚てふかゝる浮世的事柄の上に、かくも高妙なる絶待の光輝のかゞやきて、塵を化して珠となしたまへる大悲如來の大能に感謝せざるを得ず。何處までも行き屆かせたまひたるは如來の御心なるかな。

されば汝と我との夫婦の契りは、互の凡夫の愛情によりて臭骸相抱くが爲にあらず。汝の心に宿らせたまひたる如來と、我が心に宿らせたまへる如來とが、手を携へて、生死海に迷へる衆生を導かんために大靈の示現したまふところなり。我等二人は今や如來の器として、如來の御手の内にある身なり。故に我等は、凡夫愛著の結婚の上に降りたまへる、この高潔なる如來の示現に對して、恭敬を以て感謝し、かの禽獸に類する愛情に終らざるやうに、御名の下に常に如來の御心にたちかへるべきなり。

我等凡夫淺ましくも、此神聖なる夫婦の導きを浮世の愛情を以て沒し去り、如來の慈悲を忘れ淨邦の蓮臺を思はで、塵世暫しの家庭の和樂にのみ心とられんとするなり。然るに、如來は飽くまで慈悲にましまします。常に我等が警策を與へて、我等の迷夢をさましたまふ。

警策は折々降れり。就中、其尤も大なるは、今日我等の境遇なり。老いたる母は獨田舍の寒寺に、我は東都の寓に、而して汝は、その實母と愛妹とに看護せられて病院の一室にあるなり。かくて三人の家庭は、三所に別居する

の止むなきに至れり、悲みなからずや。三人所を異にするも、母上は寒寺を守るに勞多く、我のみは靜に古今東西の書に親みて日を送る平和の身、然るに汝は尤も重き荷を負ひて病床に呻吟す、我心日夜に亂れざらんや。我が近時の修養は此の苦悶の上に大靈の攝取を喜びつゝ、より以上の天をあこがるゝことにあり。則ち愛を以て天上に導く汝は、今や病苦に沈みて我が心を彼岸に導きつゝあり、感謝何ぞ堪へんや。汝の病は、我に對して、昔の維摩居士の現ぜし病の如く、け高き意義を有するなり。汝亦如來が汝に賜ひし此意義を自覺し、御名に力を得て、心靜かに病を療養せよ。寒風凛列の冬過ぎて、今は百花爛熳、春風駘蕩の時となれり。而して今日は我等の家庭の冬なり。故に我等は、まさに來るべき春を待つべきなり。汝が臥せる病室の前後櫻花を以て蓋へりと、この花散らん時あるも、汝が室否汝が身心に入り滿ち給へる如來の大慈悲は永久に離れたまふまじ。汝冀くば、一心にこの如來にたよれ。專念に御名を稱へよ。

如來よ、愛欲の廣海に沈沒する一凡夫伏して白す。爾は我を淨土に導かんがために、我が信念に色彩を與へんがために、塵の上に珠光を拜せしめんがために、淨邦を憧憬せしめんがために、迷界の衆生引接のために、我にわが愛する妻、房子を與へたまへり。我は彼女を妻として月の下、花の蔭、相携へて爾の御光を讃嘆し、雨につき、風につき、心靈相抱きて爾の御力を賴み奉るを得ることの光榮と歡喜とを感謝し奉る。願はくば垢情に沈める我を導かせたまへ。南無阿彌陀佛。（明治三十八年四月）

* * * * * * *

一日岡崎病院から、

キトクスグオコシマツ、

といふ電報が來た。私は驚いた、同宿してゐた佐々木君も驚いた。佐々木君は「先づ君がたつてくれ、その模樣次第で僕も行くから」といつて、私の荷物をこしらへてくれた。私は胸を踊らしながら汽車に乘つた。

こんな時にあわてるものではないと思うてみても、どうしても心が落ちつかず、小説を開いて見ても、いつも同じところばかり見てゐて、讀めない。

死んでをるのではなからうか。私を待つて——私が行くと、待つてゐましたといふことができるやうぢやとよいがなと、思ひは千々に亂れた。

あくる朝、岡崎についた、停車場から病院までの車はもどかしかつた。

病院について見ると、うれしや死んではをらぬ。「四五日毎日四十度位の熱が來るので、お醫士樣も首を傾けておいでるし本人が頻りにあんたを慕うてゐましたから、電報をかけたやうな次第でした。やうこそ來て下さつたとお母さんが申さるる。

本人は私を見て大によろこびました。それから二十日ばかり、私も病院にゐて看護をしました。二十日ばかりして熱も引いたから退院し、尙ほ二十日間ばかり古井の家で養生をした。其間にも熱はをり〳〵出た。然し其都度キニネで熱がとれたから、マラリヤである位に思うてゐた。熱が出ぬやうになつたから、山中溫泉に保養して七月の始に家に歸りました。この夏は海水浴に出かけました。醫士から肺が弱いと注意せられてゐましたから、いろ〳〵やつてみた。これから、健康が回復して、昨年秋に床につくまでは床につくやうなことがなくて、働いてゐました。

七

三十八九年の戰役中には、彼女は愛國婦人會のことにはいろ〳〵骨を折つてゐた。

四十年の春東京に來て、『沈思錄』の編輯を助けてくれた。同じ年の夏には『清澤先生全集』第一卷『宗教哲學』を編輯する時には常に筆記の勞をとつてくれた。今度『全集』出版につき校正等の時に彼女の筆跡を見て、校正もせずにじつと原稿を見つめてゐる事が度々あつた。

四十一年には、私が肺が惡いとの診斷を聞いて、彼女は少なからず小さい胸を痛めてくれた。

明治四十二年には私と共に京都の本山に參詣した。

明治四十三年五月には、母を奉じて東京に來て、私も共に善光寺に參詣した。あれも之も涙の種である。

四十四年の本山に於ける宗祖の御遠忌には、群衆を恐れて母も房子も參詣せずして私のみが參詣した。

四十四年の夏頃から、身體がだるい〳〵というてゐた。病院に行つてかうかといふこともあつたが、いつ一日床につくでもなく、母を助けて、健やかに働いてゐたのに、四十五年、卽ち大正元年の九月二十日にとう〳〵床についたきりに、たてなくなつたのであつた。あゝ、又しても愚癡の涙にむせます。（六月廿三日東京にて）

凋落

終

大正二年七月八日印刷
大正二年七月十日發行

著作者　曉烏敏
發行者　東京巢鴨町二丁目三五　原子廣宣
印刷者　東京本所區番場町四　守岡功
印刷所　東京本所區番場町四　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京巢鴨町二丁目三五　無我山房
『振替東京三一二二番』

定價金七十錢

著作權所有

慶應義塾大学図書

安藤州一譯　新刊

ソクラテスの教訓

金七十錢　郵稅八錢

ソクラテスの教訓は、先師清澤先生の色讀せらるゝ所であつた。爰を以てさきに「清澤先生の信仰坐談」を著はせし著者は、先師に接するの念を以て、敬虔に本書を譯出せられた。自己省察の宗教的根本義より、日常生活の指針、修養の要義等、巧妙なる氏一流の談話と、剴切なる譬喩は先師の人格を通して親しく活ける大哲人の坐談に接す感がある。

文學士木場丁本譯　近刊

プラトーンの教訓

金七十錢　郵稅八錢

本書が收むる所の『プロタゴラス』、『シムポジウム』、『フェードン』の三對話篇は、雄渾なるプラトーン思想の依つて立つ三脚である。一は當時の所謂學者プロタゴラスを對手として德の何物たるや論じ、二は樣々な性格の人物が集まれる愉快なる祝宴の談論中に至純至高の愛を讃美したる者、三はソクラテスが死に就く當日の光景を叙し、「哲人は常に死の問題を研究する者也」といひし彼が臨終の態度、肉の解脫、靈の永生の意義を詮明したものである。譯文はシュライエルマッヘルの獨逸譯により、平明なる日語體を採りてあるから何人にも容易に了解する事ができる社會に活動して勝利者たらんと欲せば實力を有せざるべからず。實力とは何乎金力乎權力乎學力乎本書は此等以上の力卽ち品性の力を皷吹することに於て天下無比の良書也。敢て勃興國民の精讀を慫慂す。第四版發行するにあたり特に先生に改譯を乞ひ難解の本書を容易に了解する事のできる樣努めたり。

理學士稻葉昌丸譯　改譯改版第四版

エピクテタスの教訓

金七十錢　郵稅八錢

曉烏敏著　新刊

凋落

金七十錢　郵稅八錢

最愛の妻が結核病で長い勞ひした揚句、とうゝ死んでしまふた、その妻を看護し葬つた夫が、其間の悲愁と悔恨と疑惑と信仰とを記したのが本書である。世の妻に別れた男、夫に先だゝれた女に是非一讀を乞ふ〻〻

山邊習學著　近刊

聖者の後から

金七十錢　郵稅八錢

本書は、著者が、最近五ヶ年間に於ける信仰經驗の記載である。或時は、家庭問題に衝かつて眞闇になり、或時は、死の權威に觸れて油汗を絞り、又或時は、功名と愛着と毒我の念を懷いて苦んだ著者が、親しく聖賢と師友の導きによりて、念々に大悲の誓願力に蘇つた實驗記が本書である。惡毒なる人の子の爲あに濺ぎ給ふ大悲矜哀の涙と、其大威神力は本書の中に躍動してゐると信ずる。（著者白）

清澤滿之著　十四版

精神講話

金三十錢　郵稅四錢

精神修養に關する先生の經驗を述べたまへる者を集めて一册子としたるを本書とす故に眞摯に自己の精神の修養に心がくる者又は熱心に內心の安住を求むる者一度本書を讀まば其所得蓋し尠からざるべし。

清澤滿之著

佛教講話

金三十錢　郵税四錢

本書の内容は倫理以上の根據、佛教の現利、他力信仰の發得、祈禱は迷信の特徴也、自ら侮り自ら重ずること、普通道德と宗教道德との交渉、咯血したる肺病人に與ふるの書等にして精神講話に依りて多大の指導を受けたる人は此書に依て得る處亦尠からざるべし。

清澤滿之著

精神主義

金三十錢　郵税四錢

精神主義は苦みの谷をたどれる迷者、慰めの光明を認めたる歡喜の叫びなり。
精神主義は社會に苦み、自己に惱める人が導びきの如來を信じたる安心の聲なり。
精神主義は事實の記載なり、經驗の懺悔なり吾等の精神狀態を有の儘に表白したるもの也。

清澤滿之著

我信念

金五錢　郵税二錢

これ先生の絶筆にして、また最も圓熟したる先生の信仰の告白也。されば何人も本書を讀んで信味の資となすべきもの也。

無我山房發行書目

佐々木月樵著

支那淨土教史

全二册　各册　一圓五十錢

淨土教の研究は實際的宗教として全佛教の研究也。本書は先つその時代に於ける佛教及びその他種々の思潮の大勢を尋ねて、常にそれを史上の背景として最も忠實に支那二千餘年間に於ける所の淨土教の教義及び信念等を最も廣く最も深く研究力説したるものにして現時まず〳〵紛糾を極むる教義問題解決の判決例也。

上野丹山著　海野香淨編

赤尾道宗廿一ヶ條講話

金十錢　郵税四錢

名に走らず利を捨て、念佛一枚になられた學者で、しかも難有い丹山嗣講が蓮如上人の御弟子で一代の希有人であつた赤尾の道宗の覺書廿一箇條を誰れも解るやうに丁寧に講話をして下された書である。されば全紙一々の文字に御慈悲が溢れて、讀む人の胸に泌み附いて下さる何處までも親切な書である。

淺井秀玄著

赤尾道宗廿一ヶ條讃說

金三錢　郵税一錢

越中五箇山の獅七入道道宗は蓮如上人の御育を受けた尊い信の人である。一日のたしなみには御開山樣の御座候處へまゐるべしとて、丈餘の雪を分けて遙々井波の瑞泉寺に詣で、又蕎麥の實や、割木をとれとして寤寐にも大悲を忘れじと心懸けられたと傳へられて居る。本書は彼か文龜元年十二月二十四日に思ひ立ちし自誡二十一ヶ條の各條下に經釋の要文を抽き聚めて其旨を詳にしたものである。一日のたしなみとしたならばたゞ一ツ詞なれども初めての樣な有難味が湧くであらう。

無我山房發行書目

曉烏敏著

清澤先生の信仰

金八十錢　郵稅八錢

彼は先づ哲學者として豫想された自らも亦かく期しつゝあつた、一朝感ずる所ありて忽ち麻衣求道の出家となつた。重れて智を研き行を勵んだかくて一派の革命を企てた彼は最後に絕對他力の信念に安住したのである。彼とは誰ぞや、敎界の偉人清澤先生である。今その生涯思想及信念を忌憚なく傳へたのが本書である。

曉烏敏著

歎異鈔講話

金一圓七十錢　郵稅十二錢

著者は眞宗內の一部の頭の古い人達から未來往生よりも現在安住に重きを置く異安心者と目されつゝある熱心なる信仰の宣傳者也。異安心か、正統かともかく敎界に新氣運を齎すべき大著は出でたり。本書は親鸞聖人の信仰の精髓たる歎異鈔を現代の上に色讀したるもの、著者九年間の苦心に成る靈感記也。

曉烏敏著

吾人の宗敎

金三十錢　郵稅四錢

宗敎は各自人心の奧秘に存する事實である。故に人心の善惡美醜によつて宗敎の色彩も異る者である。富豪に富豪の食あり、貧民に貧民の食ある如く智者に智者の宗敎があり愚者に愚者の宗敎がある。本書に記されたる宗敎は予の宗敎である。予が精神上の事實であるこれ實に予が心の奧の奧にきらめきし信仰の光である。是れ本書に示せる宗敎である。

無我山房發行書目

浩々洞編

清澤全集第二 信仰及修養

金貳圓　郵稅十二錢

明治時代にありて明治佛敎を建設し死に瀕しつゝあつた佛陀を蘇生せしめた唯一の偉人は清澤滿之先生である。京都帝國大學總長澤柳氏は『退耕錄』に福澤氏と並べて明治の偉人と推賞し、故藤岡博士は『國文學史講話』に明治の宗敎を云ふ人は清澤氏を忘れてはならぬと書たその清澤先生の全集の第二卷にして先生が信念修養に關する敎示を編したものである。

毎月一回十日發行

雜誌 **精神界**

壹部十五錢上半年分九十五錢下半年分八十錢一ヶ年分一圓七十錢

不平あり不安あり、これあるによりて人は酒に溺れ色に迷ひ、社會主義となる。國家の危き社會の不幸之に過ぎたるはなし。佛陀茲に見るあり靈的平安の一道を啓きて萬民を導き給ふ。『精神界』は佛陀の大道場也、人生の旅に疲るゝ者、死の問題におのゝく人は來りて本誌をよめ。

毎月一回一日發行

雜誌 **家庭講話**

卷部八錢半年分四十五錢一ヶ年分九十錢

家庭問題に泣く人、幸福なる庭家を造りたき人、又家庭にありて張合のなき人々は本誌を讀め。本誌は他力信仰に基きて、あらゆる複雜なる家庭問題を切り開き、明快に判斷し懇切に指導し常に活動の源泉たる信仰を皷吹しつゝあり。苟も假名を讀み得る人にして一度本誌を繙かば、如何なる家庭にある人も、其まゝ元氣ある生活に入ることを疑はず。

無我山房發行書目

紹益禪師提唱
今津洪嶽講義　全三冊

碧巖集講義

特價各冊一圓廿錢　郵稅十二錢

紹益禪師の提唱本則百章類則三百章を中心とし之に加ふるに斯道に造詣深き洪嶽師が垂示、本則、頌、着語、評唱に渉りて丁寧なる讀方、字解、講義を施したるもの實に禪門講學上に新紀元に作りしもの也かりにも假名を讀み得る人にして本書を繙かば萬人皆其快明の玄旨を探り得て岩の如き不動の精神となら ん。

神保如天著　全三冊近刊

從容錄講話

各冊金一圓五十錢郵稅各十二錢

從容錄は碧巖集と併稱せらるゝのみならず、殊に、內容の文字が文學的色彩に富むことは、古來禪界獨步と稱せらるゝ要書なり。本書は、序講四章において、本錄の概要、著者の傳紀等を述べ、本講百章において、原文の句讀訓點、和譯、字義、大意、講話の各項に分ちて、一語をも漏さず叮嚀の解釋と宗義の玄底を示しぬ。文章平易簡明。總ふり假名を附し、よく時代の思潮を汲んで、新進參禪者の要求に答ふ。初學者はこれを讀んで初めて禪の何物なるかを知るべく、久參者もこれを味ひて笑ひ自ら新たなるものあらむ。

石川禪師題辭　秋野老師序　神保編
森田禪師題辭　山田老師序　安藤編

正法眼藏注解全書

全八冊　豫約價各冊一圓五十錢　郵稅十二錢

本書は古德の註、解、疏、論說、の總てを收攬して、僅かに此の書一本さへあれば『眼藏』の文々句々の字義や典據を容易に了解せらるゝばかりでなく、各篇の要旨及び全篇に渉る『眼藏』の宗意、且つは古來學者の唱へし議論異說等をも明瞭に知悉せられ、さしも に難解難入と謂はるゝ『正法眼藏』も一目の下に會得せられ、隨つて彪大なる日本曹洞禪の特色、道元禪師綿密の家風を坐らに徹底する事が出來る。

佐々木月樵著

親鸞傳叢書

金二圓　郵稅十二錢

一本願寺聖人親鸞傳繪二卷、二親鸞聖人正明傳四卷、三親鸞聖人秘傳錄一卷、四綿織寺繪記一卷、五善信聖人親鸞傳繪一卷、六高田親鸞聖人正統傳六卷、七高祖聖人傳一卷、八高祖聖人御撰述目錄一卷、九高祖御眞影記一卷、一〇宗祖七十三輝考一卷、一一開祖聖人傳繪拜鈔記目錄一卷、一二親鸞傳雜事一卷、一三非正統傳一卷、一四評正明傳一卷、一五大谷遺蹟錄四卷、一六鶴のはやし一卷

現代に於て尤も深く博く親鸞聖人傳を研究したる著者は先きに『親鸞聖人傳』を公にして、未だ盡きざる思ひ胸に溢れて、茲に正しく本傳繪記を著す中に挿む所の十數葉の傳繪は中村不折畫伯が既刊親鸞聖人傳を讀み感興の中に畫きたる者也。繪と文と相待つて現代の新『御傳繪鈔』たるに耻ぢざるなり。

佐々木月樵著

親鸞傳繪記

金八十錢　郵稅八錢

佐々木月樵著

救觀濟

金二十五錢　郵稅四錢

世に救濟を談ぜざる宗教はない、我を救ひ世を救ふことは凡ての教のよりて起る所にしてまた人の宗教を求むる所以である。

本書は飽まで著者の實證に訴へて我絕對他力教の救濟を披瀝したものであります。

佐々木月樵著

秀存語錄

金六十錢　郵税六錢

本書はどうしても安心が出來ず、信仰が頂けぬ所から、常に眼を聖教にさらし、深夜俄かに名師の門をたゝき、或は高僧に接して種々の教をうけ、身は一派の學頭にてありながら名も知れぬ愚痴無知のいふことも、こはこれ實感の餘瀝なれば丁寧に之を記し置きて、それを自己一生の修養に供へ給ひし一蓮院秀存講師の全語錄なり。

佐々木月樵著

安心坐談

金六錢　郵税二錢

本書内容

一　私は萬事に不決着で困ります
二　私は生活題問に苦んで居ります
三　私は唯何となく心淋しく存じます
四　私は家庭の和合さへ出來ればと愚ひます
五　私は離別の悲みに堪えられませぬ
六　私は氣樂な生活が望みです
七　私は信仰を頂かれば歸られませぬ

佐々木月樵著

親鸞聖人傳

金二圓五十錢　郵税十二錢

本著書は古今の諸傳は勿論當時の古文書古記錄等をも研究綜合し、更にまた自ら全國の遺跡を巡拜踏査して前後滿九年間の苦心に成りたるもの、加之他力教の教理と信仰と歷史とを聖人の九十年間の生涯中に縮寫したるを以て、人は本書に依りて單に傳記及び其教旨を領得するのみならず必ずや之に依て偉大なる人格と不盡の生命とに接觸すべし、附錄「親鸞傳一覽」は古今の親鸞傳七十八部及其梗概を錄す。

文學士　近角常觀著

親鸞聖人の信仰

金七十錢　郵税八錢

親鸞聖人の信仰は他力信念の極致にして來世を照す唯一の光である。本書は近角先生が同一信念に便りて直ちに聖人の全精神に接觸せられたる實驗の告白である。死後が恐しい人、罪惡に戰く人、病苦に沈む人、人生の無意義をかこつ人、生活難に苦む人々はいかにしても本書を讀まねばなりません。

金子大榮著

讃仰錄

金二十錢　郵税二錢

心の奥底まで汲みに汲んで其處に一道の光明を認め精神上のあらゆる問題を解決して人生々活の基礎を示したるものは本書なり。讀者の感銘徹底せんこと恰も白刃に觸るゝの概あらん。

中島覺亮著

異安心史

金七十錢　郵税八錢

本書は著者十數年の苦心によりて、法然、親鸞兩聖人の時代蓮如上人の時代を始め明治近代に至るまで滔々七百餘年間の異安心者の傳記主張及之に對ずる東西兩本願寺の處置調整等を述べたるもの一般僧侶は勿論一般の信徒は必ず之を讀んで自己信念の鏡と致さればならぬ。

文學博士　南條文雄著

歎異鈔講話

金八十錢　郵税八錢

歎異鈔は親鸞聖人の他力信仰の書也といはんより親鸞聖人その人といふ方が適當である、所謂我聖人の心のうちに絶對他力の大精神の凝り固まつたのが本鈔である。本講話は博士が心血をそゝいで何人にも分るやうに其深意を發揮せられたものである。

南條博士著

同朋心得十ケ條講話

金十二錢　郵税二錢

眞宗の御同行が日常是非共心得ねばならぬことを南條先生が丁寧に御話になつたのを多田鼎先生が懇ろに註を書き加へたる親切なる書物であります。

文學博士南條文雄著
梵本和譯五譯對照

和譯無量壽經

梵本和譯二譯對照

和譯阿彌陀經

金一圓五十錢　郵税八錢

梵本から直ちに和譯にした御經は建國已來この書が始めてゞある。本書には丁寧に從來の五存大經を對照してある。尚ほ卷末に阿彌陀經の梵本和譯を附錄としてある至極結構な書である。

安藤州一著

清澤先生信仰坐談

金三十五錢　郵税四錢

澤柳先生の序文に曰く「余は世の修養に志せる者にすゝむるにこの小册子を再三熟讀せんことを以てするものなり」と。先生今や世にあらざるも世人は必ずこのうちに活躍せる先生の面影に接して長へに無上の教訓を受くべし。

安藤州一著

染香錄

金七十錢　郵税八錢

宗教は智惠や分別で解るものでない、幸に解つた所が解つた丈では我ものでない。我絶對他力教の信念は全く如來よりの賜物である。この信念には些かの懸値もない。この懸値なき信念を趣味多き事例により懸値なくあらはしたのが本書である。

安藤州一著

生活問題

金八錢　郵税二錢

本書の内容

一。人生と生活問題
二。釋尊と生活問題
三。孔子と生活問題
四。ソクラテスと生活問題
五。他力信仰と生活問題

文學士　本多辰次郎著

高僧逸傳

金二十錢　郵税二錢

一西敎寺潮音師　一垣山和尙　一七里恒順師　一能登の頓成師　一雲華院講師　一五岳老師　一香樹院德龍師　一一蓮院秀存師　一貫昭國師　一公現法親王　一尊融法親王　一清澤滿之師　一南隱禪師　一行誠上人　一藤井宣正師

其他四十餘の近世高僧の逸傳なり

齋藤唯信著

佛敎倫理

金二十錢　郵税二錢

宗敎と倫理との關係は古往今來の大問題也。著者。佛敎上に於て一隻眼を開き、この大問題に最後の解決を與へんとし、玆に本書を提供せり。理路清明、文章平易、蓋し近來社會の要求に對する快著也。

和田龍造著

宗敎問題

金六十錢　郵税六錢

宗敎の本質とは何ぞ、信仰とは何ぞ宗敎の今代に於ける活動任務は河ぞ、是等の問題に注意を注ぐ人は本書を讀め、穩健の見、中正の議、空論に走らず偏僻に墮ちず、讀みて心靈の糧とすべく、之を身に行ひ其効果の適切なるを覺ゆ。

多田鼎著

恩寵の宗敎

金二十三錢　郵税四錢

從來の東洋の思想界の根底には恩の思想が行渡つて居た。然るに新時代の人心にはこの思想が餘程薄らいで居る、何となく生活の上に溫かみがなく、自殺者がふえ、爭論の盛なのはこの爲めである。恩の思想を中心とせる佛敎は玆に是非共唱へられねばならぬ『恩寵の宗敎』たるすむるはこの故である。讀者に慰安策勵のあたへらるゝことを疑ひませぬ。

多田鼎著

佛傳涅槃篇

金八十錢　郵税八錢

夕日が宇內に光被するやうに釋尊は將に涅槃に近いて鮮であろう。本書は謹嚴の筆を以て六歲の日子を豐し、南北佛傳及び廿餘種の經典を纂譯したるもの實に釋尊の血であり精髓である苟も釋尊の尊容に接せんと欲する人は本書を熟讀せねばならぬ。

多田鼎著

大聖釋尊

金八錢　郵税二錢

大聖釋尊の人格がいかに偉大であるかを最も簡單に最も尊く書きあらわしたのが本書である。

多田鼎著

正信偈講話

金一圓五十錢　郵税十二錢

正信偈は、親鸞聖人と共に、他力佛教の大道を歩む者の朝夕讀誦する讃頌也。斯道の教理及其歴史悉く此に示さる。本書は其譯文を掲げ平易に一偈の字義大意を講じ、具に現代の思潮に映じ來る其の新清の奥義を明にせり。苟もかなを讀み得る程のものは必ず茲に斯道の靈旨を領得すべし。六版既に盡き今回第七版出來せり。

多田鼎著

歎異鈔講話

金四十五錢　郵税六錢

第一章親鸞聖人の生涯及眞宗　第二章『歎異鈔』及佛教の中心　第三章本願の内容(一)不可思議　第四章本願の内容(二)悪人正機　第五章信仰の絶對性　第六章悪人の宗教　第七章信仰上の生活

多田鼎著

親鸞聖人

金五十錢　郵税八錢

最も謹嚴なる態度と、平易簡結の文章を以て、聖人が一代九十年間の行迹を述べてあまさず。聖人が熱烈なる信念を傳へて憾遺なからしめんことを期しぬ文字を大きくし、振假名を附したれば、老人、幼年者もこれを讀んで身は遠く聖人の膝下にある思あらん

無我山房發行書目

山邊習學著

佛弟子傳

金一圓七十錢　郵税十二錢

十六羅漢の外尚十數人の詳傳を載せ苟も經典に現れたる諸弟子の事蹟は殘らず之を網羅せり。舍利弗、目連、迦葉、阿難等の宗教的大人物が大聖釋尊を中心として當時の社會に活躍せるは絶代の偉觀也。

赤沼智善
山邊習學　共著

教行信證講義　教卷　行卷

金二圓五十錢　郵税十二錢

今涉本書は先づ原本を校合して一段毎に親切なる本文の講述なし、要所々には東西各派碩學の見解を列れ進んで燃犀の筆を以て全部に横ばる熱烈なる信火を耀かしてゐる。且つ卷頭には註書講書の解題本典成立の動機、年時一部六卷の綱格一宗教義の大綱等を明かにした。かくて讀者は本書に依りて容易に活ける聖人に接することができる。

柏原祐義著

三部經講義

金二圓　郵税十二錢

今迄の講義は餘りに專門的にて門外者に了解できなかつたのは佛教上に於ける最大缺點である本書は讀方字解、文科、大意、講義、餘義の各項を設け極めて平易に而も丁寧懇切に解釋し初めて佛教を學ばんとする人によく了解することができる特に序講十三章は淨土教の歴史及び教義の大綱を示し三部經相互の關係を詳述したる新しき文字である三部經獨學者の唯一指針なり。

無我山房發行書目

浩々洞編

鸞聖人親 御傳鈔

金三錢　郵税二錢

御傳鈔は本願寺三代目の法主覺如上人の親選にして親鸞聖人傳の最も古きもの也。而して毎年報恩講に於て拜讀するものはまた本書なり。故に施本用として最も適當なるもの也。

浩々洞同人著

鸞聖人親 御傳鈔講話

金一圓七十錢　郵税二十錢

本書は親鸞聖人の六百五十回の聖忌に當り現代に尤も深く聖人を渴仰し、尤も厚く聖人を體現しつゝある浩々洞の諸師相謀りて本鈔を繙き謹みて聖人の信仰と生活とを江湖に披瀝せんとして成りたるが本書なり。本書には各段毎に字解と大旨を掲げ、次は至趣を講ぜしもの、尚ほ『四幅御繪傳』縮寫彩色摺と及び其詳細なる『繪とき』とを附す。

浩々洞編

歎異鈔

特價金三錢　郵税二錢

本書は絶對他力の信念を、最も明白に無遠慮に宣べさせられた。古今一切の先覺より聞くことの出來ぬ。特別の思召が、本書によりて味ふことが出來る。

無我山房發行書目

暁烏敏著

人々の死

金五十錢　郵税八錢

死ぬのがいやだ、死なればならぬ。死は人間に對する尤も強き權威である。死ぬときには、どんな氣持がするのだらう。安心して死なれる道はないか。本書は死の幕を開いて、そのあちらに樂邦を眺めた人のいろ〳〵を書いたものである。死にともない人、死の恐ろしい人は是非本書を讀んでください。

柏原祐義　禿義峯編

香樹院語錄

金七十錢　郵税八錢

本書は、御自筆の自督帳や御門弟の御手控から最も私共の信念の鏡となるものを謹選したもので云はゞ師の精神の全體である。信仰は得やすくして得難しときびしく誡め、又得難くして得易しと優しく導かれた所の嚴烈と溫厚との生きた力である。編者は本書を以て自らを打つ鞭と致したいのであります。

禿義峯編

安心小話

金五十錢　郵税六錢

遠くは三四百年の古より近くは明治の今日に渉り、上は一代の碩學より下は一介の野翁に至るまで、二百二十餘項の他力安心の自督の佳話を集めたのが本書である。胸をえぐらるる話、涙のでる話、手を打つて喜ばるる話、一たび繙けば卷を覆ふを忘れしむ。著者は家父と共に多年の苦心によりて漸く本書を編んだ。世にありふれたものと異つて一話一話が信仰味の玉である。

無我山房發行書目

曉烏敏著

惠空語錄

金八十錢　郵税八錢

親鸞聖人滅後二百年にして蓮如上人あり、蓮如上人滅後二百年にして我惠空師あり。能く絶對他力の大道を宣布せられたり。師は琢如上人の信頼を受け、一派最初の學頭となり信仰の皷吹に努めらる。本書は師の著書中より予の胸に響ける教訓を集めたる者也。

編者謹白

曉烏敏著

求道錄

金三十錢　郵税四錢

一人生の苦味、二落第、三人の我頭を搏つ時に、四男らしき服從、五一念の滿足は永遠の滿足、六如來の大命、七斷乎としたる生活、八彼の物は彼に我が物は我に、九同情を求むるは煩悶の元也、一〇他の罪を數ふるは自の罪を滅するに非ず、一一馬鹿にせられたりとて怒るは馬鹿也、一二勝敗、一三人の自分の同情を受けざるを煩ふ勿れ、一四世の中の事は一條繩では行けぬもの也、一五死及死の觀念が宗教及道德に及ぼす影響

曉烏敏著

佛教入門

金二十錢　郵税二錢

信の一字は佛教の骨であり髓である。これは佛教の門であつて亦宝である。本書はこの信を簡明に說けるもの。自己とは何ぞや、如來とは何ぞや、信仰とは何ぞやの解答は、本書が平易なる文字の中に生々と現はれてゐる。佛教によつて精神の革命を希ふ人に一讀をすゝめます。

釋宗演序
日置默仙序　來馬琢道編

禪宗聖典

金欄表裝一圓三十錢　皮表裝一圓十錢　クロース綴八十錢　郵税各八錢
特價

知恩院法主序
增上寺法主序　望月信道編

淨土宗聖典

金欄表裝一圓六十錢　皮表裝一圓四十錢　クロース綴金一圓十錢　郵税各十錢
特價

日蓮宗管長序　柴田一能編
顯本法華宗管長序　山田一英編

日蓮宗聖典

金欄表裝一圓四十錢　皮表裝一圓廿錢　クロース綴九十錢
特價

禪宗の經典祖錄百餘種を網羅し、和訓し、振假名を附し、誰にでも讀み得る本邦未曾有の寶典。編者十數年の蘊蓄を傾けて今や世に出づ。禪を知り禪に參ぜんとする者は先づ本書より入れ。內容目錄は申込次第送呈す。

淨土宗聖典は淨土宗の全分を打つて一團となせる聖典也。卽ち淨土宗の信仰。淨土宗の經敎、淨土宗の儀式、淨土宗の起原及び法然上人の人格を知らんと欲する者皆本書を讀むべし。特に後伏見天皇の勅命に因りて撰集されたる四十八卷の傳記は鎌倉全佛敎の具體的標示にして修養書の上乘たり。これ本書が淨土宗の權輿にしてまた聖典たる所以也。

本書は世界的大敎典たる法華經と絶世の敎傑聖日蓮の遺文を以て組成す。法華經一部八卷は音訓兩點として開結二卷は訓點として之に要品を和訓す。御遺文は御鈔八十餘章を大意類、宗要類、敎義類及御消息類等に分ちて書き下だし之に總ふりがなを附したれば全篇何處を見ても讀めぬ處なし。是れ實に本宗未曾有の聖典にして國民必讀の要書也、附錄として御傳記讚經要文、回向文等の全部を網羅す。

浩々洞編

佛教辭典

金二圓　郵税十二錢

佛教本典の要語各宗教義の術語は勿論、國史國文等を始めとして苟も佛教に關する所のものは、梵漢和に渉りて始んど之を網羅し盡したり、その解釋の引締まりて簡明平易なること、世間讀書家の一日も座右に缺く可からざることは佛教界の『言海』として宗教家、教育家、その他各方面の學者の推奬する處となれり。敢て一般讀書家に謹告す。

加藤智學編

簡易眞宗聖教

前編特價九十錢　郵税八錢
後編特價一圓廿錢　郵税十二錢

何れの宗教に於ても是非簡易聖教はなければならぬ。しかるに眞宗に於ては未だ完全に編纂せられたものがない。編者は多年の苦心を累ね、やうやく我眞宗簡易聖教を編纂した。漢文は全部を和譯し且つ各聖教の全意を解し得る樣に文章を抄成し七祖聖教の如き難解のものも皆讀み易く解し易からしめたり。尚ほ本書の内には七祖聖教假名聖教眞宗法要に漏れて居る幾多の有難い聖教が加へられてあるから一度本書を繙けば一宗の法藏を深く廣く採ることができる△内容目錄進呈△

連枝　大谷瑩亮序
連枝　梅上尊融序

眞宗聖典

特價　金欄表裝金一圓廿錢　郵税
皮表裝金一圓
クロース綴金七十錢　各八錢

大派用聖典は立花師譜節の伽陀文類正信偈念佛和讃二陶三陶五陶式間念佛等を收む、本派用聖典は澤圓諦師章譜の梵唄禮讃及三帖和讃全部を收む、而して各聖典に親鸞聖人全書及蓮如上人全書の内重なるものを收む、故に本書一冊を懷にせばいかなる場合にても不便を感ずことなし。

無我山房發行書目